

加藤大尉は飛行第〇聯隊にあつて腕を撫してその目を待つてゐたが、同十二年九月九日遂に待望の命は下つた。

加藤大尉は士官学校入學中、用具、困包品の組解く間もなく、中平部隊長同乗機を操縦して、勇躍征途につき、荒波吼ゆる玄海を越へて〇〇に集結した。

其の後、滄陽河遼江作戦に、或は德縣附近の戦場に、或は大黃河渡作戦に、濟南攻略、將又南部山東省掃蕩戦、徐州會戦に、空中勤務者として、地上友軍に貢献すること極めて大にして、その操縦の技たるや實に神の如しと言ふ、又単機よく敵中に入り、軍の爲め重大なる敵情を搜索し、或は編隊を指揮し、果敢なる爆撃を以つて敵を震駭し、以つて北支戦闘間に於ける功績は實に偉大にして萬人の敬慕措く能はざる所なりき。

殊に昭和十三年三月二十五日、歸德飛行場の攻撃に際しては、〇〇式偵察機をもつて克く敵機二十五機と對抗し、内十九機を見事に撃墜したのは、陸軍の眞價を發揮したものと言へる。

昭和十三年八月部隊編成と共に、新編成に入り、漢口攻略作戦に参加のため、北支の思ひ出の空をあとに、戦機燃す揚子江岸の〇〇基地に移動した。

その後〇〇、〇〇と逐次基地の前進につれて移動し、數十萬の敵が天嶮を恃みに必死の防禦をする大別山々系を翼下に壓し、或は敵情搜索に、或は爆撃に能く、その任務を遂行し、赫々たる戦功を樹てた。

敵が最後の牙城たる漢口の攻略戦中、地上友軍部隊が、克く嶮難を突破して敢行した包围の完成は、實に加藤大尉の機宜に適した勇敢なる協力に負ふ所甚大なるものがある。

かくて十一月、上旬中隊は作戦任務を解かれ幾多の會戦に赫々たる武勳を樹てた〇〇式偵察機に別れて新鋭機に改變のため〇〇に集結して次の作戦に備へてゐた。

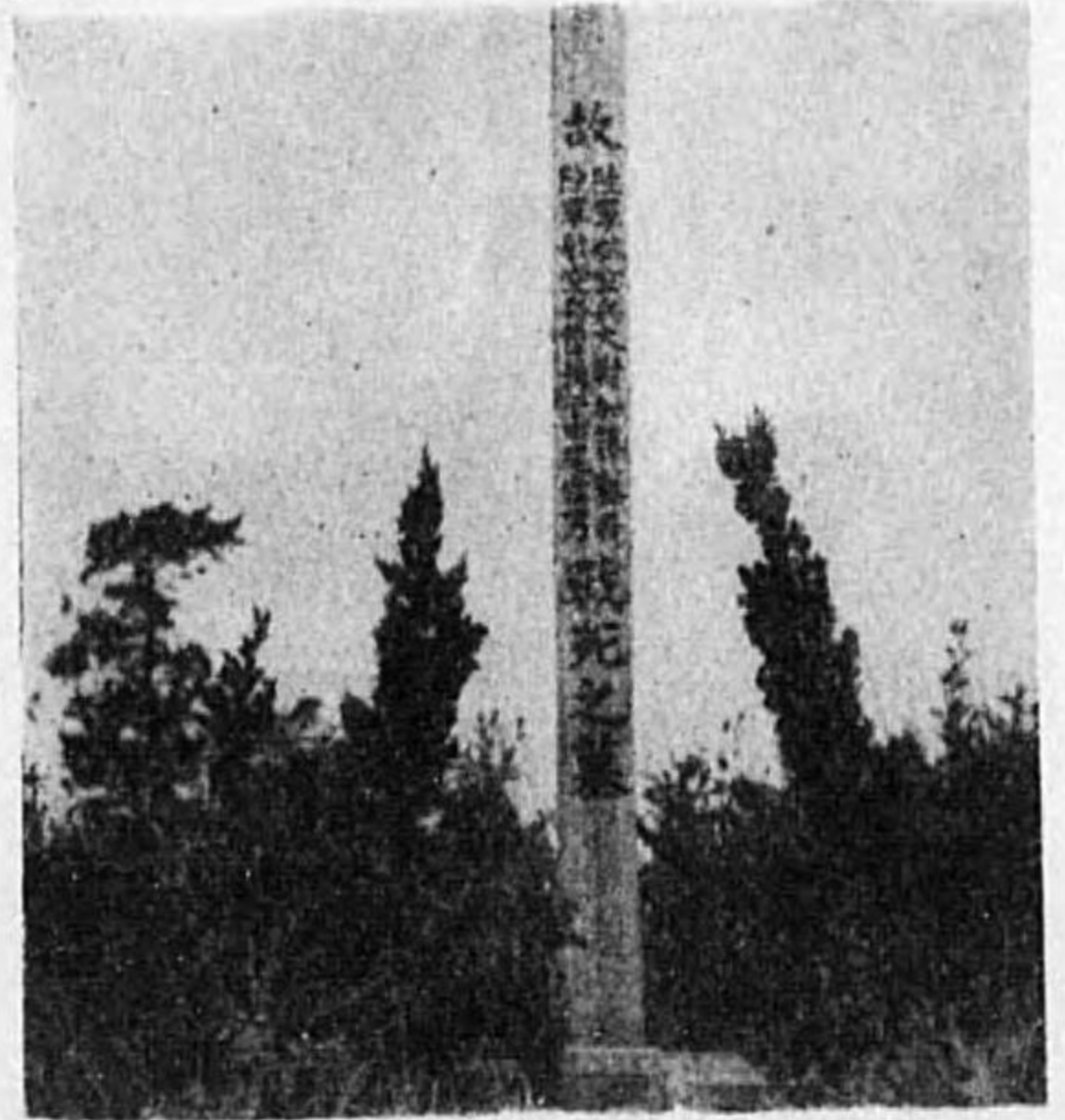
かくして昭和十三年十二月一日、命令によつて洞庭湖南側地區爆撃目標搜索の任務を受けて、千田尾曹長同乗、〇〇飛行場を勇躍出發したが、この日朝來の悪天候で〇〇米以上の高度を取ることが出来ず、極めて危険な低空飛行を行ひながら漢口に向ふ途中、敵防空火器の集中を受け、不幸にも搭乗者が負傷したので、涙を吞んで基地に引返したが、出血多量の爲めに遂に力盡きて飛行場を眼下に眺めながらも壯烈な戦死を遂げたのである。

會津武士の血をひく加藤大尉の殿父は、今尙現籍地で健在であり、その兄藤吉氏は帝國在郷軍人會の分會長として銃後公職に奔走してゐる。

又弟の喜代藏氏は、日立航空機株式會社に勤務して、飛行機製作に餘念がなく、職域奉公の誠をつくしてゐる。

加藤大尉がその兄、加藤藤吾氏、在郷軍人分會長及び分會員に宛て、次の手紙を送つた。

これは蔣政権が最後の堅城と頼んだ武漢三鎮が、我が皇軍の前には、何等の威力もなく陥落した、後一ヶ月位だつてからの信りである。  
拜啓 御多忙中にも拘はらず御通信に接しまして有難く厚くお禮を申し上げます。  
晩秋も愈々名残りを惜しむる頃となりましたが、分會長殿(殿父長吉氏)始め御一同様には、益々御勇健にて、應召のため残り少くなつた會員御一同、力を合せ銃後の護りに専念せられる由、承り何より事を陣中にて遙かにお喜び申し上げます。  
お蔭様にて小官も至極壯健にて、聖戦に従事致して居りますから他事乍ら御安心下さい。  
國民齊しく鶴首して居りました武漢占領より早くも一ヶ月を経過しました。殘敵掃蕩と共に進んで岳州を占領して居ります。  
抗日作戦の據點たりし武漢の地に來りて、轉た感慨無量なるものがあります。揚子江を遡ること七〇〇哩の上流に軍艦や、大きな汽船が横付けになるのを見ると、全く河とは思はれません。  
まるで海の様です、武漢を占領したりと雖も、戦はこれを以つて終了せるものでなく、更に更に一段の努力をもつて、軍民一致、世界平和を擁護する敵を撃滅せねばなりません。  
皇軍の占領地域は幸ひ、日増に治安を取戻し、悪魔の手に操られし、支那民衆も、正義人道を以てする皇軍に感謝しながら、新興支那の建設に邁進して居ります。



この度は支部及び聯合支部の武道大會に於て優勝せられしとか、現役軍人を凌ぐ精神と、武技心強く感ずると共に、邦家の爲め誠に慶賀に堪へない次第と存じます。

堅忍不拔、馳れて後止む、是れ我が會津が世界に誇る傳統的「白虎隊」の精神にして、今般の武術大會にも如實に現はれてゐるものと察します。

我等現役軍人も亦、此の精神を以て、外敵に向ひ不馴れな氣候風土、惡病流行下にありて本領を發揮し

てゐます。出征軍人表を拜見致しまして、狀況實によく判りました、是等の中には一家の大黒柱たる人も多數ある様に見受けられます。

長期に亘るに従ひ、益々皆々様の手で援助下されん事をお願ひする次第であります。故郷は四圍の高山に、早や白雪を見る頃と察し上げて居ります、會津平地を白雪に包む時期も遠くない事です。

酷寒の節も迫つて参りますから、益々精神を緊張して、良兵良民の實を擧げ、以て國民の模範となり且つ善導せられんことを願ひ致します。

末筆ながら分會長殿始め會員御一同殿の御勇健を戰場にてお祈り申上げます。先は簡筆ながら御返信まで。

加藤藤吾陸軍航空兵大尉は、福島縣北會津郡館内村大字伊和保甲二〇四八、加藤長吉氏の三男として明治四十四年一月十九日に生れた。

大正十四年三月、荒井館内組合立尋常高等小學校を優秀なる成績にて卒業。

昭和六年一月、現役兵志願にて飛行第五聯隊に入隊す。同年十二月、陸軍航空兵伍長勤務上等兵(兵長)に進級。

昭和七年、上海事變に出動、江南の地に赫々たる武勳を樹て白色桐葉章を附與せらる。

同七年十二月陸軍航空兵伍長に任ぜらる、兵備改變の爲め飛行第三聯隊轉屬。

同、所澤飛行學校操縦學試驗に及第し、操縦學の課定を修了。

かくて操縦者として暗濼たる東亞の風雲を眺めつ、滋賀の湖畔に日夜録武に精勵、爾後成績優秀なるにより、軍曹、曹長と逐次昇進す。

昭和十一年十二月、陸軍士官學校に入校、同十二年九月卒業原隊に歸隊。

昭和十二年九月〇〇出動。

昭和十三年十二月一日戦死、任陸軍航空兵大尉。

遺族原籍地、嚴父加藤長吉氏。

よへと還らぬ陸の荒鷲加藤藤吾大尉の赫々たる勳功は前述の通りだが、加藤大尉と運命を共にした荒鷲千田尾富男陸軍航空兵准尉(當時曹長)の兩勇士の慰靈祭は〇〇で行はれた。

祭壇に兩勇士の遺骨をまつり、各方面からの花輪、供物を供へ、關係者參列、僧侶入場、一同體列、まづ讀經に初まり、參列一同焼香あつて、部隊長、隊長の弔辭、弔文の朗讀があつた。

かくて再び英靈は永久に、同隊と別れる日の、悲しみの讀經あり、一同焼香して式を終り、その兩勇士の遺骨は戦友にまもられて、内地に無言の凱旋をしたのであつた。

〔寫眞説明〕 一五一頁故加藤藤吾大尉、一五三頁加藤大尉戦死の地。

### 初陣に敵機四機と交戦三機撃墜の殊勳

— 岐阜商水泳選手時代より活躍の加藤勝利准尉 —

學生時代には水泳選手として知られてゐたが、ひと度現役志願するや、大空へ進出して航空兵となり、勇躍出陣しては「軍部隊」の猛鷲として活躍した、我が陸の荒鷲の中でも傑才であつた彼。

それは加藤勝利陸軍航空兵准尉その人である。

加藤勝利准尉は陸軍第二十一回論功行賞に際して功五級、旭七等の金鷄勳章を授賜、然も武人最高の榮譽である「殊勳甲」をもつて發表されたのである。

小學校を優等で卒業すると共に、野球で知られた岐阜商業に入學し、こゝで水泳選手として活躍したのである。

岐阜商業卒業後、大空への憧憬から現役志願して入營、思ひかかつて愈々航空隊に入ると専心人一倍の勉學で、昭和十一年十二月には早くも航空兵伍長に進級した、その後累進曹長となつて、ノモンハンに勇名を轟かせた「軍部隊」の一員として働いてゐたのである。

かくてその部隊の名に恥ぢず、その初陣に於て愛機に敵弾四發を受けながら、敵空軍四機と渡り合ひ、遂に三機を撃墜したのである。

當時初陣の手柄話である戦況をみよう。この軍部隊の加藤部隊長は自ら操縦桿を握つて戦線に向ふ猛將だけに、勇將の下に弱卒なしと、各れも猛鷲揃ひで敵空軍を縦横無盡に蹴散してゐたのである、我が加藤准尉(當時曹長)も、俊敏軍の如く働いてゐたのである。

このノモンハンの戦場、ホロンバイル大平原から吹き寄せる熱風はまるで、息をひきとめるかと思はれる暑さである。

〇〇日午後二時二十分、加藤部隊長自ら愛機を操縦して、命令一下哨戒のため爆音勇ましく次々に離陸して行く。

眼下に見降ろす一望のもと、帯狀のハルハ河、そしてポイル湖など、ホロンバイル大平原を懐きこんで白く眼に沃み入る。

二番機の加藤曹長は、けふが初陣だ、幼少の頃亡くした父の在りし日の姿をシツカリ眼に焼きつけて「父よ、御覽あれ、必ずけふこそ、めざましくわが初陣を飾りますぞ」と決死の覺悟を眉宇に浮かべて



文字に結んだ口、この時である遙か密雲を衝いてボカリと姿を現はした豆粒程の敵機それが五機、二十機あつて五十機編隊だ、然も敵空軍が誇るイ十六型戦闘機だ、見る見るうちに近付いて来る、味方は僅か〇〇機である。

戦闘開始、ゲンダンゲンダン、飛行機の爆音に混つて機関銃が小気味よく火を吐く、大空中戦の火蓋は切られたのである。

加藤曹長は矢庭に近付きさま機関銃弾を浴せかけた、確かに手應へあつたと思ふ、腕に自信の狂ひはなく、敵機は太い黒煙の尾をひいて墜落した。

「やつたア……」と凱歌をあげる間もなく敵四機が包圍して来た、四對一の決戦であるが、今はもうすつかり自信もつた。

「さア来い」と四機を向ふに廻して獅子奮迅である、そして遂に敵二機は火を吐いて墜落して行つた。

だが残る二機は、仲々頑強に組みついて離れない、然も敵弾が愛機に命中したらしい、相當ショックを受けたが有難い事には何の故障はない。

萬一の場合には自爆があるのみだ、と思ふ間もなく又一弾が當つた、然し何處に當つたのか見當もつかない「よしかうなれば死に物狂ひだ」といよ／＼決死の覚悟も物凄く、あく迄組付いて離れず、又一機を撃墜した、敵機は火達磨となつて墜落して行つた。

残るはたゞ一機だ、だがこの一機は僚機が次々と撃墜されたので、最早戦闘力を失つてフルスピードで逃走してしまつた。

この大空中戦に於て、我が軍部隊は實に敵機十六機を撃墜したのであつたが、そのうち四機は加藤曹長初陣の功名である。

然も〇〇基地に歸つて機體を調べると四機の敵弾を受けてゐた、が各れも念所をはづれてゐたので戦友は喚聲をあげて「よくやつた、えらいぞ」と賞讃をあげかけた、故郷でその後の報告を受けた母堂や出身校である岐阜商業では、郷士の誇り、母校の誇りと歡聲をあげた。

初陣から敵機四機を撃墜した殊勲者、猛鷲加藤勝利准尉の出征に對して送つた通信は、遺書であり、故勇士の人となりを知る事の出来るものであり、又銃後國民に教へるところ多いものでもある。

今、左にその手紙を披露しよう。

謹啓、小生この度待望久しき大命を拜し、勇躍征途に心も軽く出發致します、故郷にありてすら何等母上様にも孝養出来得ざりし小生をお救下さい。任地に参りますれば必ず立派な御奉公を致します、母上様御身御大切に喜致郎、政雄を御指導下さい、加藤家を隆盛させて下さい。我々は今更命は一秒たりとも未練はない、きつとよき死を得る事と存じますが、未だ修業者の身故只殘

念です。

小生戦死に際しては、母上様の良き様、手當金等の分配を願ひます、忙がしき日も過ぎ又岐阜の町にての思出も多く、一人感してをります。

暇があれば村瀬様、松尾様へも、又町内の方々へも傳言致したいのですが、それも今の所出せません、母上様から呉々もよろしく。

先に榮作征き、又文平兄も征き、只一人なげき居たりし半ヶ年、遂に我にも大命が下り我は空から、兄等の援助に奮勵する。

では征つて参ります、決して御心配下さいませ、日曜が来ても岐阜へは一寸外出も出来ませんが、手紙で外出の通知は致しませんよ。

母上様、大變長くなりました、呉々も御身御大切に暮し下さいませ、月々はきつと御送金致します。

母上様

勝利

又喜致郎に告ぐ、として次の如く認められてゐる。  
愈々兄も征つて来る、呉々も言ふた通り、現在の職に忠實に、お前も各れ甲種だ、大いに勉勵せよ、兄なき後は弟を良く指導せよ、我儘をさせない様に時々家へも行き、母上を喜ばせて呉れ、馬島方、河村方、内田方へも行きたいが出来ない、お前からよろしく頼む、兄の言葉を忘れず精進せよ——と情義をつくしてゐる、又政雄に告ぐ、として——

大兄も愈々戦争に征くよ、きつと負けない強い飛行家として戦ふよ。

お前も體が弱いからと言つて、それに負けてはならない、どの様な偉い人でも、初めから偉い人はないのだから、大いに勉強し、何處までも努力、努力で日を過ごせ、母アちゃんや、喜ちゃんの言ふ事を聞き何年後か、大兄が見る時は立派な人になつて呉れよ、兄弟共に負けるな、負けないやうに勉強しよう、身體を大切にしないさい、さようなら……と、悲壯にも似た手紙は各務ヶ原飛行場から送られたものである。

次にノモンハンからの最後の通信をみやう、そこにも母への孝養、兄弟愛がしみじみと察せられる。

拜復、〇〇日御手紙本日到着、有難く讀まして戴きました、又ジャケツ入りの小包も無事到着しました故御安心下さい、娯樂品も入り大變嬉しく思ひます、又小生出せし書簡も無事着いた由、何よりでした本日俸給を貰ひました故同封致し送ります、私も二十三日雲低くして三機で出動致し友軍地にて地上不明になり、夜の八時頃不時着致し、一時はどうなる事かと思ひ、十時頃まで蒙古人家にて暮して居ましたが丁度折よく日本の警察官の自動貨車が通り、警察分署にて夜を明し、二十四日午後二時頃、無事傷もなく歸りました故御安心下さい。

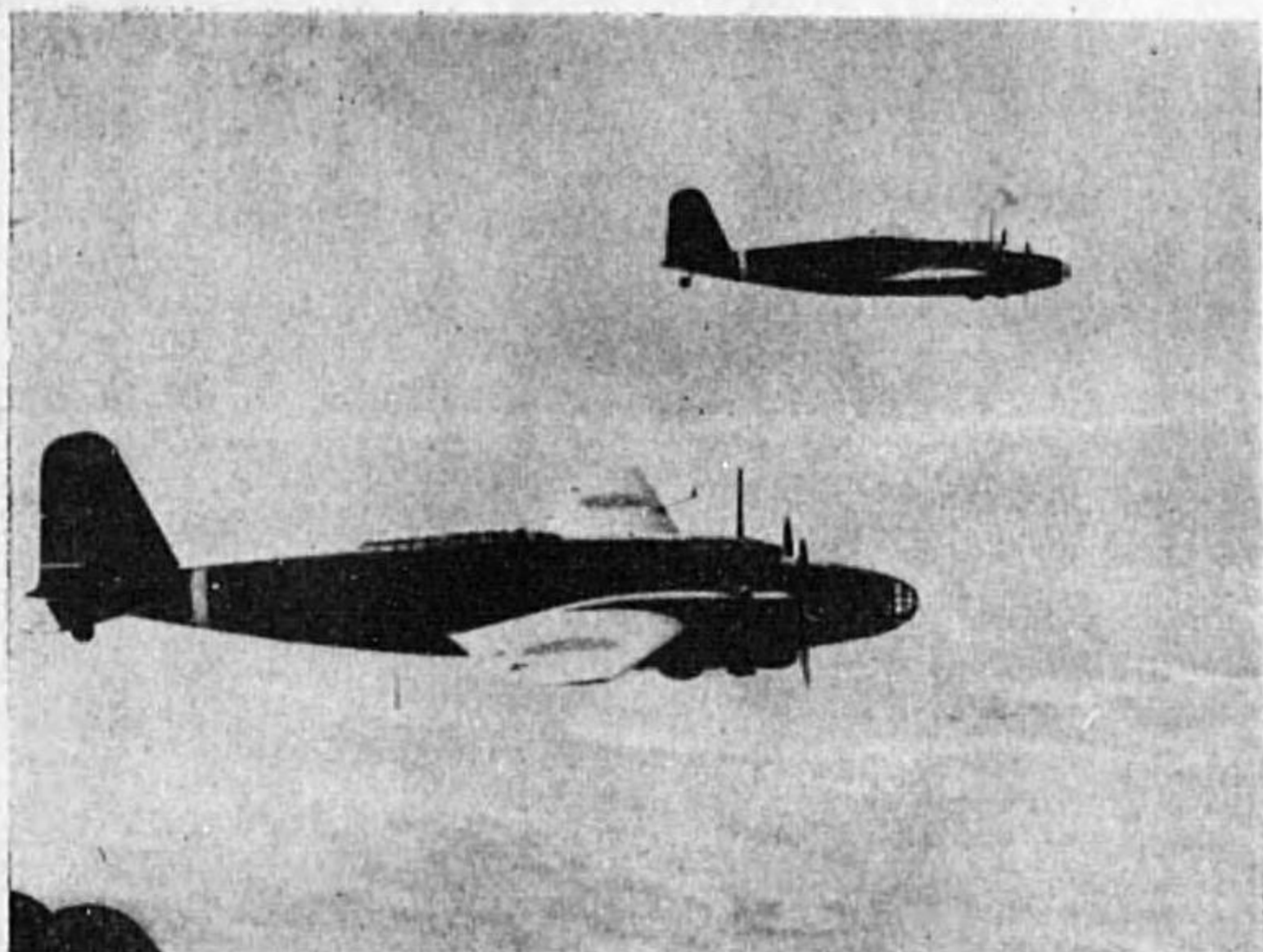
これも神佛の加護と思ひ、實際自動車を見た時は、夢に夢見る氣持にて茫然とし、自分は無事なれど、編隊の人々及び隊の人々が、どれ程心配してゐるかを思ひ、連絡を早くと思ひ、一日の長きに

心あせり眼る事も出来ず、實際今度ばかりは不幸中の幸にて、感謝で一杯です。石井曹長殿は先日申せし通り、重傷ですが生命には差支へないとか御安心下さい、病院名もまだ不明ですから不悪。

近頃は大體敵機の活動も活潑となり、一日の戦闘も盛んですが、大いに奮闘致します故決して御心配なく、何事もよき経験にて、よき思ひ出となりませす事と思ひ、昨日の身に比べ、今日の暮舎が大變なつかしく感ぜられます。

今日は我々の半月振りの休養日にて、いつものホテルへ来て御信りを書いてるます、半ヶ月前と今日とで、宿に來りし人々の數、二十日以後の戦闘で四人の教官戦友を喪くし、思へば今日の我身が有難く、我も目にみて戦友を亡くし、心から神佛に祈り、決して死など驚き居らざるも、先日の如き事もあり、皆々様の御助力を有難く感謝して居ります、少しでも御沙汰致せば心配の事と存じますが二十日以後は忙しく元氣で御奉公を致してをりますれば御安心下され度(中略)皆々様にも呉々もよろしくお願ひ致度、又母上様にも御自愛の程お祈り申上げます。

母上様 勝利



これは昭和十四年八月二十七日の日付で発信されてゐる、さて最後に升澤曹長からの、「殊勳甲」加藤准尉の最期の模様をみやう。

ホロンバイルの空にも秋が訪れて、草木も赤味を帯びて來ました。數回に亘るソ聯外蒙軍の越境、毎日の空中戦、この便りを差上げる事は、戦友として光榮でもあり、一沫の淋しさと躊躇せざるを得ませんが――

軍國の母として期待されて居つたかも知れませんが、心の友を喪つた小生とても同じであります。秋あだかも八月三十日、外蒙ソ聯軍の大部隊に對して、殲滅的攻撃の火蓋を切つた我が軍は、有力なる戦車、砲兵と爆撃機と協力し、敵を逐次壓迫攻撃して隨所に猛烈なる空中戦が演ぜられ、御存知かも知れませんが、八木曹長は壯烈なる自爆を遂げ、石井曹長は身に數弾を浴びて歸還致しましたのであります。さて加藤曹長は爆撃隊と協力中、敵戦闘機イ十六型三十機、イ十五型十機を發見し、戦隊は直ちに接敵

し、愈々攻撃體勢、グット敵をにらんで第一攻撃に移らんとする、この時地上の敵高射砲は、煙幕をはつた如くに射ち出して來るのであつた。

然し各れも實戦の強者である「敵のヒロ／＼弾が當つてたまるか」と勇敢に弾雲を縫つて進み、加藤曹長はイ十六型機めがけて飛び込まんとした瞬間に、武運拙なくも砲弾は左翼に命中して、その半分を粉砕してしまつた、が奮然怒頭にて發した加藤曹長は、その儘の姿勢でイ十六型機を目標けて、最後の體當りにて一機でも撃墜せんものと、機關銃よ焼けよ、とばかり射ちまくりながら敵機の中に突進した。

敵はその餘りにも猛烈な勢ひに、啞然としたが狼狽その極に達し、離散してしまつた。然し加藤曹長の不自由な機は、如何ともする事が出来なかつたので、最後の決意をきめたが、戦友に別れのため翼を大きく振つた後、今度は地上の戦車軍を目標けてアツといふ間に猛烈たる自爆をした、かくて戦車數臺は美事に燃えあがせたのである。

あゝ悲壯なるその自爆、その烈々たる闘志こそは、永久に我が空軍の語り草となるであらう。

あゝホロンバイルの華、散りし加藤機よ、加藤曹長の靈よ、安かれ。君の行動は、實に戦闘操縦者として立派な最後であつた、皮を切らして肉を、肉なら骨を、骨なら體をもつて――戦友として俺れは君に負けぬ。

そしてその前に君の仇はきつととるから安心して靖國の社にて俺れの行くのを待つてくれ、おばさん加藤をほめてやつて下さい、さよなら。

最後に猛鷲部隊の井上重俊航空兵大尉から母堂さきよさんに、次の如く故勇士の奮闘振りを通知して來てゐる。

これは九月二十五日に発信されたものである。

謹啓 謹みて御息勝利御奮戦の状況を御報告申上げます。御息には内地出發以來我が中隊の中堅幹部として日夜軍務に精勵致され今日に至る迄赫々たる武功をたて、居られました、併し今回武運の神の恵にもあはず不幸八月三十日戰場上空に於て敵機と交戦中同行方不明と相成り中隊將士一同は掌中の玉を取られたかの如く嘆き悲しみ、なすすべも無き次第で御座いました。

第一次第二次ノモンハン事件以來毎日數次に互る出動に、中隊付僚機として勇躍出動致され、赫々たる戦果を擧げて歸還致され、又或る時には敵戦線奥深く進入致され、戦闘中、機關の故障により戦闘圏より離脱され、困難なる操縦を續け、友軍戦線内に不時着致され、附近の蒙古人に救助せられ、無事基地に歸還致された事も御座います、此の沈着剛膽なる操縦振りにはなみある中隊將士一同感嘆致すばかりで御座いました。

今日迄に敵機と數十回に互り交戦致され、克く奮闘力戦敵T十五T十六戦闘機SB爆撃機優秀機多數を

撃墜されて、赫々たる武勳をたて、居られました。

併し八月三十日午前十二時四十五分爆撃機掩護の任務を以て出動致され戦場上空を爆撃掩護中、不幸にも敵高射砲のため愛機に敵弾を受けられ、今はこれまでと敵戦線目掛けて突入名譽の自爆を遂げらる、戦闘終りて友軍機が、一機又一機と基地に歸還すれ共我が加藤機を委を受けず、三度戦線上空を搜索すれ共見當らず、中隊將士一同は憂色に閉され一夜を明かしました、私の最愛の部下貴女の最愛の御息を失ひ、せめて遺骸なり共收容出来ればと願つて居りますれ共、右の様な状況にて誠に申譯之無き次第で御座います。

今事件は双方の理解ある協定に依り停戦と相成りましたけれ共、今や帝國四圍の状況は益々重大性を加へて参りました、此れより大いに活躍を願つて居りましたのに、初陣に於て空しくも戦場の露と消えられし事は、大變御無念であつた事と存じます。將又我が陸軍航空隊の爲にも惜しみても餘りある次第で御座います。

私共中隊將士一同は今亡き御息殿の御冥福を祈ると共に、大期作戦に備へ皇國の爲益々奮闘努力致す覚悟で御座います。

白露の御家族御一同様には御自愛專一の程祈り上げ、先は右状況報告迄。

戦場に散るは武人の本懐である、とはいへその最期は餘にも悲壯なものである。

殊に空軍の戦死は悲壯果敢なものである、それは敵陣地に自爆の一途である。

敵弾を受け、最早これ迄と最期の吐を決めると共に、從容として自爆の途につく、黒煙をひいて、遠く一直線に降下して行く、目標をつけた敵陣へ、火花と、火花と、一大音響で自爆である。

加藤勝利陸軍航空兵准尉は岐阜市柳ヶ瀬町二ノ五の出身である。

昭和四年三月、岐阜市立徹明尋常高等小學校尋常科優等卒業、昭和九年三月、岐阜市立商業學校卒業。

昭和九年現役志願、昭和十年一月、各務ヶ原陸軍飛行學校入學。

昭和十一年十二月、任陸軍航空兵伍長。

昭和十二年六月、熊谷陸軍飛行學校入學。

昭和十二年十二月、任陸軍航空兵軍曹。

昭和十三年二月、同校卒業。

昭和十四年五月、任陸軍航空兵曹長。

昭和十四年八月三十日戦死、任陸軍航空兵准尉。

遺族原籍地、母堂加藤さきみよさん。

【寫眞説明】一五五頁故加藤勝利准尉、一五八頁爆撃に向ふ陸の荒鷲(陸軍航空本部御貸下げ寫眞)

### 連續支那奧地重慶蘭州空襲の華と感狀

—上州健兒の意氣軒昂たる松本伍長—

今次事變、ノモンハン事件で活躍した、陸の荒鷲のうち、郷士の譽を高くしたのは、栃木縣である。

國境の撃墜王と謳はれた篠原少尉もさうであつた。

前に述べた栗原武二伍長もさうである、又ここに述べやうとする、松本忠左衛門陸軍航空兵伍長も又栃木出身である。

關東健兒！ その名にふさわしい活躍をして護國の英靈となられたのである。

かくて我が松本忠左衛門陸軍航空兵伍長は、陸軍關係支那事變第十九回論功行賞に際して、功六級、旭八等金功勳章を授賜、然も最高の榮譽「殊勳甲」として發表されるに至つたのである。

その功績は「重慶、蘭州空襲の華」として次の如く發表された。

「事件勃發するや、直ちに北支に出動し、北京、天津或は察哈爾方面の各戦闘に参加し、爆撃の威力を發揮して、敵



を震駭せしめた。

次で徐州會戰並に武漢攻略戦に於ては、隴海線及び京漢線の軍事施設、交通機關を破壊し、地上部隊の作戦を容易ならしめ、航空進攻作戦に移るや、數次に互り、遠く重慶に、或は蘭州爆撃行に参加し、敵

根據地を覆滅し、敵の心臓を塞がしめた。

昭和十四年二月二十三日、第三回蘭州攻撃に於いて、優勢なる敵機の攻撃を排除しつゝ、爆撃の効果を

おさめ、尙も執拗に迫る敵機と激烈なる空中戦を交へ、十數機を撃墜せるも自らも亦敵弾を受け壯烈なる

自爆を遂げた。

といふのである。

この日、關東健兒たる我が猛鷲松本伍長戦死の日、昭和十四年二月二十三日の蘭州攻撃に於ける空中戦

闘の状況については、部隊長から、次の如く殿父松本幸作氏に通信して來た。

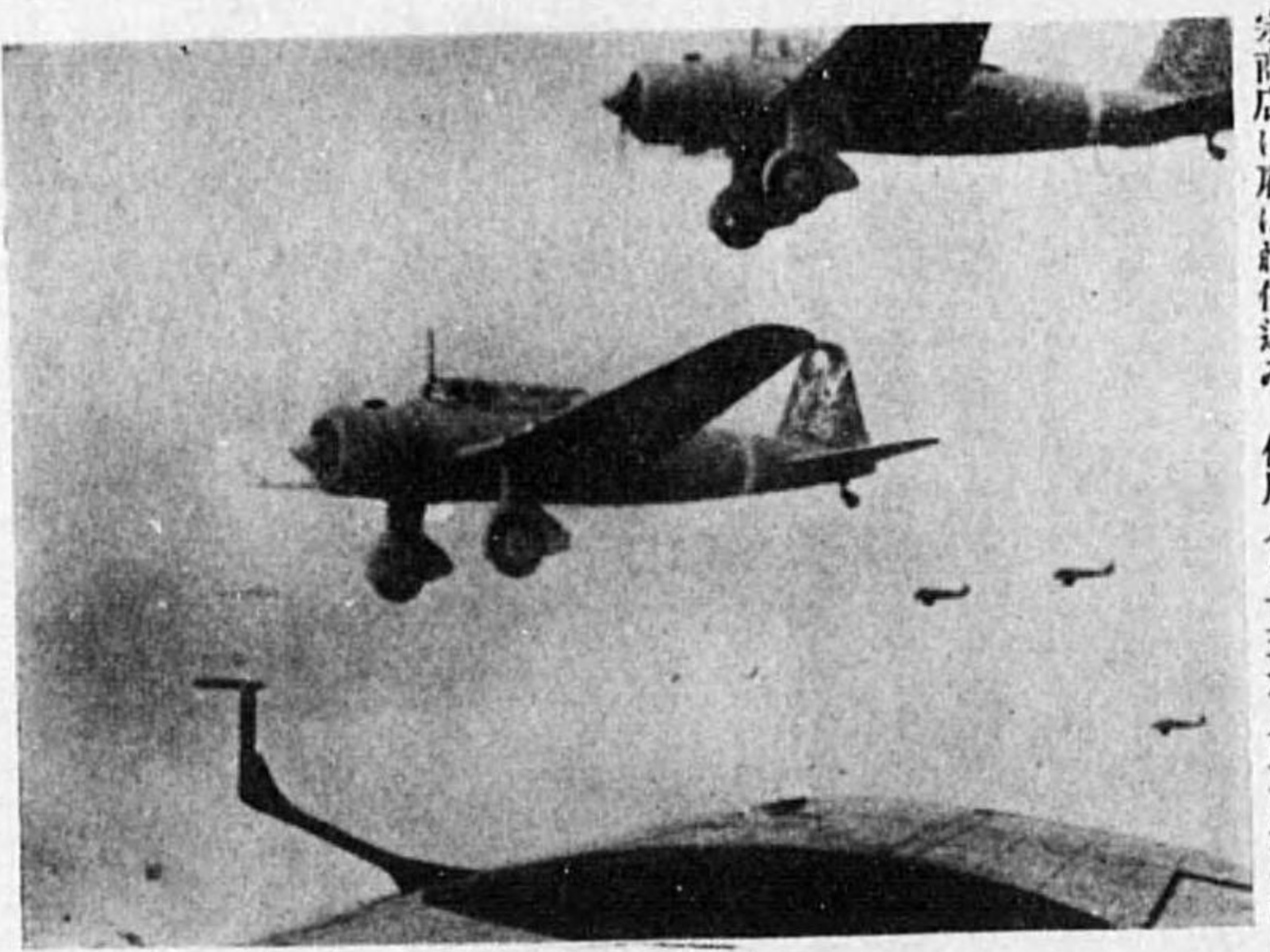
二月二十三日蘭州市街爆撃の命を受けたる當部隊は田中隊長等と協力し、長驅貫に〇〇軒の航程を翔破し午後二時五十分頃目指す蘭州市街を望見するや攻撃隊全機益々隊伍を整へ整々堂々銀翼を連ね鞏固なる團結を保持し目標に猛進す、約五分にして蘭州市街上空に達し同市街中央部に對し巨弾を投下し全弾を中樞部に命中せしめ任務を達成し一回快哉を叫ぶ。爆撃に先づこと約三分頃前方より先づ敵戦闘機數機攻撃し來りしが攻撃隊は愈々團結を堅持し之に應戦し敵を撃退す、當時左編隊長機として左後方向に位置せる井關機は敵弾を受けたるもの、如く白煙を吐出するを見る然れども尙編隊を構成しあり、全機爆撃を終了し蘭州市街を過る頃敵戦闘機の攻撃は更に猛烈となり、敵機は各種方向より我に蟻集し其の數四五十機に及び我編隊は〇〇〇〇編隊群を結成する一方各機の射手は日頃鍛へに鍛へし必勝の信念を持し沈着勇敢に敵機に猛射を注ぎ其の數機を撃墜す其の戦闘状況實に激烈にして實相は到底筆舌に盡す能はざる所なり。

此の頃攻撃隊長の搭乗せる先頭機よりふと左翼方面を望見せる瞬間井關機は真紅の火焰に包まれ編隊群上を右に泳ぎしと見る間に蘭州南方部落目掛けて壯烈極りなき自爆を決行す、機上に之を望見する者皆等しく奮然として復仇の念に燃え一死力を竭し敵機の撃墜に勉め、敵機亦一機、二機見る間に十數機を撃墜す、進むこと約二分、井關機の自爆に増長せる敵は更に最左翼を堅め力開せる牧野機勇猛なる近接攻撃を續けし爲牧野機亦敵弾を受け火を發し之亦直下の敵地目かけ殆ど垂直に突進し自爆せる火焰天に沖す、當時右外翼を堅めし山田機は其脚に敵弾を受けし爲か引上脚は完全に垂下し從つて速度後れ逐次編隊群の右後下方に離る茲に於て敵機之に蟻集し爲に又牧野機の南方約二軒附近に壯絶なる自爆を敢行す此間我亦必死の奮戦に依り敵機を撃墜すること前後實に三十餘機に及ぶ、漸く空中戦の幕を閉ち歸途につく、今は無き井關大尉以下十八勇士の英靈に默禱を捧げつゝ基地に歸還す。歸還後酒本、大村兩機の受弾數を調査すれば酒本機は八十有餘、大村機は百五十有餘の彈痕あり、受傷者亦五名にして機内は流血に染み凄慘の狀を呈す次で如何に空中戦闘の激烈なるを偲ばしむ。本戦闘に於て敵が西北蘇聯に通ずる要衝と頼む蘭州市の中樞部に巨彈の雨を降らし完膚なき迄に爆砕し物心兩方面に至大の損害を與へ敵を壓倒震撼せしめ且敵機實に三十二機を撃墜し得たり、然れども我亦三機を失ひ忠勇無比の戦士を失ひたるは痛嘆の至りに堪へず。

この陸の荒鷲による第三次蘭州空襲の日、壯烈極まりなき自爆を敢行して、戦死した井關大尉以下十八勇士の氏名は次の如く發表された。(官位は當時)

井關正夫大尉、牧野克巳中尉、山田唯男中尉、森安志准尉、小野寺一治曹長、藤田清曹長、倉田甚平曹長、村上善吉曹長、櫻井國助曹長、鈴木寅雄曹長、白石正夫曹長、濱崎香曹長、松本真喜軍曹、松本忠左衛門上等兵、田北豊上等兵、前田俊夫上等兵、林健太郎上等兵、栗原武二上等兵である。

蘭州空襲の華と散り、殊動甲に列した我が松本忠左衛門陸軍航空兵伍長は關東は下野國日光風の吹く



思川河畔、栃木縣下都賀郡野田村大字松沼字思川九一六で大正六年一月七日幸作氏の三男として呱呱の聲を上げ生れ乍ら大きく兄弟中で一番大きかつた。現在父母健在、兄弟姉妹七人で男五人女二人で父は日露戦役へ、兄は朝鮮兵にして昭和七年二月に應召、二男は第一乙種として東京に健在、四男は只今第一戦中支太田部隊に活動中、五男は現在飛行學校志願希望の爲準備中、姉は嫁し妹は現在家事に従事中。

故忠右衛門伍長は郷里、豊田南尋常高等小學校を卒業、その後の東京市神田區元岩井町硝子器具卸商赤宗商店に雇はれ住込み、使用人も十五人居たが仕事には熱心なので製品を調べるのには主人も負けたと云ふ。然し仕事は仕事其餘暇には寸断も飛行機又は發動機の研究を休めず飛行協會の發行、又發動機に関する雑誌を讀んで何時も飛行家になりたといと申して居た、或時は夜遅く迄やつて居たので主人から電球を付けてはいけなと云はれ其れからは自分の給料から乾電池を買つて其の燈火や又隣のカフェーの家から洩るゝ燈火で勉強したと、其れが爲め商賣違ひと云ひ乍ら十八歳の時に小型運轉免許をとつた、其れが爲め二十歳の時に是非現役志願をしたとい云ふので手續をしました處壯丁検査には見事合格其の際、満洲の飛行隊を希望した、入隊通知には満洲〇〇〇飛行隊と決定しての喜びは無上の様であつた入隊の日取が決定したので六年目に我家にと歸り一ヶ月餘り過し入營出發の當日は早朝から起きて當時八十五歳の祖父に「元氣で行つて來ます、飛行機で我が家の上に飛んで來るから其れ迄待つて下さい」と申して元氣にて出發、當時出發時の元氣は村の議員の方々も、今迄彼の様な元氣で入營した人はないと言はれた。希望の道に進む嬉しきは想像外であつた。入隊後は良く班長から手紙で良く松本は發動機を研究したと申し越しがあり、其れが爲め二年兵からも大切にせられ後日中隊長の選びで井關隊に編入、其の後事變發生と共に天津に飛び活躍、其の後は北中支に轉戦、第一、第二蘭州爆撃、第三次の爆撃に最後の奮闘と共に自爆せり。當時の戦闘は、司令官より威狀を授與され、長くも上聞に達した。

かくして論功行賞に破格の光榮に浴したと、その遺族達も聖恩の有難さに感泣したのである。

松本忠左衛門陸軍航空兵伍長、遺族原籍地殿父松本幸作氏

〔寫眞説明〕一六一頁故松本忠左衛門伍長、一六三頁〇〇爆撃に向ふ陸鷲。〔陸軍航空本部御貸下げ寫眞〕

# 陸鷲奥地空爆の原田部隊の一員として活躍

—武勳赫々第三次蘭州空襲に散華の栗原伍長—

支那事變第十九回論功行賞が發表された。その中に「重慶、蘭州空爆の華」として發表された「殊勳甲」の猛鷲、栗原武二陸軍航空兵伍長は、功六級、旭八等の金鷲勳章を授賜された。栗原武二伍長は栃木縣出身（別項松本忠左衛門伍長も同時に肩をならべて發表）であるが、この勳功は次の如くである。



事變勃發するや、直ちに北支に出動し、北京、天津、或は察哈爾方面の各戦闘に参加し、爆撃の威力を發揮して敵を震駭せしめた。次で徐州會戰並に武漢攻略戦に於ては、臨海線及び、京漢沿線の軍事施設、交通機關を破壊し、地上部隊の作戰を容易ならしめ、航空進攻作戰に移るや、數次に互り遠く重慶に、或は蘭州爆撃行に参加し、敵根據地を覆滅し、敵の心膽を寒からしめた。

昭和十四年二月二十三日、第三回蘭州攻撃に於て、優勢なる敵機の攻撃を排除しつゝ、爆撃の効果を收め、尙も執拗に迫る敵機と激烈なる空中戦を交へ、十數機を撃墜せるも、自らも又敵弾を受け壯烈なる自爆を遂げた。

といふのである。

かくて部隊長から次の如き手紙が届いた。

前略 御令息武二殿には今度蘭州攻撃に於きまして、壯烈なる戦死を遂げられました。謹みて哀悼の意を表します。

以下戦闘の概況を御知らせ致します。

二月二十三日我原田部隊は第○次蘭州攻撃を執行し、○次敵上空に到る此の時蘭州上空掩護中なりし敵戦闘機數十機は、俄然我部隊に攻撃を開始し、茲に未曾有の大空中戦を展開せり、瞬間に其數機を撃墜し市街重要機關に對し果敢なる爆撃を敢行し、悠々歸還の途につく、然るに敵機の攻撃執拗にして部隊は苦戦に陥りたり、此の時僚機山田機は不幸發動機に數弾を受け、速度を減じ次第に編隊より遅るを見る敵

數機は得たりと一層攻撃を逞しくし、山田機又克く之に交戦し其二機を撃墜せり、山田機を打たしてはならじと百方手段を盡し、之が收容に勉むるも敵機の攻撃激しく、自機又數百の敵弾を受け搭乗者相次ぎ負傷し、空中に在る哀しき所詮術もなし、遂に山田機は機體より火災を起し、機首を下に向け急降下せんとす、あゝ萬事休す、銀翼を連ねて共に活躍せし僚機に最後の訣別を告ぐべき時の來りたるを知りたる山田機搭乗の勇士は、火焰を上げ墜落して行く愛機の中に聖上の萬歳と、战友の活躍を祈り無念別れの手を打振りつゝ日本空軍の花と散る。

あゝ壯烈悲壯でありまして、昔の武士が勇戦奮闘矢つき刀折れ主君の馬前に討死したると同じであります。

願ひますれば昨年出動以來既に半歳、武漢攻略を始めとし朔風吹き荒ぶ蒙古の高原に在つて長驅蘭州を衝き、或は敵の首都重慶を襲ひ之を粉碎し敵を震駭せしむる等、出動回數實に數十回北支中支を其の翼下に收めました勇士は今遂に歸りません。

男子の本懐と存じますが、長期建設途上に於きまして前途有爲の空中戦士を失ひました事は國家の一大損失でありまして、返す／＼も痛哭の至りに存じます、然し其の勳は戦史に不滅の光を放つてありませう。空中勤務者は長驅敵地を攻撃致しますが、死體の收容は殆ど出来ないので残念に思ひますが、他の隊の飛行機より山田機自爆の寫眞を撮りたるものがありましたので御送り致しますからせめてお慰みに致して下さい。

我々一同は故人の遺志を繼ぎ、益々發憤致し來る戦闘に於て仇敵を打たんと團結を鞏固にし、各々本務に邁進致して居ります。

先は簡單ながら書中を以て弔意申述べると共に、戦況の概況を御通知申上ります。

時節柄御一同様益々御自愛遊ばされますやう祈り上げます。敬具

昭和十四年二月二十六日 原田部隊酒本隊長 酒本英夫

栗原幸一殿

更に歴戦の勇士原田隊長からも次の如く手紙をよせてゐる。

謹啓、時下春寒料峭の候と相成り候處、尊堂御一統様には愈々御健勝に御暮し遊ばされ候哉御伺申上候。

現に敵の蘇聯に通ずる赤色ルートの要衝策源地たる甘肅省蘭州及陝西省各要地攻撃の任務を受け、奮闘多大の戦果を收め居り候。

而して去る二月二十三日第○次蘭州攻撃を反覆執行致し、市街中樞部に巨弾を投下猛爆粉碎し任務を遂

成致し候、此際同市上空に於て、敵戦闘機數十機と壯烈なる空中戦を交へ、各機勇戦力闘能く敵の三十餘機を撃墜し、赫々たる武勳を樹て候も不幸、御命息栗原武二君の搭乗せらるゝ愛機山田機は、敵弾を其の致命部に受け機と共に敵地に自爆勇烈無比の戦死を遂げられ、寔に痛嘆の至りに不堪謹んで哀悼の意を表し候。

栗原武二君に於ては、昨秋九月大命を拜し北支に出戦以來武漢三鎮攻略に策應して、隴海線西段、京漢線南段に於ける敵輸送の妨害に鐵道遮断に、或は信陽、洛陽等の要衝を痛撃し、武漢攻陥後は引續いて、甘肅、寧夏、寧遠省等に於ける敵共産軍の根據たる要地を痛撃し、舊臘に入りて更に中支に轉進して該方面航空進空作戦に任じ、専ら重慶市を反覆攻撃し、敵の政治軍事中樞を猛爆其上下を震盪せしめ、最近再び北支より甘肅省内赤色共産軍の巢窟根據たる蘭州を初め、陝西省内古都西安及其他を攻撃し、每戰善戦健闘赫々たる偉勳を樹てられ、上一一般の信望を博し、將來の大成を矚目せられ候ひしに拘はらず、遂に今次の蘭州攻撃に於て皇國陸軍航空の華と散られ候事、返す／＼も残念痛惜の念禁する能はず、斯か多敷忠勇有爲の將士を失ひしは、寔に上 陛下 に對し奉り恐懼の至りにして、又御遺族に對し實に申譯無之次第に御座候。

唯其勇猛果敢なる行動に依り、所命の爆撃任務を完全に遂行し、而も敵機を許多撃墜し至大の損害を與へ、眞に日本軍人の本分を全ふせられ候事こそせめても御心やり御家門の譽と存じ 奉 候。

別紙に當時の戦況を叙し、御戦死の状況を御報告申上 候。

陣中倥偬の間不文不備何卒御容捨被下度候 恐惶謹言

原田部隊長 原田 宇 一 郎

昭和十四年三月一日

栗原伍長が、令弟敏夫君にあてた手紙には、荒鷲の闘志をよく現はしてゐる。

敏夫、お手紙有難ふ、兄さんはね、けふ御父様と、龜戸の叔母様から手紙をもらつたが、敏夫からの手紙が一番うれしかったよ。

宇も、文句も随分上手になつたね、前の手紙と比べると、お月様と汚れた洗面器位の違ひだよ。

随分勉強した様だが、もつと／＼勉強して上手になつて下さい、さうなつたら兄さんは何を買つてやらうか、漫画の繪葉書か、それともキヤラメルか、兄さんは敏夫の好きなものを何んでも送つてやるよ。

満洲で買つてゐる物なら、何んでも今度手紙をくれる時に言つてごらん。

それに十月には運動會や、遠足だつてね、面白かつたらうね。

敏夫は南郷少佐の活動を見たつて、よかつたね、兄様も南郷少佐に負けない様な立派な働きをしてみせますよ、さよなら。

これは十一月六日發である、文中の南郷少佐、これは海軍少佐南郷茂章氏の事で「海鷲の至寶」と諷した猛鷲で今大車變で活躍したが、南昌空中戦で散華、海鷲の殊勳甲。

これより前、十月六日のハガキには次の如く覺悟をしめてゐる。

敏夫、丈夫であるか、兄様は今支那にゐるのだよ、支那といふ國は大きい國で、兄様のゐる所はまだまだ暑い所だよ、そして今は戦争をしてゐるのだから、敏夫は一生懸命に勉強して偉い人になるのだよ。

兄様もきつと手柄を樹て、立派に靖國神社に祭られるよ。

さうしたら敏夫も、參拜に行つてくれよ、約束したよ、ではさよなら。

原田部隊長から通知された昭和十四年二月二十三日蘭州攻撃に於ける空中戦闘状況は次の通り

二月二十三日蘭州市街爆撃の命を受けたる當部隊は、田中部隊と協力し長驅實に〇〇軒の航程を翔破し、十四時五十分頃目指す蘭州市街を望見するや攻撃隊全機益々隊伍を整へ整々堂々銀翼を運

ね、鞏固なる團結を保持し目標に猛進す、約五分にして蘭州市街上空に

機の攻撃は實に猛烈となり、敵機は各種方向より我に薈集し其の數四、五十機に及ぶ、我編隊は翼々相接する編隊群を結成するや、一方各機の射手は日頃鍛へに鍛へし、必勝の信念を持ち、沈着勇敢に敵機に

猛射を注ぎ、其數機を撃墜す、其戦闘状況 實に激烈にして實相は到底筆舌に盡す能はざる所なり。

此の頃攻撃隊長の搭乗せる先頭機よりふと左翼方面を望見せる瞬間、井關機は真紅の火焰に包まれ編隊群上を右に泳ぎしと見る間に、蘭州南方部落目がけて壯烈極りなき自爆を決行す、機上に之を望見する者

皆等しく奮然として復讐の念に燃え、死力を竭し敵機の撃墜に務め、敵機亦一機二機見る間に十數機を撃墜す、進むこと約二分井關機の自爆に増長せる敵は更に最左翼を堅め力開せる牧野機に勇猛なる近接攻撃

を續けし爲、牧野機亦敵弾を受け火を發し、之亦直下の敵地を目かけ殆ど垂直に突進し、自爆せる火焰天

達し同市街中央部に對し巨弾を投下し全彈を中樞部に命中せしめ任務を達成し一同快哉を叫ぶ、爆撃に先つこと約三分頃前方より先づ敵戦闘機數機攻撃し來りしが攻撃隊は愈々團結を堅持し之に應戦し敵を撃退す、當時左編隊長機として左後方向に位置せる井關機は、敵弾を受けたるもの、如く白煙を吐出すを見る、然れども尙編隊を構成しあり全機爆撃を終了し、蘭州市街を過る頃敵戦闘機

を撃墜し、赫々たる武勳を樹て候も不幸、御命息栗原武二君の搭乗せらるゝ愛機山田機は、敵弾を其の致命部に受け機と共に敵地に自爆勇烈無比の戦死を遂げられ、寔に痛嘆の至りに不堪謹んで哀悼の意を表し候。

栗原武二君に於ては、昨秋九月大命を拜し北支に出戦以來武漢三鎮攻略に策應して、隴海線西段、京漢線南段に於ける敵輸送の妨害に鐵道遮断に、或は信陽、洛陽等の要衝を痛撃し、武漢攻陥後は引續いて、甘肅、寧夏、寧遠省等に於ける敵共産軍の根據たる要地を痛撃し、舊臘に入りて更に中支に轉進して該方面航空進空作戦に任じ、専ら重慶市を反覆攻撃し、敵の政治軍事中樞を猛爆其上下を震盪せしめ、最近再び北支より甘肅省内赤色共産軍の巢窟根據たる蘭州を初め、陝西省内古都西安及其他を攻撃し、每戰善戦健闘赫々たる偉勳を樹てられ、上一一般の信望を博し、將來の大成を矚目せられ候ひしに拘はらず、遂に今次の蘭州攻撃に於て皇國陸軍航空の華と散られ候事、返す／＼も残念痛惜の念禁する能はず、斯か多敷忠勇有爲の將士を失ひしは、寔に上 陛下 に對し奉り恐懼の至りにして、又御遺族に對し實に申譯無之次第に御座候。



に沖す、攻撃隊將士の痛憤滅怒例ふるものなく勇戦更に敵機の射撃に全力を傾注す。  
 當時右外翼を堅めし山田機は、其脚に敵弾を受けし爲か引上げ脚は完全に垂下し、從つて速度後れ遠次編隊群の右後下方に離れ、茲に於て敵機は直ちに之に蟬集し猛攻を浴せつゝあり、之を見たる中隊長たる酒本機は奮然僚機たる大村機を従へ之を救援に赴きしも、間髪を容れず山田機亦生還を断念せるか、牧野機の南方約二軒附近に壯絶なる自爆を敢行す、此間我亦必死の奮戦に依り敵機を撃墜すること前後實に三十餘機に及ぶ、敵は更に其数を頼み猛攻の手を緩めず、特に山田機救援の爲稍々主力編隊を離脱せる酒本編隊に對する攻撃は、實に執拗猛烈を極め、之を望見する戦友は井關機等三機と運命を共にする數分を出でざるべきを思はしむ、斯くする内大村機は操縦席に敵弾を受けし爲操縦の自由を失ひ、危ふく酒本機と空中衝突せんとせるを酒本大尉の間髪を容れざる妙技に依り、辛ふじて之を避け得たるも之が爲該二機亦各々數百米に散開離隔せり、茲に於て敵機の酒本、大村兩機を各個に撃破せんとする、攻撃は愈々執拗果敢にして其凄愴なる正視に堪へず、之を救援せんとするも主力編隊亦敵の猛攻を受けつゝあるを以て寸分の機動を許さず。

斯くて思つまる激戦熱闘を續くこと實に約三十分、敵は射撃を打ち盡したるので、敵機は一機、二機と逐次後退し其機影を没し、茲に漸く空中戦闘の幕を閉じ歸途につく、今は無き井關大尉以下十八勇士の英靈に默禱を捧げつゝ基地に歸還す。

歸還後酒本、大村兩機の受弾數を調査すれば、酒本機は八十有餘、大村機は百五十有餘の彈痕あり、受傷者亦五名にして機内は流血に染む凄慘の狀を呈す、次で如何に空中戦闘の激烈なるを偲ばしむ。

本戦闘に於て敵が西北露聯に通ずる要衝と稱む蘭州市の中樞部に巨彈の雨を降らし、完膚なき迄に爆碎し物心方面に至大の損害を與へ、敵を壓倒震滅せしめ且敵機實に三十二機を撃墜し得たり、然れども我亦三機を失ひ忠勇無比の戦士を失ひたるは痛嘆の至りに堪へず。

◇

さてこゝで今は亡き我が陸の猛鷲、栗原武二伍長の所屬せる部隊の活躍の跡をたどる事にしよう。  
 我が栗原武二伍長は、今次事變と共に勇躍出動し、坂口部隊に屬し、その後原田部隊に加はつて、轉戦幾多の勳功を樹てたものである。

坂口部隊活躍の跡は「大雷雨を衝いて二十九軍主力を空爆」と題して、支那駐屯軍司令部では次の通りに發表した。  
 ◇西苑に對し坂口部隊が××日午前五時半、南苑に對し午前六時二十分頃爆撃を加へ敵に多大の損害を與へたり。

◇爆音曉雲を衝いて××日未明、平津の空は我が空軍に完全に制御された、暴戾二十九軍斷乎撃つべしと、香月支那駐屯軍司令官の命令一下〇〇に待機中であつた、我が陸の荒鷲はエンヂンを曉間に轟かせたこの日天氣險惡、午前五時亂雲を衝いて真赤な太陽が地平線に浮き上つた頃、西北方面の空もいよ／＼け

はしく電光閃き、雷鳴天地を震せたが勇敢たぐひなき我が空の勇士達は、聊かもひるまず、五十萬枚の安民布告を滿載した〇機がまづ飛び出せば、坂口、三輪、栗山、柴田、佐々、島田の各部隊も物々しく裝備して續々とスタートした、然して午前五時四十分頃俄然そら豆大の雹を交へ、四十米の烈風を誘つて驟雨沛然として襲來、悪化の形勢あるため一部は歸還の命令を受けて原隊に引揚げたが、他の大部分は重要使命を果して歸還した。

かくて栗原伍長が轉じた原田部隊の活躍の跡を追ふことにする。  
 昭和十三年十月五日、〇〇基地にある原田部隊の新鋭〇〇機は、漢口作戦に呼應して、銀翼を秋空に輝かして、京漢線南段の信陽を急襲、市街の重要な施設並に、集結中の敵胡宗南の軍隊に反覆大爆撃を敢行、之を完膚なき迄に爆破、潰亂せしめて全機悠々歸還したが、これが爲め市街北門附近は大火災を起し火焰は空を蔽つてゐる。

續いて十月六日、去る九月以來精銳を誇る陸の荒鷲、原田、川島、井關、栗原、酒本等の諸部隊は堂々銀翼を連ねて連日に亘り信陽、西安を初め敵の據點を覆滅、鐵道及び飛行場を爆破して敵の輸送路を遮斷した。

(井關部隊、井關正夫航空兵少佐、福岡縣出身、第十九回論功行賞功四級、旭五等、栗原伍長戦死の日、蘭州第三次爆撃に惜しくも散華した名部隊隊長)

この日名部隊は一擧に〇〇軒を翔破して、敵中央軍二ヶ師が頑強に抵抗する鄭州空爆を敢行した。  
 清澄の秋氣漲る同日朝霧を衝いて、川島、酒本、井關各隊の新鋭〇〇機は、午前〇〇時基地を出發、鄭州東端より、西北進して蜘蛛の巣と張りめぐらされたやうな敵陣上空を空襲、午前十時鄭州驛構内の鐵道及び倉庫貨車等を爆撃、巨彈は見事的中して倉庫は黒煙をあげて全焼、鐵道交叉點、貨車等も煤煙と共に各所に炸裂した。

敵はこれが爲め隴海線及び、京漢線南段の輸送を完全に遮斷され、我が空軍は敵に大損害と脅威を與へ北支の空に凱歌を奏して全機無事歸還した。  
 引きつゞき同日午後酒本部隊は河南省南宮(京漢線内邱東北方六十軒)を空襲、同地附近には共產軍約五千が蟻踞し、該方面に指令を發してゐる共產軍の根據地と見られてゐたが、勇猛なるわが空軍の爆撃機關銃掃射の爲め多大の損害を與へ全機無事歸還した。  
 この頃、昭和十三年十一月陸軍は長驅した支那の奥地甘肅省の蘭州を初め寧夏その他、赤色ルートを盛んに爆撃してゐた。

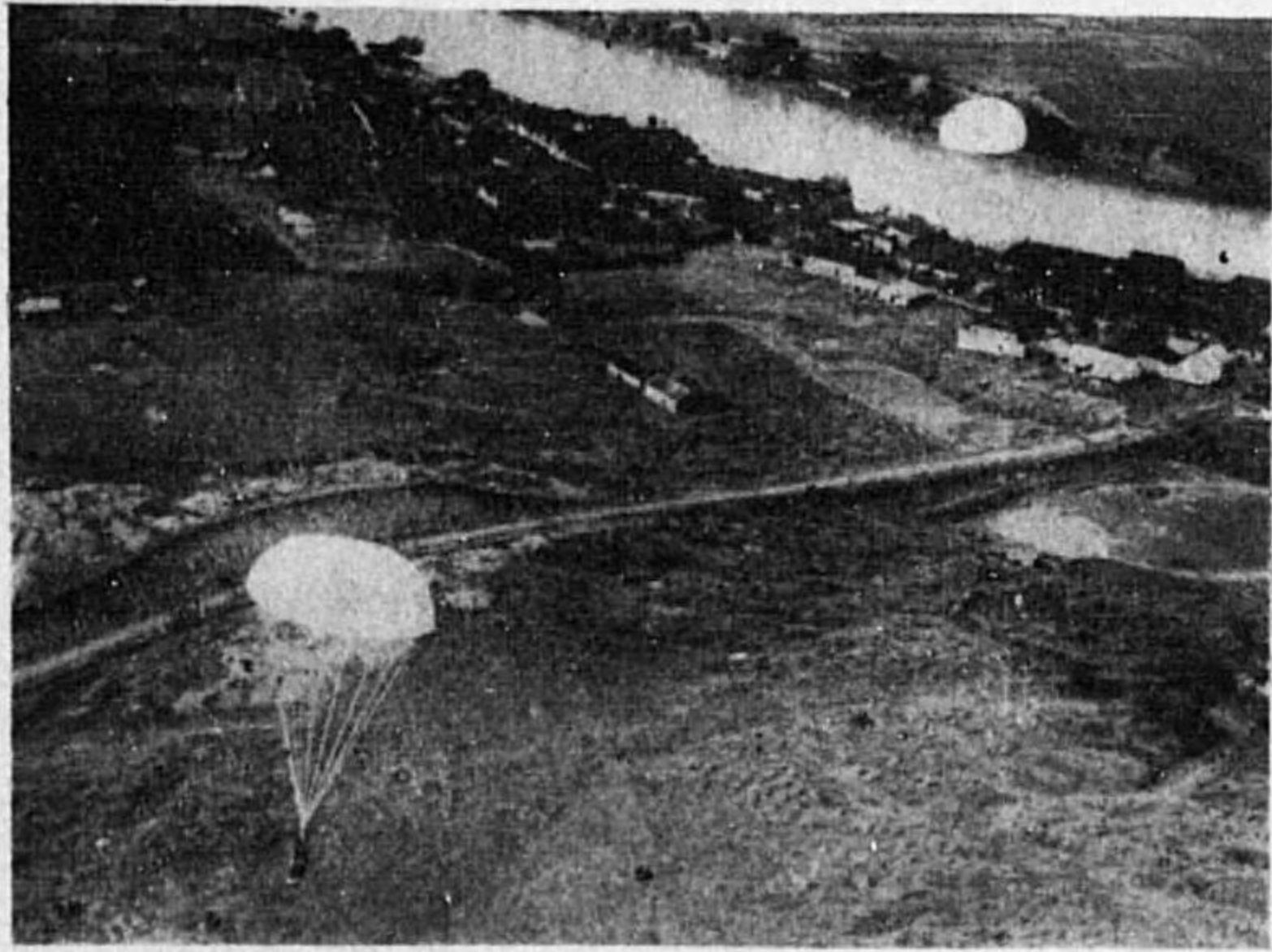
その一端をみると次の如くで各れも現地派遣軍の發表による特電である。

◇十一月十三日、我が陸の荒鷲原田部隊の栗原、酒本兩大尉指揮の〇〇機は、午後〇時半突如として、博作義軍の根據地たる山西省北部、偏關を猛襲、敵の軍事施設並に重要建築物に對して、多數の大型爆撃弾を投下、多大の効果を收め、同一時半全機無事〇〇基地に歸還した。

尙同部隊は往復に際して、奥地部落民に、廣東及び武漢三鎮の陥落した事と、國共兩軍敗殘の實情を知らしむる爲めに多數のビラを投下した。

○十一月十五日、陸の荒鷲、栗本、酒本兩部隊は新鋭〇〇機をもつて、十五日早朝長驅驟進を衝いて、赤色ルートの根據地甘肅省蘭州を急襲せり、兩部隊は同地上空に於て、敵戦闘機六機と壯烈なる空中戦闘を行ひこのうち二機を撃墜し、蘭州西部及び北部に位置する軍事施設及び、飛行場を爆撃し、多大の効果を收めたり、尙一部は寧夏を爆撃し、同地の軍事施設を粉碎し全機無事歸還せり。

當時の蘭州は甘肅省の首都、赤色ルートの據點として、ソ聯からの武器輸送上最大要地たる事は周知の事實であるが、武漢陥落後、蘭州の軍事的な重要性は更に増加し、空軍基地として又空軍將校の養成地として優秀なる施設を備へ、去月末の情報によれば同地における敵飛行機勢力は戦闘機百三機、偵察機二機、輕爆機十六機、重爆機五機、輸送機一機の計一二七機、實に敵空軍勢力三三二機の三分の一以上を有してゐる。この敵の堅陣に對し〇〇機のみによる鵬程〇〇キロに達する大爆撃行は、我陸軍威力圏内の最大限を發揮せるもの、従つて速力に重點を置いて同部隊は落下傘は固よりその他不必要と認められるものは一切携行せず、その優秀な編隊技術と速力とをたのみとして、さらに不毛の地の上空を、しかも往路全く夜間飛行に驚異的大成功を收めたことは眞に、陸軍航空戦史に一エボックを畫するもので、〇〇部隊長を中心とする全員一致の賜であり、さらに漢口陥落直後からこの作戰を目標に、多大の犠牲を拂つて實施された猛訓練の收穫である。



この頃我が陸の荒鷲は、成都空襲を行ひ、第二回は、十一月五日敢行、城外飛行場上空では壯烈なる空中戦を行ひ、地上砲火を潜つて投擲約百回といふ實に夥しい爆弾を投じて成都飛行場を完全に爆破し悠々歸還した。

然して前述十一月十五日蘭州、寧夏、五原を爆撃して西北赤色ルートを徹底的に粉碎した原田部隊は、十七日再び全機〇〇機を擧げ寧夏、五原の爆撃に向つた、旭光を受けて〇〇基地に出發した時はや、風が

あつたが、天氣は飽くまで晴朗、幸先よしと心勇んだが、オルドス高原にさしかゝるや忽ち惡氣流に遭遇した、さつきまではつきり見えてゐた視野が全く見透しが利かなくなり、眼下に開けてゐた波型は何處までも續いてゐた沙漠が姿を消しひどい濃霧が襲つて來た、進むに従つて濃霧は益々ひどくなるばかり、右の方に並んで飛んでゐた僚機の姿すら濃霧の中にかくれて見えなくなつた、十メートル先さへはつきりしない、遂に吹雪さへ混じつてきた、大難航だ、正に悲惨極まる爆撃行である。足の先や鼻の先が寒さのため刺すやうに冷たい、濃霧の中を盲航すること既に一時間、もう寧夏も近くなつた筈だ苦しいのも我慢しよう、早く濃霧が晴れてくれるやうに神に祈るばかりだ、濃霧は晴れるどころか益々ひどくなるばかりだ、もうこれ以上はとても駄目だ、たとひ寧夏上空に達しても爆撃が出来なければ何にもならない遂に指揮官は決心した、五原へ向ふのだ。それから數十分間惡天候と闘ひながら五原へ、五原へと飛び續けた、やがてあれ程ひどかつた濃霧が段々晴れて眼下には沙漠が霞んで見え始めた「占めた」と思ふ間もなく太陽まで照つて來た、もう大丈夫だ、やつと惡氣流から逃れたのだ、この間操縦士の苦心は如何ばかりだつたらう、後を振り返つて見ると緊張してゐた操縦士の顔がニコニコ微笑んでゐる、下を見ると猛烈な氾濫だ、而も氾濫しながらもう所々凍つてゐる、愈々河頭地域に入つたのだ、臨河の上空を通過した、五原はもう直ぐだ、穀倉といはれる五原平原もこの氾濫では今年の收穫は絶望であらう。下を見ると眞四角な城が氾濫地帯にボカリ浮いてゐる。

愈々爆弾投下だ、時に正午、五原上空に差かゝるとみるや、高橋中尉は喇叭管をつかんで、射て、射て射てと號令した。電氣のスイッチが入る、眞黒な爆弾が機を離れて行く、段々小さくなつたと思ふと、西北の城門近くにパツと黒煙があがる。第二弾は西北隅の建物に命中して火焰が濺々とあがる、更に次の弾は西方隅の兵舎にあたり、兵舎は一瞬に猛煙で見えなくなる。彼方、此方で火災を起し、上空は黒煙に包まれる全彈悉く命中だ。五原の街は全く死の街だ、見よ陸の荒鷲の腕の牙へを、往年馮玉祥がソ聯より歸國するや、國民軍を改編して名乗りをあげた五原城も今は昔の夢と化してしまつたのである。これは前線特派員が同乗爆撃行の手記である。かくて部隊は、感狀と、賞詞を授與され、その赫々たる武勳を中外に輝かしたのである。

感 狀

部隊は江橋兵團の航空進攻作戰實施に方り、昭和十三年十一月二十日兵團に配屬せらるゝや寺倉部隊長の指揮下に入り、中支那方面よりする進攻開始の直前漢口に前進し田中部隊、服部部隊と協同して敵の首都重慶に對し長驅進攻すること三度、敵國政治情勢混亂の機に投じ、其高機關並に軍民上下を震撼せり、就中昭和十四年一月十五日の重慶攻撃に於ては敵防空火器の猛射を冒し、樞要政治機關及軍事施設を爆破

し、且敵戦闘機十數機と交戦し其四機を撃墜せり、二月上旬部隊は某地に躍進し敵空軍の重要根據に於て蘇支連絡の要衝たる蘭州に對する寺倉部隊の攻撃に参加すること三度、其の第二次攻撃に於ては蘭州西飛行場及同市街を爆撃し、且敵戦闘機二十數機と交戦して其の十餘機を撃墜せり、又第三次攻撃に於ては田中部隊と協力して進攻し、蘭州市街爆撃の任務を完遂し、且同地上空に於て、敵戦闘機約三十機と激烈なる戦闘を交へ、遂に井關大尉機以下三機の壯烈なる自爆機を生ずるに至りたるも、編隊隊長河島少佐の適切なる空中指揮と各機の協同奮戦とに依り、敵機の過半数を撃墜し大で敵空軍を壓倒潰伏せしめたり。右の外部隊は洛陽、瀋陽、西安、延安、平涼、寶雞等敵の重要都市並飛行場を連続攻撃し、其の軍事及政治諸施設を爆撃せり。

右の如き部隊の行動は、兵團の作戦目的遂行に絶大なる貢獻を致せるものにして、克く人員器材の補充補給の不如意天候氣象の障碍等、凡ゆる艱苦を克服して克く行動、半徑の最大限附近に數次の進攻を敢行したるに因る是畢竟部隊隊長原田宇一郎の指揮統御宜しきを得、各中隊の團結鞏固にして全隊一致任務に進出したると、地上勤務諸隊の積極的協力との成果にして、重爆撃隊の眞價を顯揚せるものと謂ふべく其の成功は拔群なり。

仍て茲に感状を授與す

江橋兵團長、江橋英次郎

賞 詞

原 田 部 隊  
佐 川 部 隊

原田部隊は昭和十三年九月二十二日、應急派兵を命ぜらるゝや直に彰徳飛行場に躍進し、京漢線南段の諸要地或は敵の南進阻止に任じ、以て中支派遣軍第〇軍の信關攻略を容易ならしめ、其成果は第〇軍の感謝する所となる。

十一月飛行團長が航空撃滅戦を企圖するや部隊は、大脇中尉以下六勇士の犠牲を生ずる程度に猛訓練、特に夜間訓練を實施し、同月十五日の蘭州攻撃に方りては、某飛行場より夜間前人未翔の空域を翔破し、蘭州を攻撃して前古未嘗有の壯舉を完成し、第一撃の記録を劃して爆撃隊の爲、萬丈の氣を吐き關東軍の威力を十二分に發揮したり。

之部隊長の計畫指導宜しきを得たると、生還期せざる空中戦士の果敢斷行に係るものにして、國の内外部に與へたる影響並赤ルートに加へたる脅威は、其効果偉大なるを認む。

爾後一時江橋兵團の指揮下に入りしも、昭和十四年三月北支全正面に亘る敵の攻勢に對し、再び予の區處下に入り連續約四十日の久しきに亘り、西安、洛陽、鄭州等黄河對岸の諸要地を爆撃して敵の前進阻止に努め、或は潞安地區の諸要地を攻撃して敵企圖を破砕し、或は垣曲附近に於ける敵の渡舟を撃沈し、又

篠塚部隊の剿滅戦に協力する等、飛行團長をして其企圖達成を容易ならしめたり。斯くの如き戦績は、平素に於ける團結の鞏固訓練の精到に依るものなりと雖も、出動以來部隊長の率先垂範適切な指導と、部下將兵の滅私奉公的活躍に依るものにして、其功績は顯著なるものと認む。依て茲に其功績を表彰す。

昭和十四年五月四日

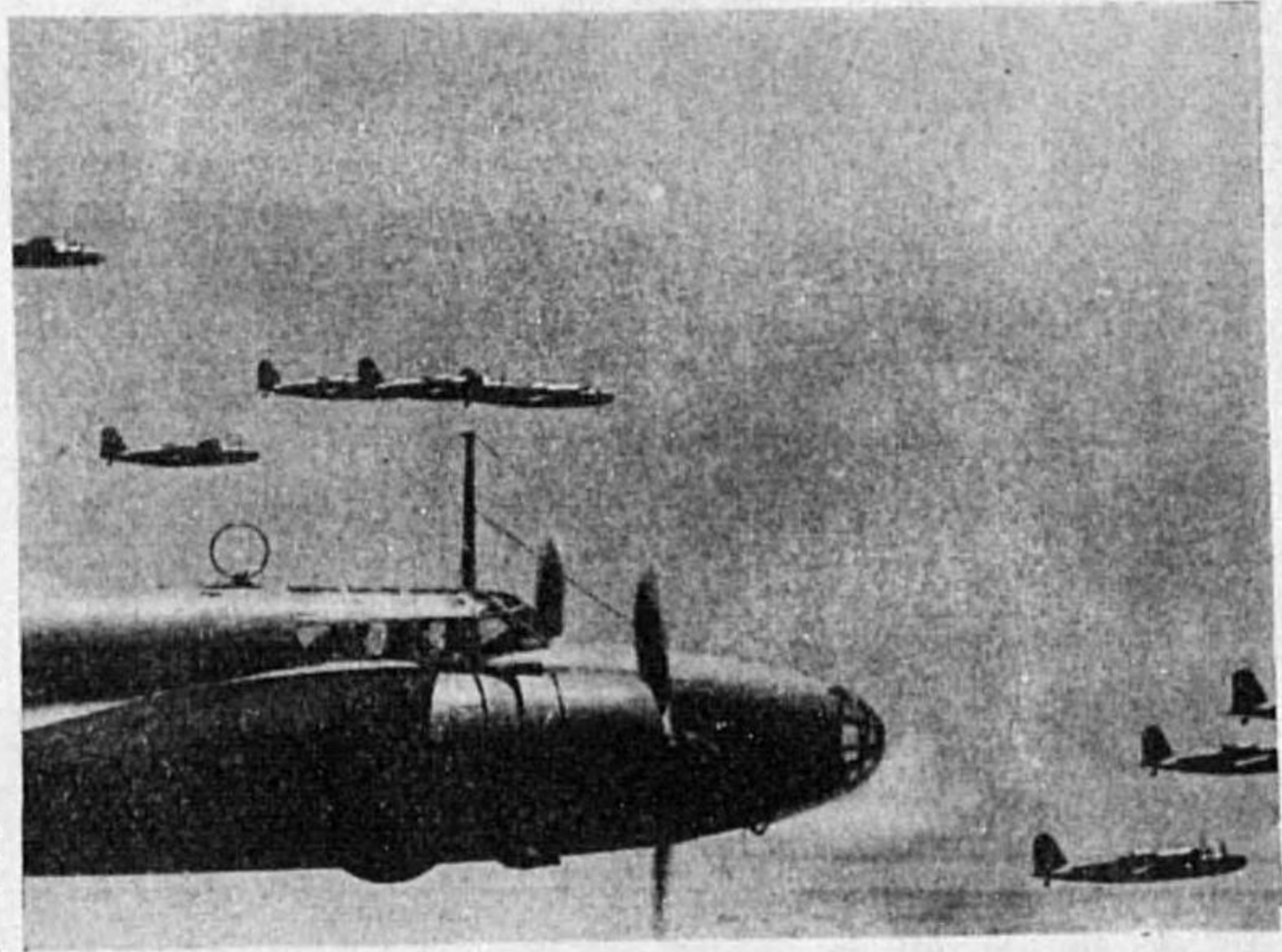
寶藏寺部隊長 寶藏寺久雄

昭和十三年十一月十五日、引續き蘭州空襲を重ねてゐた原田部隊の井關、酒本兩部隊長の指揮する〇〇機は、十七日午前悪天候を冒して、再び寧夏省首府、寧夏空襲を敢行した。

寧夏附近の天候は、遂に猛吹雪となり、前進全く不能となつたため午前十一時四十分、直ちに編隊長は豫定を變更、五原に向ひ、同地の軍事施設を爆撃すると共に多數の宣傳ビラを撒布し全機無事歸還した。

〇〇に歸還した。

◇越へて昭和十四年一月七日、田中、服部、原田各部隊長の指揮する陸軍航空部隊、數十機は密雲を冒して長驅、大舉して目下物情雖然たる敵の



午後四時全機無事歸還の途につけり。

◇越へて一月十日、我が陸軍航空部隊の服部、二井、野本、柴田、相澤、佐瀨、鈴木、田中、井關、栗原、原田、坂本、古林の各部隊は第五次敵首都爆撃の爲め、十日早朝、快晴の天空に數十機の鵬翼をつらねての大編隊をもつて一路重慶を空襲に向へり、この日重慶附近は密雲あるも雲間に重慶を確認し、的確なる爆撃を敢行し、敵の軍事施設に多大の損害を與へると共に、敵の心臓を萎縮せしめ大成功裡に日没ごろ全機無事歸還せり。

然して政情紛々たる敵首都は、防空機關も我が空の勇士に全く威壓せられ、僅かに四機の陸陸逃避する

を認めしのみなり。

○昭和十四年一月十五日、陸軍航空隊の田中、服部、原田等の數十機は、午後三時頃またく敵首都重慶に對し、第六次空襲を実施せり、而して我が空襲を偵知せる敵戦闘機十二機は小瀬にもわれに挑戦し來りしが、猛烈なる空中戦闘の後、服部部隊、栗原部隊、酒本部隊は各一機、井關部隊は二機、合計五機を撃墜したるに、殘餘の敵は倉皇として姿を没せり。

この日重慶附近は一片の雲もなく、我が空襲に對し、最適の條件下に巨弾を投下し、敵の軍事施設に對し甚大なる損害を與へ、恣々敵首都上空を壓せり、我れも又敵の地上砲火の爲め機翼に敵弾を受けたるものあれども、人員に異状なく全機無事、日没と共に基地に歸還せり。

かくて昭和十四年二月の蘭州爆撃となり、同二月二十三日の第三次爆撃に於て、敵機五十六機を撃墜したが、我が方も又、歴戦練達の士として内外に勇名が轟いてゐる井關正夫少佐(當時大尉)を初め十七勇士を喪つたのである。

當時の壯烈なる戦闘模様については、本稿の初めに述べた通りである。

然してこの壯烈な自爆を遂げた山田機の妻が、奇蹟的に僚機のカメラによつて壯烈な瞬間を捉へた。山田機はこの日、午後二時過ぎ、蘭州南方の上空で、群がる敵機を相手に猛烈な空中戦を敢行中、不幸機幹部その他に銃弾を受け、脚を落して下降を初めた、僚機坂本、木村二機の援護も、如何ともなし得ず遂に意を決した山田中尉が、別れの手を振るのが、はつきり見られた、山田機は尙も執拗に喰ひ下る敵二機を撃ち落し、蘭州南方敵陣深く壯絶の最期を遂げ、上田上等兵が、腹から絞るやうな聲で、  
天皇陛下、萬歳、と叫んだ聲が、僚機の受話機を揺がせたのが最後であつた、その時後方から地上を覗んでゐたカメラが最後の瞬間を掴んだのだつた、一筋の黒煙は凹凸の地形の敵陣上に判然と印せられた。

栗原武二陸軍航空兵伍長は、栃木縣上都賀郡清洲村字課程五〇一ノ二に大正五年二月四日生れた  
昭和三年三月、東京神田區佐久間尋常小學校卒業。  
昭和五年三月、栃木縣上都賀郡加藤村加藤尋常高等小學校高等科卒業。  
昭和五年四月、東京神田區岩本町一八田村商店勤務。

昭和十二年三月、現役兵として關東軍に入營。  
昭和十四年二月二十三日、甘肅省上空に於て敵戦闘機數十機と交戦中、遂に敵弾を受け愛機と共に壯烈無比な戦死。同日付任陸軍航空兵伍長。  
遺族現住所、東京市本所區東駒形四丁目二十四、嚴父栗原幸一氏。

【写真説明】一六四頁故栗原武二伍長、一六七頁爆撃より歸る荒鷲、向つて右より三人目栗原伍長一七三頁陸の荒鷲の爆撃行。「陸軍航空本部御貸下げ写真」

### 勝たずば已まずの必勝の信念に燃ゆ

—戦陣訓をその儘の部隊長外村大尉—

凡そ戦闘は勇猛果敢、常に攻撃精神を以て一貫すべし、攻撃に方りては果斷積極先を制し、剛毅不屈、敵を粉碎せしむるべし、云々。

これ「戦陣訓」本訓の一、第六の攻撃精神に強く述べられた所である。信は力なり、自ら信じ毅然として戦ふ者、常に克く勝者たり、必勝の信念は千磨必死の訓練に生ず、須く寸暇を惜しみ、肝膽を砕き、必ず敵に勝つての實力を涵養すべし。

勝負は皇國の隆替に關す、光輝ある軍の歴史に鑑み、百戦百勝の傳統に對する己の責務を銘肝し、勝たずば斷じて已むべからず。



これは第七に述べた「必勝の信念」である。更に本訓のその二に於て、第七の死生觀に曰く「死生を貫くものは崇高なる献身奉公の精神なり、生死を超越し、一意任務の完遂に邁進すべし、身心一切の力を盡くし、從容として悠久の大義に生くることを悦びとすべし」と教へ

てゐる。

あゝ、この武道精神の本隨、戦陣訓をそのまゝに、我が陸の猛鷲部隊長は、外村義雄大尉である。外村大尉は日向の國の出身で、幼年の頃から軍人志願で燃えたつてゐた。士官學校卒業と共に愈々、帝國軍人としての武士道精神に磨きをかけ、今次支那事變勃發と共に出動して、各地に轉戦して、赫々たる武功を樹てたが、昭和十四年四月二十九日の戦闘に於て惜しくも護國の華と散つたのであつた。

散華の悲報は、直ちに現地特派員によつて報せられ、一同この猛鷲を喪つたかと暗涙にむせんだものであつた。

當時の報道内容は次の通りである。

この朝外村中尉(當時は)天長の佳節に敵空軍を掃滅するのだと勇躍基地を出發、あざやかな編隊で颯翼を輝かせて、午前十時十五分陝西省南鄭飛行場の上空に達した、これを知つた敵は戦闘機二十三機が三千米の高度をもつて小瀬にも待ち受け、我が機に挑みかゝつたので當日の指揮官たる外村中尉は直に編隊

を解き、戦闘開始の合図を全機に下すとともに自ら愛機を操縦して群る敵の真つ只中に飛込み、縦横無盡に射ちまくり直に敵二機を撃墜した。此の氣勢に吞まれて狼狽し逃走せんとする敵十數機を發見するや、大膽にも一機でこれが追撃に移り隣間にまたも敵二機を撃墜したが、原田軍曹機は指揮官機がたゞ一機で敵十數機の中にあるのを發見「隊長機危ふし」とばかり應援に赴いたところ、わが追撃機僅か二機と見て敵は數をたのんで反撃に移り得意の機關砲を射ち出した。

彼我の壯烈な空中戦を展開、また／＼敵數機を矢繼早に射落したが、遂に無念敵彈を受け、いまはこれまでなりと、各敵機に體當りを食らはせ南郷の空の花と散つたものである。この壯烈な最期は空中戦史に不朽の名を飾るものとして友軍感激の悲涙を絞つてゐる。

猛鷲外村義雄大尉は「空中勤務者は、いつか華々しい戦闘に散る」を常に覺悟して、出陣前に、その烈たる遺書を、所持品の奥深く残してあつた。

大尉戦死後遺品中から發見された三通の遺書は次の如くで、誰れか涙なくしてはみられない。

その一。

天皇陛下 萬歲

我が命此處に盡くと雖も、護國の眞命は絶體に盡きず、喜びて從容死に就く、空軍の充實を期し、國家の安んずるを見ん。

その二、これは兩親に宛てたものである。

職に殉ずる亦、當然、何ぞ悲しむに足らん、我に天命あり、唯夫命を遂行せざるを嘆く。

生前の不孝を詫び、來世にて孝養を誓ふ、死を喜びこそすれ、亦心安し、御健勝を祈り萬代の繁榮を期す。

その三、これは兩弟、榮造、寅雄兩氏に宛てたものである。

兄の分まで孝養を盡せよ、一家、一門の繁榮、お前等により、協力、協心、爲す所あれ、兄職に殉ずると雖も、心は常に兩人の心と一なり、喜びて死に從容としてつく、兩人の成功の日を鶴首す、身體に御注意を。

○隊長外村義雄陸軍航空兵大尉は、文武兩道に秀でた武人であつた。

北支戦線に出動して、朝夜差別ない空中勤務者としての、激務の中にあつて、ありあはせの用紙をとちて「戦塵を洗ひて」と題して、和歌に、散文詩に、漢詩に、隨筆に、縦横に之を書きなぐつてゐる。

これは又外村家の家實に等しく、故勇士の面影を偲ぶ唯一の遺言である。

今左にその綴から二、三を拾つてみる事としよう、第一頁には三つの和歌がある。

今日も知る故郷厚き眞心を戦の庭にいさを答へん  
歸らじと心に誓ふ雲の上死出の旅途をいかで飾らん  
朝まだき南の空に天翔けるすめら御國のプロペラの音  
次は「秋田部隊の歌」として作詩したもので、烈々たる「猛鷲部隊」の名をよく現はしてゐる。

一、それ聖戦の進軍譜

樂浪住後にして

進む針路に敵を吞む

ほまれも高し我部隊

二、炎熱暑き承德に

初陣の士高らかに

萬里長城俯瞰して

ほまれも高し我部隊

三、〇〇、〇〇基地にして

蒼州、保定堅を抜き

黄河以北に敵もなし

部隊のいさを君知るや

四、石家莊の朝ぼらけ

輕煙翼下いこはせて

太原襲ふ幾そ度

部隊のいさを君知るや

五、山東風雲捲き起り

皇師一度動くとき

濟南城頭、日章旗

秋田部隊のいさをしぞ

次は四月二十九日、天長の佳節に作詩したものである。

うなるプロペラ、うづまく砲煙

熱血の士、大陸に盡す

妻子父母を棄て、唯只管聖戦

陣頭に立ちて、笑鳴狀にあり

貴き血もて彩どられたる

此の廣野、夕陽に輝き

初夏の薫風、そよかに撫す

あゝ、この想ひ誰れや知る

儼友死し馬倒れ、血河渡りて

占領すこの丘、はたたく御旗

集ふ戦士、唯感泣無言

老将の涙、想ひは部下に在り

越えて六月二十二日につくつたものは次の如くである。

大陸に輝ききくれて暑き知る

目に見えて伸びゆく高粱青々と風になびきて心地良き哉

この六月二十二日を以て手記は終つてゐる。

昭和十四年五月八日、告別式に第〇團長 陸軍少将 正五位旭三等寶藏寺久雄閣下は、朗々と弔詞を讀んだ、閣下の哀惜を帯びた聲は参列の將兵の胸を深く打つた。

謹みて、故陸軍航空兵大尉外村義雄君並に故陸軍航空兵曹長原田威治君の英靈に告ぐ。

兩君は北支活動以來、北支の防空及び航空撃滅戦の任務を承け、日夜猛訓練を實施しつゝ、只管敵機撃滅の機を待望しありしか、兩君の勢威は克く敵空軍を恐怖せしめ、奥地深く遁入し、遂に敵機の我が威力

園内へ侵襲するものなく、徒らに脾肉の歎を叩つのみなりき。

然るに敵地上部隊の四月攻撃を企圖するや、敵空軍も亦之に策應し、出撃を畫策しありとの情報に基き

勇躍〇飛行場に前進し、虎視眈々として、好機を窺ひつゝありしが、偶々南郷飛行場に敵機多數集中せ

り、との情報を得、四月二十九日、天長の佳節を期し、外村大尉は部下數機を率ひ、敢然として長驅、南

郷飛行場を急襲し、同飛行場上空附近に於て、敵戦闘機二十數機と壯烈なる空中戦闘を實施し、忽ちにし

て敵機十一機を撃墜せり。

此の我が猛威に怖れを爲したる敵機は、算を亂して逃走せんとするや兩君は、一機も剩さじと追撃又追

撃し、遂に敵機と運命を共にし復還らす。

本空襲行たるや、戦闘機を以てする最大威力圏にして、未だ付て何も爲し得ざりし壯舉たり、而も我に

數倍せる敵戦闘機群に挑戦し、之を完全に撃破せるのみならず、敵の赤色ルートに一大脅威を與へたる、

その武勳は赫々として永く我が航空戦史を飾るものなり。

今は再び兩君の勇姿に接するを得ず、嗚々悲しい哉。

然れ共、航空に職を奉じ、敵地の上空に華と散る、之寔に武人の本懐なり。

我れ等は兩君の遺志を繼ぎ、益々一致協力團結を鞏固にし、武を練り、技を磨き、必ずその遺業を成し

遂げん、兩君以て瞑せよ。

いさゝか微衷を披瀝して、哀悼の意を表し、冀くは在天の英靈勇傑として來り享けよ。

◇

飛行〇〇戦隊〇中隊長鈴木五郎陸軍航空兵大尉の弔詞は、之に續いた。

維時、昭和十四年五月八日、壇を設けて恭しく、故陸軍航空兵大尉外村義雄、故陸軍航空兵曹長原田威

治、同井田逸夫三勇士の、英靈に祀る。

外村大尉は生を宮崎縣に稟け、年少已に盡忠報國の精神に燃え、將校たらん事を志すや、君が俊敏の資

性は、陸軍士官學校第四十七期生として入校するの幸運に恵まれ、初志の第一歩を遂したり。

後君は我航空の重大性に鑑み、敢然として志を航空に致し、第五十六期操縦學生として、優秀なる成

績を以て所澤飛行學校を卒業し、此に年來の素志を達し、大いに將來を矚目せらるゝに至れり。

原田、井田兩曹長は共に生を静岡縣に稟け、若冠にして已に大志あり我航空の重要性を認識し、身を以

て之を發展に盡さんことを志し、少年航空兵第二期生として相共に切磋砥礪相並して、最も優秀なる成績

を以て其課程を終へ、若き陸の荒鷲として其活躍は、萬人注目目的となるに至れり。

本大支那事變の勃發するや、三勇士は共に中隊の最優秀操縦者として、暴支膺懲の熱情に燃え、鵬翼を

連ねて征途に上れり。

爾來東に西に將又南に北に、北支の空其鵬翼の到らざる所なく、常に赫々たる戦功を奏し、其活躍は萬

人驚歎の的たり。

時に昭和十三年三月五日、敵空軍根據地たる南陽飛行場攻撃の命を受け、勇躍其途に就きしが、井田曹

長は途中不幸敵彈を其愛機に受け、不時着の已むなきに至るや、其の身を案じ上空を旋回監視する僚機の

ガンソソ不足を來し、基地に歸還し得ざるに至るべきを憂へ、之を去らしめたる後、自ら愛機に火を放ち

て敵手に委するを防ぎ、爾後杳として其の消息を絶ちたり。

此の危機に際し、從容として迫らざる態度は、誠以て武人の鑑とすべく、其剛膽沈着は典型的名飛行

家と稱すべし、爾來百方手段を盡して搜索せしも、遂に其の消息を得るに至らず、遂に涙を呑んで戦死を

確認するの已むなきに至れり。

事變勃發以來我空軍の一年有半に亘る攻撃に、其の勢力の大半を失ひたる敵空軍は、昨年末より成都、

蘭州の所謂赤色ルートに據りて暫く鳴りを潜め、之が再進に汲々たるものありたり、爾來半歲態勢稍々整

ひたる彼等は、小癩にも所謂冒攻勢の地上部隊と相呼應し、四月以來累次に亘り北支方面に積極的企圖を

なすあらんとするに至れり。

然れども我空軍により第一線飛行場を封せられたる彼等は、守るに易く攻むるに難き天與の地形を利用

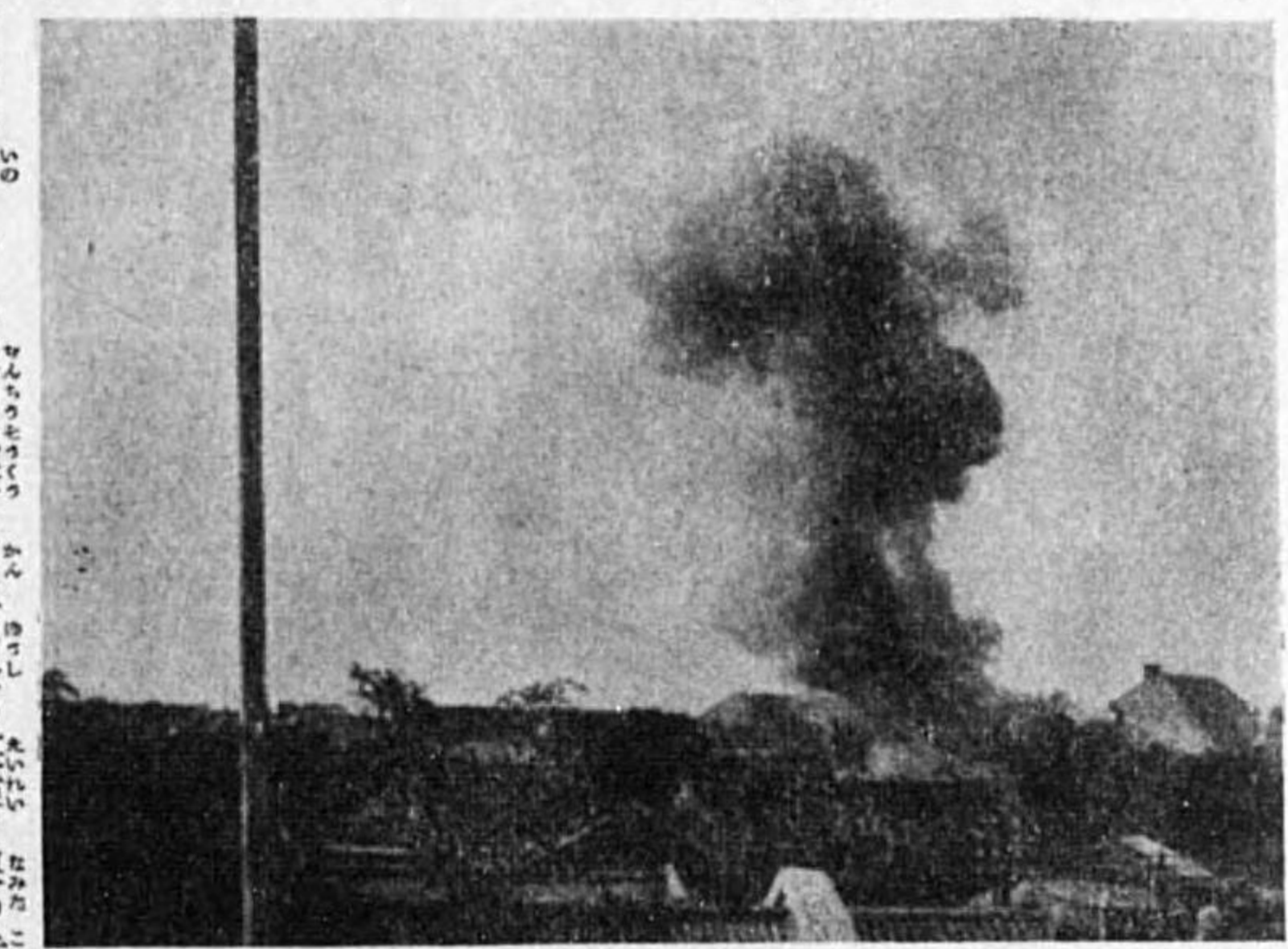
し、我戦闘隊に對し絕對安全地帯なりとして、南郷飛行場を選定し北支進出企圖の基地となすに至れり。

時將に四月二十九日天長の佳節に方り、敵空軍大部隊南郷飛行場に集結するの報に接したる我中隊は、

外村大尉を長とし、突如敵の意表に出て長驅同飛行場を強襲し、我に數倍せる敵戦闘機三十餘機と三十分

に亘る大空中戦を展開し、寡兵よ、其大半を撃墜せり。  
 特に外村、原田二勇士の活躍は目醒しく、恰も群畜中に羽搏く大鵬の如く忽ちにして其の敵機を撃墜せしも、不幸にして其愛敵敵敵の冒す所となり、操縦意欲如くならざるに至るや、肉弾となりて敵機に激突南郷城外護國の鬼と化したり。

本空中戦は凡百難條件を克服し、而も其の戦果の威大なる今事變間に於ける空中戦の白眉たり。  
 更に之を戦略的に見る時再建敵空軍に最優秀部隊を被等の最も安全なりと思惟せる其最重要前進根據地上空に於て、完膚なき迄に破潰し彼等をして再び立つ能はざるに至らしめたり彼等が僅かに我が撃墜を免れたる残存機を周章奥地に遁入せしめたるに鑑みても、其の與へたる打撃は如何に大なりしやを知るべし。



此の威大なる成功の喜びを共に相分ち相喜ばんとするも、兩勇士は已に幽限界を異にして呼べども答へず語らんとするも其聲なし、嗚呼悲しいかな、然れども武人と生屍を馬革に包むは之戰場の常なり、而して兩勇士の活躍は燦として我空軍戦史に、最も光輝ある一斯る日の一日も早やからんことを祈りつ、陣中傳達の間三勇士の英靈と涙の告別をなさんとす、存天の靈庶幾何照覽あれ。

故陸軍航空兵大尉正七位勳六等功四級外村義雄。  
 祖國日向の其の名も奇しき高千穂峯の麓、小林町に外村虎吉の長男として呱呱の聲をあげ、小林尋常高等小學校を経て縣立小林中學校を卒へし昭和五年三月にして其の間常に學力優等の賞を受け幼年時代の希望である軍人たらんと只管士官學校入學に志し其の努力たる近隣の人々を驚歎せしめ、其の眞摯にして敬虔なる父母をして我子ながらも此の子こそ他日大成せんと安堵と満足を感じせしめ、君等英靈を慰めん

しめたり、其の宿望達せられ、昭和六年市ヶ谷の學舎に入學、兵科決定に際し父に送りて軍籍にある身の一死以て君國に報するあるのみよろしく航空兵たるを教されよと、父之を諾し平壤飛行第〇聯隊に配屬せられ本科を卒へ昭和十年九月、航空兵少尉に任官、所澤飛行學校に操縦の術を習得、昭和十二年七月支那事變勃發するや直ちに北支に出動、各地に轉戦、北支の空に敵機を求めて幾月若きパイロットは身の不運を託つて腕を撫して嘆す。  
 昭和十三年十二月明野飛行學校に出張を命ぜられ部隊長病篤きの報に接し急遽任地に復す寸暇を割きて郷里に父母を訪ね其の頑健な體軀を誇り必ずや父母の素志に添ひ統後の赤誠に報するを誓ふ昭和十四年四月二十八日、敵は四月攻勢の體勢を整へ一舉に山西の地の奪還をなさんと其の空軍の主力、陝西省南郷に集結せりとの情報を得るや、鈴木部隊長に代りて之を撃滅せんと翌二十九日天長の佳節に遙かに聖壽の萬歳を祈り此の佳き日に我が部隊は最大の誇りを得んとす、各員の自重と奮闘を希ふの訓辭を最後に一同、勇躍出動、戦闘機の戦闘圏を遙かに超えて南郷の上空に達するに敵は十數機編制の二隊の出動するに遭遇、自ら陣頭に立ち一隊の真只中に突入、部下と共に之を粉碎、一戦を交へず遁走せる他の一隊を追ひて之が全滅を期さんとせしが不運にも部下の勇士原田軍曹を伴に遂に南郷の空に消ゆ。

外村義雄大尉が、昭和十四年一月元旦から戦死の日まで、記載してゐた「陣中日記」は同家の家寶にも等しいものである、これには烈々たる闘志の外村大尉が、連日出動して綿の如く疲れた體をテントの中へ横たへる前に、必ず記載してゐたもので、今は貴い實戦報告書となつた。  
 その内容については、今ここに記載出来ないものが、多いと思ふので割愛する事にすが、その元旦の欄には次の如くに記してある。

本年度は自肅自戒の年と思ひ、相當考へて來たれども、果して如何なる本年を過す事やら、元旦に一年の計はありと言へども、別段これと言ふ計もなし、凡人の悲しきか。  
 唯己に與へられたる任務を、完全に盡さんこそ、現在の自己の爲すべき計たり。  
 と自己の責任観をあきらかにして、武人の精神を強く物語つてゐる。  
 かくてこそ、あの満々たる、烈々たる戦闘が出来たのであり、部隊長としての勇猛さがあつたのだ。  
 次に僚友の戦死を惜んでゐる「見森、杉田大尉、去月二十五日（？）に洛陽附近にて、敵弾に當りて、不時着戦死せし由、戦争なれば吾人の命も、又いつの日か無くなるを痛感す。  
 チョングァ官舎の速中にて、さきに小峯さんを喪ひ、今又兩大尉を失ふ、運命の致す所致し方なしとはいへ、惜しき心持一杯なり、まだ一働きて貰ひたき人達なるに、たゞ残念あるのみ。  
 と記されてゐる。

〔事實説明〕 一七五頁故外村義雄大尉、一八〇頁は天津市街爆撃。

### 陣中の心境たゞ忠節にありと奮戦力闘

—敵機二十五機を撃墜の武勳鈴木昇一大尉—

戦へば攻めこれを取り、防げば敵を懼れしむ、勝たずば止まぬ我が威武を、青史に赫々と輝かせ。天にも恥ぢぬ赤誠は、忠孝一に志し、強く正しく慾に克ち、清節、武人の名を惜しめ。あゝ儼として大なる「戦陣訓」を胸に緊め、大國民の誇りもて、皇威を外に範すべし。偉大なる「戦陣訓」の歌である。

この「戦陣訓」の教へをその儘に、我が陸の荒鷲鈴木昇一大尉は活躍したのである。



鈴木大尉は、昭和十四年五月「ノモンハン」事件が勃発するや、勇猛部隊の〇〇部隊可兒隊の一員として出動。

ソ満國境線の護りとして活躍、五月二十日の戦闘では部隊最初の撃墜者として、中隊の士気をあげ、一躍その名をその武名を轟かせるに至つたのである。

かくして第二次、第三次の空中戦に於て益々その神技を發揮し、六月二十二日、甘珠爾廟上空で、敵百機の大編隊と遭遇し、交戦よく敵八機を撃墜したが、その際自らも

敵弾三發を右手首に受けてしまつた。

かくて流れ出る鮮血をそのまゝに、傷ける右手に操縦桿をしつかり握り、悠々〇〇軒を飛翔して基地に歸り無事着陸した、當時この勇壯なる行為に、部隊の全員は、その勇敢、その沈着なる行動に何れも感激賞讃を送つたものであつた、かくて傷の静養の爲めに〇〇に送られ、その後全快と共に再び出動。

數次の出動に於て、實に敵機を撃墜すること二十五機に及んだ。

かく歴戦の勇士ながら、昭和十四年七月二十九日の戦闘に於て惜しくも壯烈なる戦死を遂げたのである。然ゆるやうな闘志、烈々たる氣魄、とは實に鈴木昇一大尉のやうな堅固な意志を云ふのであらう。

然も、戦場に於ける心境は、たゞ「忠節」の二字につきると、その母によせてゐる。

典型的空の武人、かくあればこそ、その神技に等しい技倆と共に、敵機を多數撃墜し得たのである。

かくて鈴木大尉は、支那事變論功行賞に於て功四級の金鷄勳章を授賜し、然も「殊勳甲」としてその勇名を永劫に我が空軍にとゞめたのである。

さて、こゝで鈴木昇一大尉の横顔をみることにしよう。

可兒隊の猛鷲としてその勇名を轟かせた、鈴木昇一大尉の歴戦の跡をみるとしよう。

鈴木大尉は別項略歴に示す通り、昭和十三年一月明野陸軍飛行學校卒業後、直ちに滿洲〇〇の〇〇隊附を拜命大陸に渡つた、爾來〇〇隊に轉じ更に〇〇となつてノモンハン事件に参加したものである。

昭和十四年五月十五日、〇〇基地を勇躍出動、甘珠爾廟飛行場進出、敵情視察し有力な情報を得て歸還

同年五月二十日、鈴木大尉は〇〇時〇〇を出發して、〇〇〇〇の〇〇方地區の上空を高度〇〇〇米で飛行中、

敵機「エル・ゼット」一機が滿領内に越境して來るのを發見、よき餌物！と、編隊長は僚機と之を追撃し

て攻撃、遂に〇〇河を隔つこと〇軒の外蒙領で之を直ぐつめ、見事に之を撃墜凱歌をあげた。

同五月二十二日、この日も〇〇基地出動、地上

の山縣部隊の掩護に動める一方哨戒飛行を行つた

同五月二十六日、鈴木大尉（當時中尉）は可兒編

隊群の第〇編隊長として行動中、發動機の故障を

發見したので僚機と別れて〇〇基地歸還の途につ

いたが、〇〇河上空に來ると右岸を西進する敵大

型機三機を發見したので、よき敵と、愛機の發動

機の故障な事などを忘れて猛然之に襲ひかゝつ

た。

敵三機は、この時後方旋回銃で猛射を浴せて來

た、一對三の決戦は續けられたが、遂にそのうち

の一機たる三番機を見事に撃墜した。

この時の敵編隊は「エル」六型双發偵察機であつ

た。

同年六月二十二日（第一次戦闘）森本隊が、敵機

六十機と未曾有の大空中戦を演じてゐる中に突入

して同隊と獅子奮迅の働きをした、兩隊の綜合戦果は「イ十五、十六」型合計二十機撃墜、不時着させたも

の四機、然もその四機は不時着後炎上したので結局撃墜と同じ結果となつた、然して可兒隊はそのうち六

機を撃墜したのである。

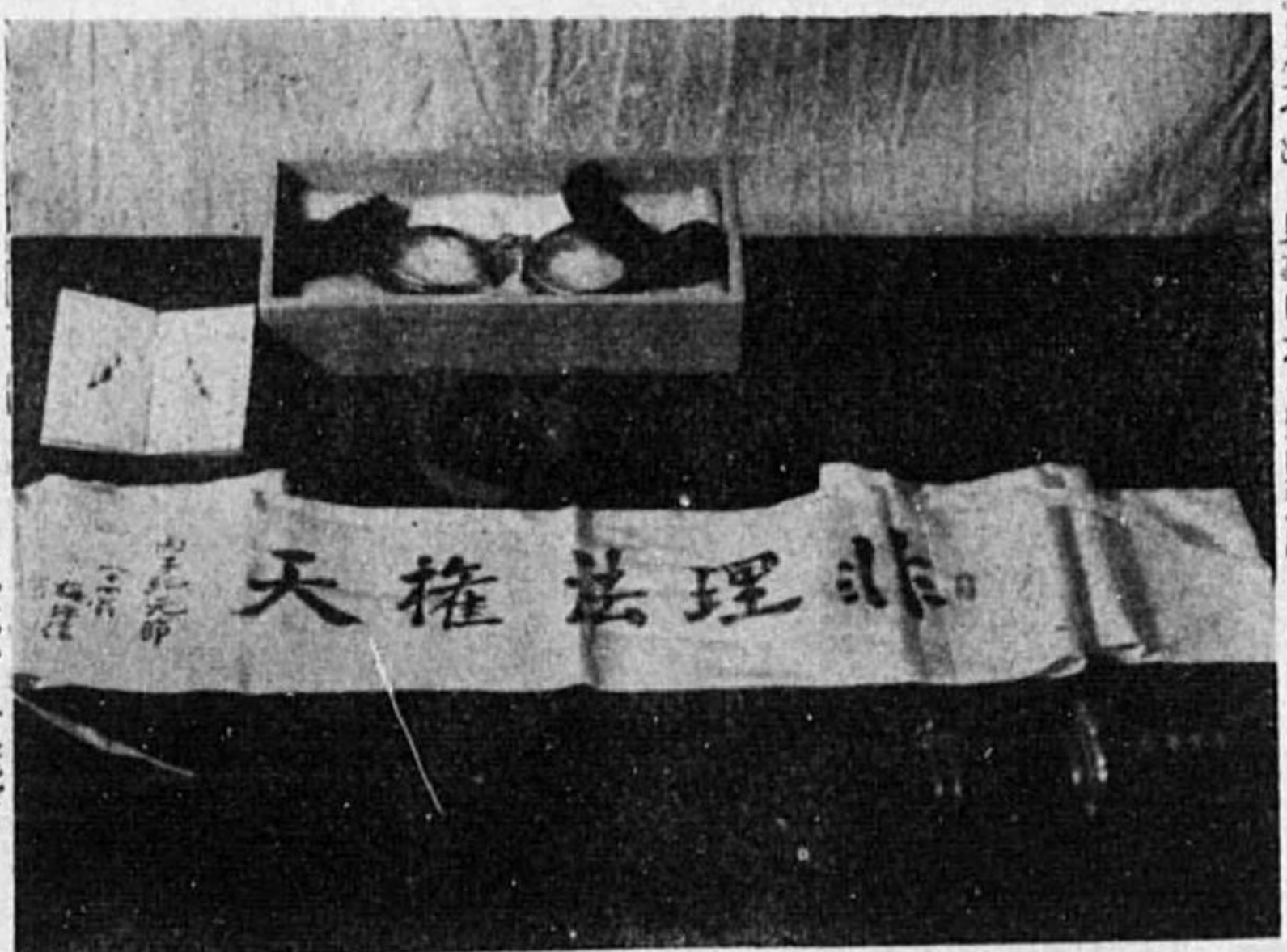
その後に於ける第二次戦闘、これは可兒隊のみの働きで、この時は約五十機の敵と交戦して「イ十五、

十六型」合計三十機を撃墜した、然もその時の友軍は僅かに十八機で、全機奮戦したのであつた。

第三編隊鈴木機（鈴木昇一大尉、編隊長機）はまづその編隊長機を、第一撃で撃墜の殊勳を樹てた。

續いて僚機の戦闘は混亂したので注視は出来なかつたが、鈴木機はよく敵機四機を撃墜した。

この戦闘で右手首に貫貫銃創を受けたので、僚機と別れ隊列を離れたが、この際も反復追及して來る敵



見事に之を撃墜凱歌をあげた。



機と交戦して更に三機を撃墜した、そのほか、銃弾を使はずに敵機二機を撃つ事が出来た。それは近接して来た敵イ十六型二機、鈴木機は襲ふとみせかけてサツと體をかました、その瞬間、敵二機はアツと云ふ間もなく、正面衝突をしてバラ／＼になつて散華した。かくしてこの戦闘に三十機を撃墜したのだが惜しい哉、この戦闘で部下二番機吉野機、三番機石塚機の二機を喪つたのである。

かくて右手首の傷のために、六月二十三日から〇〇野戦病院に送られた。この時別項の手紙を母堂にあてゝある、かくて翌七月には早くも全治して再び戦線にその勇姿を現した。昭和十四年七月二十四日、第〇編隊長鈴木機は「イ十六」の掩護する「エスベ一」編隊群と交戦して、克く奮戦して「イ十六」六機を撃墜、不確実五機「エスベ一」一機、鈴木機の撃墜は四機といふ殊勳を樹てたのである。

越えて七月二十五日(第一次戦闘)戦場附近を制空、敵エスベ一十八機の二個編隊を「イ十六」戦闘機十五機が掩護して来るのを発見したので、これを攻撃して「イ十六」十一機を撃墜した、最もそのうち三機は不確実である、かくて第二次戦闘がこの日行はれ「イ十五、十六」約五十機と交戦し、奮戦よくそのうち十五機を撃墜した、不確実と認むるもの六機ある。

かくて昭和十四年七月二十九日を迎へたのである、この日朝來彼我の攻撃熾烈を極め、優勢なる敵機と交戦中敵弾を受け、壯烈なる戦死を遂げたのである、時に午前十時五十分である。

鈴木昇一大尉はかくして初陣以來、敵機二十有餘機を撃墜した赫々たる戦果を残して惜しくも散華した。これより先、昭和十四年六月二十二日、國境線上で敵機の真只中に突入し、獅子奮迅、よく敵機を撃墜したが、不幸にもその際敵機で右手首貫銃創の鈴木昇一大尉、右足貫銃創の古河治良中尉(當時)佐賀縣竹尾町出身)の兩勇士は、二十三日夜〇〇病院に收容された(別項の通り)

勇士は再起の決意も固く次の如くに元氣で語つたと報ぜられた。「第一回到敵機影を発見したのは午後四時頃だった「敵機見ゆ!」の報告に一齊に飛出せば、斷雲の中に見られた、イ十五、イ十六型十數機の編隊はアムクロ上空を目指してやつて来る。

「それッ!」とばかりに、直ちに之をむかへ撃つた譯だが、敵機は編隊中の一機が撃たれると、全くこのために減茶、苦茶となり、右往左往して六百米、近きは四百米位の遠方から射つばかりで、大した事は無い、そこで悠々命中弾を浴せかけて、約二十機を撃墜し、更に不時着した四機を炎上せしめて、基地に歸還した、約二十分後執拗にも敵機は更に機数を増し、約百機が又も越境して来たので「好御座んなれ!」と敵機一、二機を撃墜して敵を國境線外に驅逐した。

面白かつた事は敵が餘りに多かつたので、我々が頃合を見計つて襲ひかゝる敵機をひらりと、體をかはすと、反対側から進んで来た敵と、敵機同志がアツといふ間もなく正面衝突、或は接觸して、兩機から火

を吐いて墜落して行くことであつた、つまり我が軍は弾は一發も使はず敵二機を葬つた譯だ」と元氣一杯で語つたと。

かくてこの日の戦果は、敵陣に不時着したが無事歸還した辰巳曹長(別項の勇士)及び鈴木大尉等の報告によつて、辰巳機四機撃墜、宮島機一機、鈴木大尉機の體當り變轉による敵機二機の正面衝突等の七機を増加せることが確認されたので、當日の戦果を四十九機と公表されたのを五十六機と正式に改められたのである。

その後、傷癒えて再び空へ、部下、僚友の雪辱を期して第一線に復歸してゐたところ「敵機来る!」の情報を得て勇躍出發、遂に敵大編隊群を捕捉し、必殺、必墜の意氣物凄く、鈴木大尉はイ十五型四機、古川中尉はタムスク上空まで追撃してこれ又二機を射止め「友よ、部下よ、大空の靈よ冥せよ」と、莞爾して歸還したのであつた、そして報道陣に取圍まれながら次の如く語つたと。

「これでやつと、氣が晴々した思ひだ。六月二十二日の戦闘で森本大尉、石塚、宮島、吉野の三曹長を喪ひ、恨み骨髄に徹し、甲合戦を念じてゐたが、復歸後、敵大群に遭遇して一戦を交へた事は全く英靈が導いてくれたに違ひない、そこで遮二無二敵を射ち墜してやつたのだ」その意氣の烈々さよ。

その鈴木昇一大尉が、昭和十四年七月十八日に出した手紙が絶筆となつたが、その中にも燃える闘志がある、更に出勤中我が心境は「忠節」の二字につきると、毛筆で之を書き母堂チツルさんの許に送つた。



私の戦傷、大總御心配をかけて誠に相済みません、傷は右手の手首と肘の中間で痲は三發當りましたがもうこんなひどい手つきで手紙が書けます、六月二十三日の戦闘はすでに新聞でも御覽になつたでしょうが、實に記事以上でありました、何せ一機に對して十數機が群がつて来ましたので、僚機の行動も判らない様でした、無念や森元隊長は戦死され、吉野、宮島、石塚を失ひまして、恨みは骨髄に徹して居ります、早くこの仇を討ちたいと念願して居ります。

母上よ人間は一死、必ずや死所を得る覚悟です、御安心を乞ふ、追日暮さに向ひます夏負けなさらぬ様に頑張つて居て下さい、内地は鮫がうまい時ですな、この手紙を御覧になる頃は第一線で活躍して居ります、では又。

母 上 様

昇、

一

かくして昭和十五年九月二十六日、支那事變陸軍關係論功行賞に際して、世界空軍史に燦として輝くノモンハンの勇士として功四級、旭六等を授けられ、然もその身は、武人最高の榮譽たる「殊勳甲」をもつて發表されたのである。

- 鈴木昇一陸軍航空兵大尉は廣島市東白島町一八八の出身。
- 大正六年四月一日、廣島高等師範學校附屬小學校入校。
- 大正十二年三月七日、廣島高等師範學校附屬小學校卒業。
- 大正十二年四月一日、廣島高等師範學校附屬中學校入校。
- 昭和三年三月七日、廣島高等師範學校附屬中學校卒業。
- 昭和五年十二月一日、騎兵科幹部候補生として騎兵第〇聯隊入隊。
- 昭和六年十一月三十日、幹部候補生終末試験合格除隊。
- 昭和七年一月、名古屋飛行學校入校。
- 昭和九年三月、名古屋飛行學校卒業。
- 昭和九年三月三十一日、騎兵少尉に任ぜらる。
- 昭和十年九月、騎兵第〇聯隊留守隊附。
- 昭和十一年一月、陸軍騎兵學校卒業。
- 昭和十一年八月、滿洲齊々哈爾〇〇部隊附（航空兵科轉科）
- 昭和十二年九月、所澤陸軍飛行學校卒業。
- 昭和十二年十二月一日、航空兵中尉に任ぜらる。
- 昭和十三年一月、明野陸軍飛行學校卒業。
- 昭和十三年一月、滿洲哈爾濱〇〇部隊附。
- 昭和十三年七月、滿洲海拉爾〇〇部隊附。
- 昭和十四年五月、ノモンハン事件に参加。
- 昭和十四年七月二十九日、戦死。任陸軍航空兵大尉。
- 遺族原籍地、母堂鈴木チツルさん。
- 〔寫眞説明〕一八二頁故鈴木昇一航空兵大尉、一八三頁故鈴木大尉遺品、一八五頁左端が鈴木大尉。

### 滿洲事變に武勳の勇士壯絶敵中に自爆す

—石川千代藏大尉と共に活躍の成瀬薫中佐—

昭和十二年十月十三日〇〇發表、北支に活躍中の陸の荒鷲、柴田部隊石川千代藏中尉操縦、成瀬薫砲兵少佐同乗の飛行機は、正太線の敵視察のため、基地を出発したが、その儘消息を斷ち行方不明の旨原隊から發表された。



石川中尉は千葉縣夷隅郡千町村萩原出身、大正十四年現役志願の砲兵から航空科に轉科した豪膽な勇士であり、成瀬少佐は陸士三十二期出身で、滿洲事變には中隊長として出陣、功五級を賜つた武人である。

つた。

かくして昭和十二年十二月二十六日山西省正太線北端の河原で、その屍體を發見した。結局十月十三日午前九時山西省正太線護鹿から、檢次にいたる敵隊を搜索の爲めに〇〇飛行場を出発し、午前十時三十分同地に於て戦死されたものと認定された。

この勇士は、昭和十三年十月二十二日、支那事變陸軍關係、第六回論功行賞にあつて「壯烈に敵中に自爆す」として、成瀬薫陸軍砲兵中佐は功三級、旭四等の金鷄勳章を授け、石川千代藏大尉（別項詳報）も功四級、旭六等の金鷄勳章を授けられた。

その勳功については、別項石川大尉の欄にも記した所であるが、次の通りである。事變當初より派縣、保定、石家莊附近の會戦に於て、悪天候を冒し、地上射撃の危険をも諒することもなく、遠く敵後方に行動し、屢々重要な資料を提出し、地上部隊の作戦に貢献する所極めて大なるものがあつたが、正太線關泉附近に於て、敵部隊の行動を確認せんが爲め、極めて勇敢に、低空飛行を續行中、

敵弾を受け飛行不能に陥るや、敢然敵中に自爆を決行し、壯烈なる戦死を遂げた。といふのである、あ、師らぬ北支に活躍の荒鷲も、その論功行賞に際して、金勳勳章を賜ひ「殊勳甲」を以て發表された聖恩の有難きに感泣した事であらう。

さて成瀬中佐の属する〇〇聯隊長から、故勇士の武勳の程を次の如く通知して来た。

忠誠勇武陸軍中佐五位勳四等功三級成瀬中佐は支那事變に方り夙に戦雲漲る北支那に出勤し、陸の荒鷲として勇奮活躍中昭和十二年十月十三日山西省正太線鐵道陽泉附近坡頭驛上空に於て不幸敵弾を受け愛機と共に敵中に突入し壯烈なる戦死を遂げ典亞聖戰の華と散る(享年三九)

中佐は明治三十二年三月仙臺市に生れ幼年同市東六番町小學校同市第一中學校に學び長じて父君の遺志を繼ぎ軍人を志し大正六年士官候補生として野砲兵第〇聯隊に入營す同九年五月陸軍士官學校を卒へ、同年十二月陸軍砲兵少尉に任ぜらる、性剛毅、果敢にして崇高なる人格、短編なれども機敏、強壯なる體軀を有し、頭腦亦明晰にして、優秀なる識見、技能を備へ、責任觀念頗る旺盛にして、處事敏速、的確、且つ豪放なる半面、極めて慈愛温情に富み、眞に智、仁、勇兼備の武人なり。



少尉任官以來、野砲兵第〇聯隊に奉職すること十九年、常に將校團の至實にして、上下僚友より深く尊敬信頼を受け、大いに將來を矚目せらる。爾後陸軍砲工學校に學び、更に下志津陸軍飛行學校に於て偵察術を修得し、果進して昭和十二年八月陸軍砲兵少佐に任ぜらる。

其間昭和六年滿洲事變には、野砲兵第〇聯隊中隊長として從軍、各地に轉戦、砲臺山の占領と、その後優勢なる敵に對する再三の守備、並に砲臺の建設等拔群の偉功を奏す。砲臺山は吉林郊外にあり、人呼んでこれを成瀬砲臺とも云ふ。

亦昭和十二年七月七日、支那事變勃發するや、選ばれて〇〇兵團柴田部隊附、偵察將校となり、勇躍征途に上り、北支蒙疆の空を縦横に飛翔し、或は河北の太平原に或は山西の大山岳地帯に縦横に活躍する英姿は、曾て砲兵中隊を指揮して、滿洲各地を奮戦せる、颯爽たる姿と共に、廣大なる北支戦線敵後方の情況は、専ら航空搜索の成果に待つ所大なりと、勇を振ひ常に正確適切な情報を齎し、軍の作戰に寄與貢獻する所頗る多く、軍をして寡兵克く大軍を撃破し、曠古の大捷を博せしむるに至る。然るに惜い哉、天長く壽を假さず、同年十月十三日、河北山西兩省間の峻峻なる山岳地帯を越え、敵の猛射を冒して、深く山西省の奥地に募進して遂に歸らず。

出征以來、搜索に、或は爆撃に出勤すること實に五十四回、飛行時間百五十餘時間に及び、その絶大な技能と、果敢の精神とは、常に敬嘆すべき成果を挙げ、その武功は拔群にして、洵に空中戰士の魁傑と謂ふべく、即ち陸軍砲兵中佐に榮進し、從五位、勳四等、功三級に叙し、旭日小綬章、並に金勳勳章を賜はり、以て赫々たる功績を頌せられ、靖國神社に合祀せらる。

かく勳功を樹てた成瀬中佐の碑が建立せられた、その碑文には次の如く刻まれてゐる。

陸軍少將從四位勳三等功五級松本勇平家額  
陸軍砲兵中佐從五位勳四等功三級成瀬中佐墓誌  
忠誠勇武壯烈鬼神泣き儒夫爲に起つ、今君に於て其人を見る何ぞ其崇高なるや、願れば暗雲低迷東亞に漲り日支事變の勃發するや、君が北支の出勤は陸の荒鷲なる馳名と共に世の激賞を受く、時は昭和十二年十月十三日なりき、山西省正太線附近坡頭驛上空戰機關鎗掃射に當り、不幸敵弾を受くるや猛然愛機と共に敵中に突入し遂に壯烈の戦死を遂げ、典亞聖戰に殉ず、芳烈萬古に轟るものと云ふべし、嗚呼年實に三十有九、君仙臺青葉城下に生る、幼にして東六番町小學校に學び、次で第一中學校に學ぶ、先君の志を繼承し希望は軍人に在り、大正六年士官候補生として野砲兵第〇聯隊に入り優秀業を卒へ陸軍砲兵少尉に任ぜらる、更に進で陸軍砲工學校に學び、又下志津陸軍飛行學校に研學し、爾後果敢陸軍砲兵少佐の榮任を見るに至るもの、昭和十二年八月なりしなり、君軀幹矮小に屬するも天資剛毅果敢事を處する明敏的確且豪放の半面温情玉の如きあり、人皆曰く君が人格の崇高なるは識見技能と相持て得る所、智、仁、勇三備の士を以て稱せらるゆえなきにあらず、是より先昭和六年滿洲事變に方りては野砲兵第〇聯隊中隊長として偉功あり、就中吉林省砲臺山占領に於ける援群の奏功は、爾後此山を稱するに「成瀬山」を以てするが如き其一班を想見すべきが宜なり、勳五等雙光、旭日章、並に功五級金勳勳章を下賜せらる、武人の面目何物かこれに過ぐべき、爾來君が名聲の噴々たる飛翔の神技偵察の奇警、惡氣流の克服、爆撃の敢行、一として神技たらざるはなく其爆撃出勤は實に五十四回、飛行時間百五十有餘を算す、洵に空軍戰士の魁傑として汗青を照すものと云ふべし、天朝功を賞し陸軍砲兵中佐に任じ從五位勳四等功三級に叙し靖國神社

に合祀せらる、武士の光榮何物かこれ比すべきものぞ、予嘗て君と仙臺聯隊に奉職し其崇高なる風貌と精神とは皇國將兵の典型として畏敬せる所、配重子、小松氏、三子を生む、二男一女、親を奉ずるに孝、敬夫に、貞淑に義方子を教ふ、碑誌の遺予囑を受く諱不文を以て辭すべきなし、梗概を叙しこれに應ふと附云

陸軍少將從四位勳三等 高橋 確 郎 謹選  
正六位勳六等 四 龜 仁 邇 謹書

成瀬中佐は別項略歴でも示す通り、宮城縣仙臺市の出身で、原籍地には母堂よう子刀自を初め夫人しげ子さん、長男明一君、長女和子さん、次男昌秋君の二男一女がある。

嚴父堅策氏は先年物故したが、歩兵少佐であり、故勇士の令妹二人とも軍人に嫁してゐるといふ、珍しい武人の家庭である。

成瀬中佐は別項略歴でも示す通り、宮城縣仙臺市裏山本町一四で、明治三十二年三月二十五日生る。

明治四十四年三月、仙臺市東六番丁小學校卒業、同四月、縣立第一中學校入學。

大正五年三月、同中學校卒業、陸軍士官學校に入校。

大正九年十二月、砲兵少尉任官、野砲兵第〇聯隊付。

大正十年十二月、普通學生として陸軍砲工學校に入校、同十一年十一月卒業。

大正十二年十二月、任砲兵中尉。

大正十三年二月、野砲兵學校觀測通信學生として入校、同校修學歸隊。

大正十四年三月、偵察學生として下志津陸軍飛行學校入校、同十四年六月修業。

大正十四年七月、射撃學生として明野陸軍飛行學校に入學、同八月修業。

昭和五年八月、任砲兵大尉、同十二月中隊長。

昭和六年四月より、七年十二月まで滿洲事變に勤務。

昭和八年十二月、甲種學生として野砲兵學校入校、同九年六月同校卒業。

昭和十二年七月十二日〇〇出動。

昭和十二年八月、任砲兵少佐。

昭和十二年十月十三日、任砲兵中佐。

昭和十二年十月十三日午前九時、山西省正太線護鹿より、檢次に至る敵情搜索の爲め、〇〇飛行場を出發したる儘行方不明、同年十二月二十六日、山西省正太線坡頭北方河原に於て屍體發見、十月十三日午前十時三十分同地で壯烈なる戦死をしたものと認定された。

遺族原籍地、成瀬しげ子さん。  
〔寫眞説明〕 一八七頁故成瀬中佐、一八八頁成瀬中佐の碑文。

### 初陣に二機撃墜し百機撃墜の心願に燃ゆ

—少年航空兵出身の偉才兒玉高順曹長—

少年航空兵出身ながら、その闘志は火と燃えて、初陣でよく二機を撃墜し、百機撃墜の心願のもとに、その後も獅子奮迅の活躍を續けたが、武運拙なくその目的を貫徹せずに散つた。

然しその烈々たる闘志は、やがて中隊への遺志となつて、こゝに猛然と立ちあがつたのであつた。

その力強き荒鷲、兒玉高順陸軍航空兵曹長その人である。

兒玉曹長は、昭和十四年九月一日、越境のソ聯空軍と大空中戦を演じ、將軍廟二十軒の地點で壯烈な戦死を遂げたものであつた。

この日は、も一人の少年航空兵出身の猛鷲を喪つた、それは、別項に詳報を掲載してある、須藤徳彌陸軍航空兵准尉である、共に若き闘志に燃える荒鷲を喪ひ全軍涙にくれたものである。

然しその勳功、その赫々たる武勳は、永く我が空軍史の中に記録され、又その靈は、永劫に我が空軍の護りとなつて、陸の荒鷲の武運長久を祈る事であらう。



よつて、もつて、その武勳は、靖國神社臨時大祭にあつて、畏き邊りでは、功五級、旭七等の金鷄勳章を授賜され、然もその身は、武人最高の「殊勳甲」をもつて發表された。

その英靈も、その遺族も、共に共に、限りなき聖恩の有難さに感泣した事であらう。

兒玉曹長は、長崎縣小縣郡西鹽田村大字前山一、二九五の出身である。

昭和七年三月、同村の小學校を卒業して、昭和十一年一月少年航空兵として熊谷陸軍飛行學校に入學。

昭和十二年十月に同校を卒業し、十一月に朝鮮平壤飛行第〇聯隊に配屬された。

越えて十二月、空の武人としての一段の飛躍の修業の爲めに、明野陸軍飛行學校に入學した。

こゝで修業を終り、昭和十三年三月卒業と共に原隊に歸り、續いて同年八月更に各務ヶ原陸軍飛行第〇

隊附となり、我が國の世界に誇る、陸の荒鷲としての街道を一路進んで来た。

かくて腕を撫して、その出動の命令を待つてゐたが、遂に待望の日は来た、昭和十四年六月である。

ノモンハン事件は起きたのである。

不法なるソ聯空軍は越境して来た、これを迎へて我が荒鷲は遂にたつたのである。

見玉曹長が、初陣に敵二機を撃墜した後、昭和十四年七月十二日、爆撃機の掩護をして〇〇基地を出発、ハルハ河上空で、ソ聯戦闘機イ十五、イ十六型七十機の編隊群と遭遇し、ここに未曾有の大空中戦を演じた、敵機十数機を撃墜した際の模様を、郷里に健在の殿父見玉益貴代氏の許に次の如く通知して来たが、これが、同曹長の最期の手紙となり、又遺書ともなつたのであるが、闘志が偲ばれる。

拜啓、酷暑の候と相成りました。

御一同様にはお變りはありませんか、お伺ひ申し上げます。

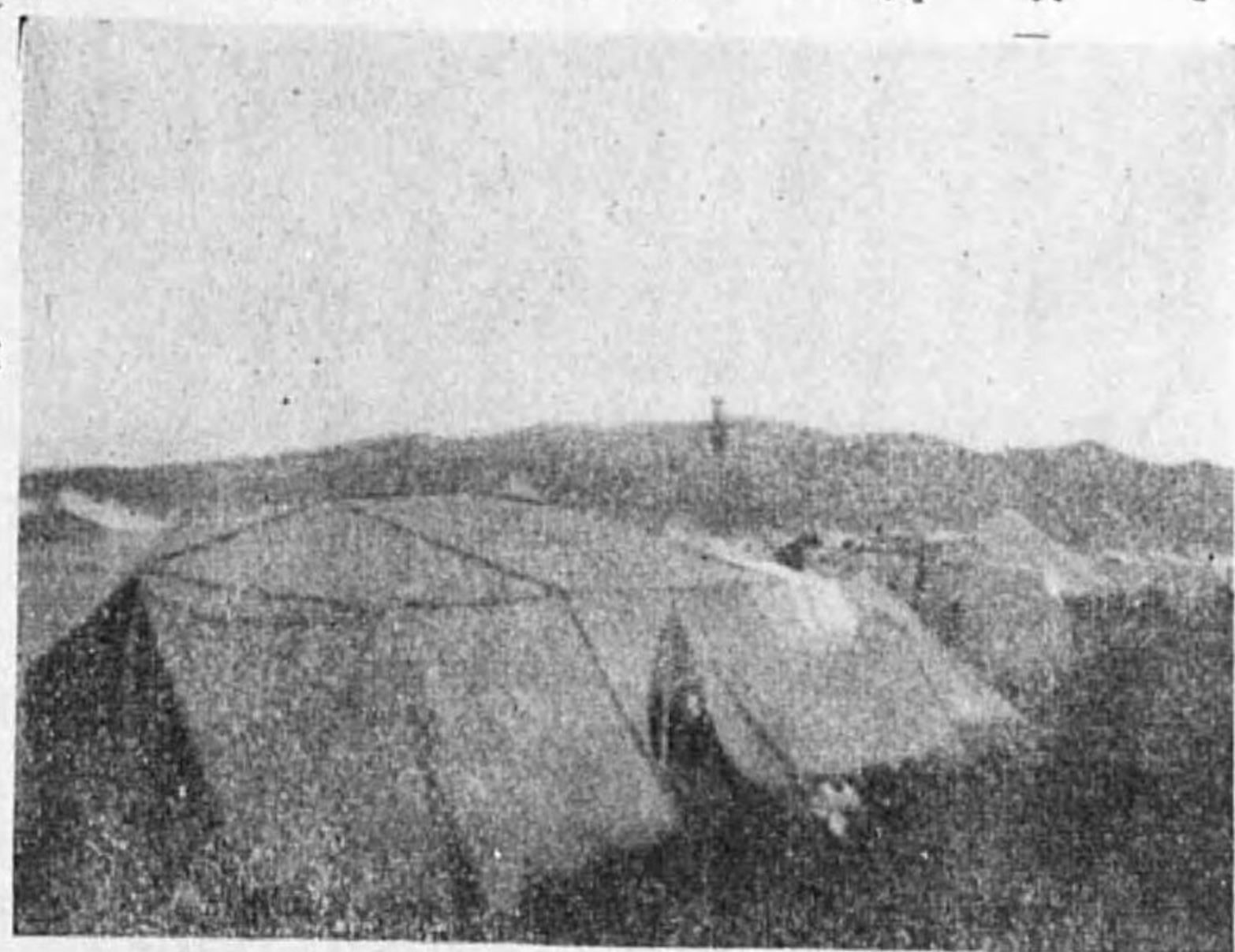
高順もその後相變らずの元氣にて、満蒙戦場で頭張り續けてゐますから御休心下さい。

お父様、毎日の新聞や、ラヂオに出る様に、我が荒鷲部隊の活躍振りは大したものですよ。

我も六月二十七日の初陣に、敵戦闘機二機を撃墜せるのを手始めに、数十回の大空中戦を演じ、百機撃墜を目標に奮戦してゐます。

私が激戦中、最も苦戦を致したのは、七月十二日の戦闘でした、爆撃機を掩護しつつ、〇〇基地を出発して、ハルハ河上空を制空してゐる折柄です

道が彼方、ボイル湖上空にソ聯戦闘機のイ十五、イ十六型の七十機編隊群を発見するや編隊長の攻撃命令と同時に突入、激戦奮闘二十分間、敵は火災を起して墜ちるもの、難撻状態となつて墜ちるもの、その数知れず、私は十数機を相手に闘ひ、敵弾二十五發を愛機に受け、そのうち二弾は不幸



重要機部に命中して、敵地に於てプロペラは停止するのやむなきに至つた。

然し不幸中の幸ひにも、敵地上部隊の頭上すれ／＼にして、漸やく女軍戦線内に不時着しました。

そして無事〇〇基地に歸還しましたが、我れながら武運の強いのに感心してゐます、戦ひ終つて、やがて酷熱を透つた大陸の太陽も、午後九時二十分、西の空を眞赤に染めて沈み、夜の幕が降り初める頃、歸らぬ人となつた、亡き戦友に、砂漠に咲いた花一輪を手折つて手向け、ソ聯の空の一角を眺め、あすの復讐戦を誓ひ、涙にかきくれるのです、私も自信ある胸を愈々發揮させます、皆様も酷暑の折柄、御自愛專一にお働きあらん事をお祈り申し上げますとあつた。

〔寫眞説明〕一九一頁故兒玉高順陸軍航空兵曹長、一九二頁〇〇前進基地。

## 大陸に轉戦の武勳赫々蘭州空襲に散華す

—陣中愛犬ハチ公物語りの市川英二郎少尉—

陸、海空軍の勇士が、千古不滅の武勳を樹て、護國の英靈となられた、その英靈に捧ぐる一億同胞の感謝の念は、事變記念日を迎へて一應深きものがあつた。

この意味深き事變記念日を前に、陸軍關係第十二回論功行賞が發表された。

この金功勳章を授けられた勇士のうちで、武人最高の「殊勳甲」を賜はつた勇士の中に蘭州空襲の華と題して、その名を列したのは、我が市川英二郎陸軍航空兵少尉である、市川少尉は、功五級、旭六等を授



賜されたが、當時同じく名を連ねたのは、戦死當時同じ田中部隊だつた、二井卓少佐(三重縣出身、功四級、旭四等授賜)、上田虎雄少佐(島根縣出身、功四級、旭四等授賜)、奥高治少尉(大分縣出身、功五級、旭七等授賜)の三勇士であり、その勳功に對しては次の如く發表された、これを受けた、今は亡き靖國の宮に鎮まります英靈、その遺族の感激、感泣は如何ばかりであつたらう、共に共に、聖恩の有難きに新たな感激をしたことであらう「武漢攻略戦に

參加して、適時敵の要衝を爆撃して、地上部隊の作戦を有利ならしめ、又奥漢線の遮断、及び數回に亘る重慶の爆撃に任じ、我が空軍の威力を發揮した。

昭和十四年二月二十日、第二次蘭州爆撃に加はり、三十数機の敵機と、空中戦を交へつゝ、敢然敵飛行場を爆撃すると共に、敵二十数機を撃墜し、偉大なる成果をあげたが、尙交戦中要部に損傷を受け、遂に壯烈なる自爆を遂げた」といふのである。

如何にその戦死が壯烈悲壯なものであつたか、知れる。

さてこゝでこの歴戦練達の故市川少尉の歴戦の跡をみるとしよう。

市川英二郎少尉は靜岡縣出身の陸軍の偉才である、そして戦線にあつては〇〇部隊に屬してゐた。

〇〇部隊は——一彈必中、これが部隊長以下各荒鷲の一貫した念願である。

そして長途爆撃の雄、〇〇部隊と共に、全支戦線で、同じ念願のもとに、素晴らしい業績をたてゝゐるのだから嬉しい限りである。

轟然とエンヂンが廻轉して、ひと度車輪が基地を離れた瞬間、再び基地には歸へらず、たゞ荒鷲の頭の

中には、總てを忘れた、一弾必中の信念のみがあるのである、何んといふ頼もしい限りであらう。  
 中支特有の長い秋の季節とも別れて、戦線に二度目の冬が近づいて来た頃である。  
 寒さの爲め、拂曉の出勤にエンチンの、かゝりが悪くて機付兵を泣かせるのも、これからの時期だ。  
 だが、相變らずの元氣一杯なのは荒鷺達である『俺れ達か、ほんとうに働くのは、これからだ』と。  
 そのハリキリ方はない、當時〇〇部隊に市川英二郎少尉（當時准尉）の静岡縣出身を初め、西下春平曹長（静岡縣榛原郡萩間村）、神谷庄一軍曹（同小笠郡池新田村）、片山銳三軍曹（同志太郡岡部町）の勇士が元氣と、満々たる闘志をもつて、静岡健兒の意氣を示してゐたものである。

あゝ、然し、その烈々たる闘志に、ものをいはずして戦線を縦横無盡に活躍してゐた、市川英二郎少尉は遂に歸らぬ人に加はつたのである、然してその武人の龜鑑たる精神は、愛妻つやさんに遺された遺書によつても明らかである、この遺書は、市川少尉の戦死後、発見開封されたものである。



＊自分は只今より、中隊長機を（戦隊長搭乗）操縦して、敵地遠く敵飛行場攻撃に赴かんとす。  
 生還もとより期し難し一死以て國難に殉ずる事を得るの光榮、何者かこれに過ぎん。  
 天皇陛下の御爲めに戦死す、武人の面目にして、男子の本懐なり。  
 御身と契りて日向淺く何等報ゆる事なかりしを甚だ遺憾とす。  
 自分亡きあとは、全部御身に一任す、御父、母

この遺書は原文の儘。  
 上様、又忠州の母上と、よく相談しよきに取計らはれよ。  
 全部御身の意のまゝとす。  
 願はくば、長壽を保ち、多幸を得られよ。

十月二十八日  
 最愛なる鈍子殿  
 市川英二郎  
 二仲 一、濱松の佐野齒科醫に何程か、未支拂あり、約一圓位ならん支拂ひ下さい、濱松の叔母様がよく御存知の筈です。

二、一番小さなトランク内に、現在高九三五圓の郵便貯金あり、内五〇〇圓を國庫へ、残りを以て忠州の父上の墓を建て、あげて下さい、これは母上の希望で、公文名の祖母の近くにお願ひします。  
 三、私の墓は不用です、若し建てるならば小さいのを建て、下さい。

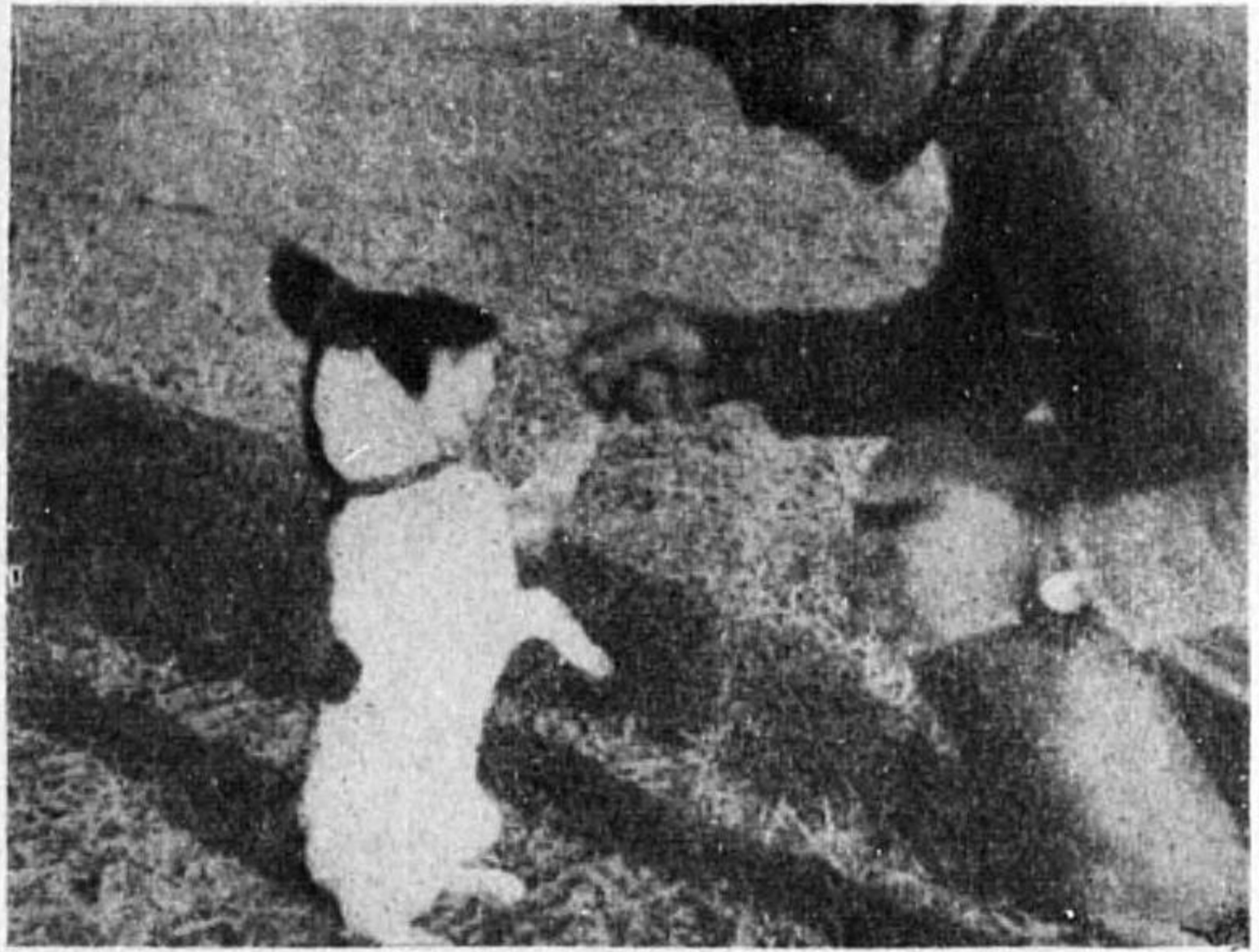
あゝ誰れか、感激の派なくして、この遺書を讀まれやうか。  
 死して尙、國家を思ふ、そして自分の貯金を國家へ献納する勇士の遺志にはたゞ感激の他はない。  
 越えて、故市川英二郎少尉の未亡人つやさんは、故勇士の遺志にもとづいて、静岡縣見付警察署を訪れて『亡夫の遺志である五百圓の献金』方を寄託して居列ぶ署員を感激させた。  
 この市川少尉が、昭和十四年一月十五日夜投函した手紙が、絶筆となつた、勿論つや子夫人に宛てたものであつて、次の如くである。

お變りなく、御元氣の事と存じます。  
 本日は第四回、敵首都重慶攻撃を實施致しました、そして敵戦闘機カーチスホーク型及び、イ十五型等十數機の戦闘機と初の空中戦闘を、重慶市街上空で行ひ、敵機四機を撃墜致しました。  
 本日の日記の一端を書いてみませう。  
 一月十五日、日曜日晴天、出勤回数、一一四回、高度〇〇〇米。戦隊長機操縦。  
 第一回空中戦闘、敵カーチスホーク型、エツチ機、イ十五型、合計十二機（但し、自分の眼で発見した敵機のみ）七時三十分起床、いつもの様に、中隊全員を指揮して、裏の廣場で體操實施。  
 〇時三十分、各機飛行準備完了、愛機〇〇號機はけふも調子良好なり。  
 〇時三十分〇〇戦隊の〇〇を先頭に〇〇隊の〇〇機、〇〇隊の〇〇機等編隊離陸を行ふ。  
 戦隊長機を先頭に〇〇機の編隊群は一路重慶へ、重慶へ、――  
 〇時四十分宜昌上空通過、愈々山岳地帯にかゝる、視界は餘りよくないが、雲は少しもなく、絶好の爆撃日和だ。

〇時三十五分、敵首都の重慶飛行場を眼下に望む、大、中型機十數機を発見す。  
 この時、前方〇〇米の地點に九機編隊の敵機を発見す、時に〇時五十分である。  
 すさまじい空中戦闘が開始された、ダダダ、敵も、味方も機銃からは眞赤な火を吐いてゐる。  
 進入、右、右、よし、その方向、敵は尙執拗に攻撃して来る、爆弾投下、隊長の聲は張り切つてゐる。  
 中空を飛ぶ爆弾、重慶市街に完全に、全弾を命中させた、そして歸途につく。  
 又々敵の十數機の戦闘機が、我が編隊に向つて攻撃をして来る、ダダダ、まるで豆をいる様だ。  
 一機、又一機、續いて一機、敵機は火を吐いて墜ちて行く、あゝ我れ勝てり。  
 各機の搭乗者の顔、顔、皆一様に張り切つて、如何にも嬉しうである。  
 〇〇時、無事全機〇〇基地に歸還した、戦隊長も、如何にも嬉しうに、けふの爆撃の模様を〇〇團長

に報告してゐる、續いて「カンバイ」だ。敵首都重慶にとゞけよ、とばかり一同大聲をあげて、大日本帝國の萬歳を三唱した、そして、あす第五回爆撃の準備に取かゝつた、では又明日。  
本日の戦闘で第〇中隊の二番機は三十數發の敵弾を受けてゐたが、何れも急所をはづれてゐた爲めに無事であつた。

と認められてあつた。  
如何に當時の爆撃行が、筆舌のつくし得ない、壯絶無比なものであつたかゞ知れる。



かく長驅支那奥地、山嶽嶺々たる地帯を越え、敵防空砲火をくゞつて空爆行の勇士が、ひと度基地に歸つて翼を休めるとき、その荒鷺に似ても似つかぬ温情、純情さがあるのである。  
我が荒鷺の偉才と謳はれた市川英二郎少尉にも又、その美しい話が残されてゐる。  
上部にかゝげた寫眞を御覽下さい、犬を愛撫してゐる荒鷺の姿、それは戦線とは思へない程のなごやかな気分が漂つてゐるではありませんか。  
これは今は亡き市川少尉の姿です。

この犬は、市川少尉の愛犬「チビ公」です。  
これについては「歸らぬ自爆勇士の機影を日毎に待つ、荒鷺部隊の忠犬ハチ公物語」と題して、現地特派員から報ぜられたまゝを左に記載しよう  
我が華々しき空中戦史に、一段と輝く一頁を飾つた陸の荒鷺の赤都、蘭州空爆に際し、全機體火と燃えて敵陣に壯烈無比な自爆を遂げ、大空の華と散つた空の勇士の愛犬が、今は亡き主人の姿と、その愛機の影を求めては〇〇飛行場を駆け廻り、勇士達の涙をそゞつてゐる、それは眞に「忠犬ハチ公」物語りをその儘の美しい戦場に咲いた物語りではあるまいか。

奥地爆撃に多大の成果を収めた〇〇部隊には、チビ公、ヨタ公、太郎の三四の犬がある。  
これ等の犬は時折同部隊の爆撃行に参加、現にヨタ公の如きは第一回蘭州爆撃に参加して、地上勤務者達を羨ましがらせてゐるが、そのうち、白と、茶色の毛並で、身體の小さいチビ公は、さきの蘭州爆撃に散つた、同部隊の市川英二郎少尉の愛犬で、これまで捨て犬と同様であつたのを、市川少尉に拾ひあげら

れて、肉とミルクで育てあげられたものであつて、その首には、少尉の手になる古紙で「上等兵」の肩章がぶら下げられてゐるので、同部隊では「チビ公上等兵」と呼んで、皆から非常に可愛がられてゐたのであり、茶目な若い一等兵や、二等兵達は「チビ公上等公どの」などと、舉手の禮をするなど、隊内きつての人氣ものであり、又人にもよく馴れてゐた。  
市川少尉もこのチビ公を我が弟の様に可愛がつてゐたのであつた。

このチビ公は、市川少尉が戦死の前夜、即ち昭和十四年二月十九日夜、所謂虫が知らずといふのか、夜を徹してクン／＼泣いて、少尉を一睡もさせず、翌二十日朝、いざ出發となると、市川少尉が、機上の人となるや、機體の下までついて来て動かす、同機が爆音高く飛翔した後を、いつまでも、いつまでもその行方を眺めてゐたが、夕刻市川少尉の僚機が、次々と歸還して來るのに歸らず、少尉がいつも、着陸と同時に、パイパイとよく口笛を求め、懐かしいその姿を求めて駆け廻つてゐたが、遂にその姿に接し得ないので、チビ公は、狂はしげに、飛行場の周囲を駆けめぐつてゐた姿に、勇士達の顔にもさすがに涙が光つた、然しその日は、それでもどうやら戦友達の腕に抱かれて宿舎に歸つたが、以來今日に至るまで、毎日の如く着陸する機から、主人の姿を求めやうとしてゐる様子が、餘りにもいぢらしく、亡き主人の手で首につけられた上等兵の肩章は、チビ公自ら噛みよこしてゐるので、勇士達は近々新しい肩章をつくつてやらうと話してゐるが、市川少尉の戦死が悲壯な自爆であつてみれば、その遺骸も收容出来ないだけに、チビ公こそ、市川少尉の形身だと勇士達は一層の愛撫を與へてゐる。といふのであつた。

かくて、市川少尉の出身校、朝鮮忠清北道忠州本町公立尋常高等小學校で、慰靈祭が行はれた、その時同校々長、同窓會長、本田豊喜氏は、哀情切々として次の弔辭を朗々と讀んだ、參列の大聲もなく、時々すゝり泣く様な聲さへ漏れて來た。  
形 辭

故陸軍航空兵少尉市川英二郎君の靈に告ぐ。  
君は一昨昭和十二年七月、支那事變勃發するや、直ちに〇〇部隊に屬し、〇〇隊の幹部として、緒戦たる南苑、天津の戦を初陣に、保定、黄河の戦闘に活躍し、中支に轉戦して、漢口作戦に奮戦、更に重慶敵首都たるや、反覆之が爆撃に當り、本年一月十七日附、君の第四回重慶空襲の手記は、讀む者感奮、興起手に汗を握り、誰れか今日の事あるを豫期せりや。

君が戦地に赴くや、常に卓抜なる技術は、〇〇戦隊長機を操縦して、編隊の先頭に飛び、敵戦闘機の攻撃目標として、最も危険なる任務なるも、豪毅沈着なる君は克く、忠肝義膽、一死國に報ゆる堅確なる覺悟を以て、その重任を果し、我が陸空軍の精華として、上下の尊信を一身に集め、數多殊勳を樹てしに、二月二十日、赤都蘭州、第二回大空襲に、不幸敵弾、君の愛機の中樞部に命中し、今はこれ迄なりと敵陣深く自爆を執行せり、壯烈全く言語に絶する所なり。

戦に臨みて、生還を期せざるは男子の本懐なるも、君は悲しくも、男々しく、さながら櫻の嵐に散るが如き、死所を得、遺訓、戦史に輝くは、一死の榮、極るものと云ふべし。

今や、事變の前途益々重大性を加ふ秋、若冠二十有九歳を一期として、凛然國に殉じたる痛惜何ぞ堪へん、君大正七年四月、忠州公立尋常高等小學校に入學するや、學業、操行優秀、資性豪邁、沈着にして他の模範たり。

大正十五年三月、當校高等科を卒業するや、青年訓練所に入所し、他日皇軍の華たるべき素地の培養に努め、一般生徒の模範たりき、家庭に於ては兄弟和睦、父母への孝養間然する所なし。

中支航空基地にありて、日頃愛育せし犬が、永久に歸らざる主を探し求めし、君の愛犬物語りは、涙なくして聞く能はず、以て君のこまやかなる情操を知るべし。

君戦地に赴くや、常に母校を偲び、激烈なる戦闘の餘暇に、詳密なる戦況を報ずると共に、銃後、後進の董化指導に努められたるや切なり、本校卒業生最初の戦死者たる君、復起たすと雖も君の名譽や、千載に芳しく、一世を激勵し、同窓後進を暗黙裡に教導す、茲に君の葬儀に當り、同窓六百餘名に代り、謹みて弔す。

希はくば英魂髮髯として、來り覆げよ。

五月八日 忠州本町公立尋常高等小學校、同窓會長 本田 豊 喜

市川英二郎陸軍航空兵少尉は、本籍靜岡縣駿東郡泉村稻荷一六五ノ二出身。

大正十五年三月、朝鮮忠州公立尋常高等小學校高等科卒業。

昭和五年十二月、現役志願、歩兵第七十九聯隊入營。

昭和六年九月より滿洲軍總動務從事、昭和七年六月〇〇出動、滿洲各地轉戦赫々たる戦功を樹つ

昭和八年九月、第四十七期操縦學生候補者として所澤陸軍飛行學校入校、翌九年四月同校卒業。

昭和八年十二月、任歩兵軍曹、昭和九年五月、任航空兵軍曹、第〇聯隊附。

昭和九年五月、第二回操縦學生として、濱松陸軍飛行學校入校、同年六月修學卒業。

昭和九年十二月、任陸軍航空兵曹長、昭和十三年三月、任航空兵准尉。

昭和十二年七月十五日、〇〇出動、〇〇部隊配屬、爾來北支に或は中支に轉戦赫々たる武功を樹てた。

昭和十四年二月二十日、蘭州攻撃に際し、不幸敵弾を受け、壯烈なる戦死を遂げた。

昭和十四年二月二十日附、任陸軍航空兵少尉。

遺族現任〇、靜岡縣磐田郡富岡村坂西、山田幾平方、夫人市川つやさん。

〔寫眞説明〕一九三頁故市川英二郎陸軍航空兵少尉、一九四頁〇〇基地の野戦食堂、一九六頁愛犬チビ公と遊ぶ市川少尉。

### 愛機に自己の名の「鶴」を描きて奮戦

—俊敏隼、鬼の異名を轟す鶴田靜三少尉—

愛機に自分の名前の「鶴」を描いて、俊敏隼の如く「鬼」の異名を轟かせたのは、我が鶴田靜三少尉である。

鶴田少佐の奮戦の跡は、實にその異名の如く、赫々たるものがある。

今その轉戦の跡を二、三拾つてみることにしよう。

昭和十二年十二月十日報せられた『鬼をもひしく、南京空中戦の勇士』と題する記事の一節である。

〇〇基地發、わが野中、阿部兩部隊の空の精銳は連日に亘つて、南京から蕪湖を連ねる一帯の空爆を敢行、敵に徹底的打撃を與へつゝあるが、十月二日、三日の兩日兩部隊の勇士は、はしなくも南京上空で敵の一大戦闘機群と會戦

こゝに敵機九機を撃墜せる一大空中戦闘が行はれたのであった。

十二月二日午後二時十五分〇〇基地を離陸せる鶴田中尉（當時）吉瀬曹長（當時）の二機は、南京上空に差かゝるや、敵飛行場に爆撃機十二機、戦闘機十五機が、翼を列ねて待機してゐるのを發見したので『よき鴨御座んなれ』とばかり、機首を下げると見るや、見る／＼裡に急降下連続三回、機關銃弾の雨を注いだ、この時敵戦闘機四機は、勇敢にも上空へ舞ひ上つて來たので、我が勇士と一戦を交へるかと思ふと、くるりと尻を向けて、雲を霞と逃げてしまつた。

我が勇士も、これには開いた口が閉がらなかつた、その後續いて大型爆撃機二機が、あはて、逃走せんとしたが、何條これを逃すべき、鶴田中尉が、まづ先頭の敵爆撃機を襲ふと見るや、吉瀬曹長も二番機に飛びかゝり、機關銃弾を浴せて瞬／＼間に二機を撃墜、敵機は黒煙を曳いて南京市街の真只中に墜落して行つた。

この思ひがけぬ獲物に歡聲をあげた阿部部隊では『それッ』とばかり、翌三日午前十一時半、爆撃掩護の任務で南京へ勇躍出動、高月大尉、遠部少尉、佐野曹長、金丸軍曹、粉川軍曹の五勇士であるが、この五勇士は眞一文字に、敵編隊群中に突込んで大手柄を樹てたが、その活躍の状況は他日に譲る。

かく、中支戦線に於て、我が陸軍航空軍の名戦闘勇士として、敵を畏怖させて鶴田靜三少尉、吉瀬桂曹長





の兩勇士は、惜しくも昭和十三年六月二十六日の南昌空襲で散った。九倍の敵と凡巴の激闘、鄱陽湖上の大空中戦、陸、海、空、陸軍相前後して南昌奇襲、等々新聞は當時この戦果の多大なるを報ずると共に、又この兩勇士を喪つた悲報を國民に傳へてゐる。

南昌は抗日の根據地である、蔣政権は當時こゝに追ひつめられた空軍の根據地を置いてあつた。我が陸の荒鷲、海の荒鷲の好餌となつて、壯烈果敢な空中戦闘は幾度か繰り返された、この日、昭和十三年六月二十六日にも陸、海軍機は前後して、南昌奇襲を行つたのである、然して陸の荒鷲、我が鶴田少佐以下部下三機は、僅か四機を以つて敵四十數機と決戦、實に十數機を撃墜した未曾有の一對十の凱歌をあげたのである。

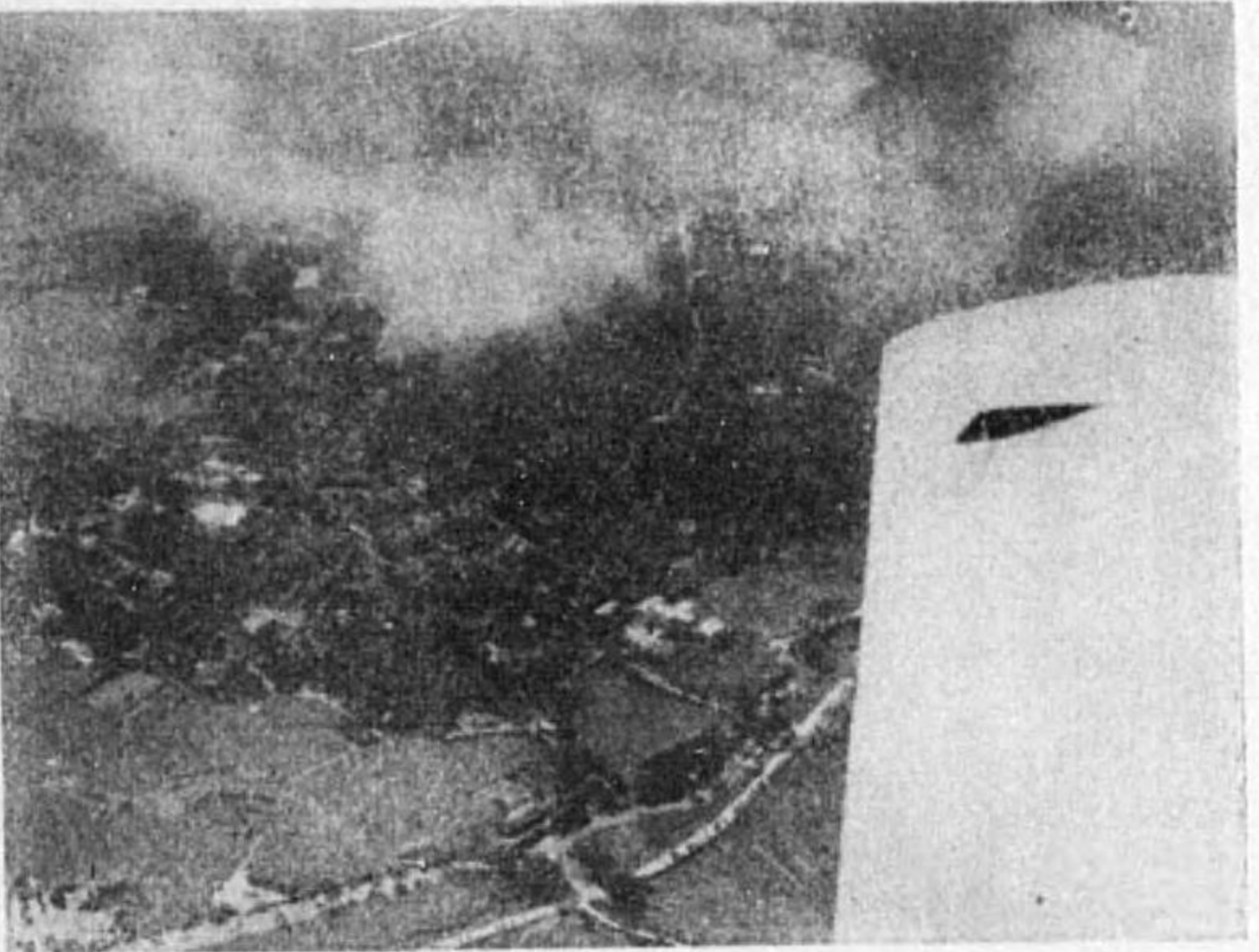
當時の報道をそのまゝみれば「六月二十六日午前十時、陸軍航空部隊鶴田静三大尉(當時)吉瀬桂曹長(別項記載)遠部登久雄曹長(廣島縣出身)佐野清徳曹長(福岡縣)搭乘の四機は、敵空軍根據地南昌を奇襲、同地飛行場に待機中の敵機に對し攻撃を敢行した。

その際飛行場にあつたソ聯製イ十五、イ十六型機四十機は、我を小勢と侮つて猛然大舉反撃し來り、此處に一對十といふ世界空中戦史上、未曾有の壯絶凄絶の大空中戦が展開された。

我が四機は之に對して、層雲を巧みに利して群がる敵機を銃弾の餌食とし、或は體當りをもつて奮戦敵十數機を紅蓮の焰と化せしめて、完全に地上に叩きつけた、尙佐野機はガンリン・タンク其他に敵弾二十數發を受けたが奇蹟的に〇〇基地に歸還した。

更に又海の荒鷲は正午過ぎに奇襲して壯烈密雲中の大空中戦を行ひ十九機を撃墜した。あゝ然し、この大空中戦に於て、惜しくも鶴田少佐、吉瀬准尉の兩勇士は戦死したのである。この壯絶無比の大空中戦の様相については遠部中尉が「十對一の決死闘に不歸の僚機を思ふ」と手記し同じ日、同じ所で散華した別項吉瀬桂准尉の記事中に挿入した通りである。

昭和十三年七月五日戦線の部隊長、安部勇雄航空兵大尉から、鶴田静三少佐の殿父耕治氏の許へ、少佐



戦死の報につき次の如き信りをよせた。

昭和十三年六月二十六日朝來斷雲片々として微風爽かに晴天なり。鶴田大尉は〇〇戦闘機の編隊長として、揚子江上空警戒のため飛行基地を午前十時十分頃出發安慶方向に向ふ。

第〇編隊長鶴田大尉、僚機佐野曹長、第〇編隊長遠部中尉、僚機吉野曹長何れも錚々たる驅逐操縦者にして、過ぐる江南の戦線及徐州會戦に披群の功績を樹てたる猛鷲にして、安部部隊自慢の空中戦士なり。エンデンの快調を大陸の空に響けつゝ、悠々たる長江の流れを俯瞰して、快翔約〇〇分間早くも〇〇要地上空に達す。該地上空を制すること約二十分、遙かに其西南方に敵の大型機一編隊の機影を認め、瞬間編隊長鶴田大尉は猛然この敵に向ひ攻撃前進を開始せり、續く佐野、遠部、吉瀬の勇士何條躊躇すべき、敵も其の機影を認めしか、其快速を利して遁走せんとし茲に爽快なる追撃戦となれり、羅針盤は南々西を指せり。

敵機の隠れ家は南昌か? 苟にも空中に發見せし敵機は「悉く之を撃墜せざれば止まず」とは驅逐操縦者の信念なり。

エンデンも毀れよと許り唸りをあげ、彼我の距離は刻々に短縮す。敵の飛行根據地南昌も既に招呼の間に迫りたる頃、ふと前方下方斷雲の切れ間に遊弋中の敵戦闘機一群を見る、二十數機なり。勇猛鶴田編隊長の四機は敢然此の敵を強襲、忽ちにして壯烈なる空中戦を展開す。俯瞰すれば飛行場に待機中の敵戦闘機引き續き離陸上昇し來り群り挑戦す、敵機總數四十餘機之に對する我は勇猛巧致鬼神の如しと雖も僅かに四機なり、一機、二機、三機と紅蓮の焰に包まれて落ち行く敵機を見る、されど多勢に無勢何時しか我が友機も互に連撃を絶たれ、機影を見失ひて空中戦闘約二十五分間辛くも敵の重圍を切り抜けて無事飛行基地に歸還せるもの遠部中尉の一機なり。

佐野曹長は機體及燃料タンクに二十數發の敵弾を受け、燃料の洩出甚だしけれども友軍戦線内飛行場に歸還し得たり人無事。嗚呼、されど! されど! 鶴田、吉瀬の兩機は! 二時間待てど機影を見せず、五時間待てど還らず夜に入れど消息なし。

苦悶焦慮の數日間、空地を擧げて搜索せるも杳として得る所なし。唯僅かに中國新聞に兩勇士の最後を報ぜると、第三國新聞及日本新聞に「空の鬼神鶴田編隊長」の大捷を報じあるを認むるのみ、敵機撃墜數確認せるもの九機、遠部中尉三機、佐野曹長一機、鶴田大尉三機、吉瀬曹長二機(遠部中尉確認)

新聞の報ずる所によれば撃墜總數十數機とあり、鶴田、吉瀬兩勇士共少くも四、五機は撃墜せるを確信す。鶴田、吉瀬兩勇士共に資性極めて温厚、熱心忠實にして、諸人の愛敬を集め一度空中に愛機を馳りては

華の如く強豪機敏典型的空中戦士なり。  
東洋平和の聖戦に尊き人柱護國の鬼と化せる「空の鬼神」鶴田少佐、吉瀬准尉の英靈に對し、萬腔の敬意と感謝の意を表す。

鶴田少佐は、性極めて温厚、熱心、忠實で、部下を愛してゐたので非常に親しまれてゐた、それで、ひと度空中に愛機を馳つては、前述の如く集の如く、強豪、機敏、典型的な空中戦闘勇士であつたかくて、支那事變第十四回論功行賞にあつて功四級、旭五等の金功勳章を授賜され、然もその身は、武人最高の「殊勳甲」として發表され、勇士の靈も聖恩の有難さに感泣した事であらう。  
その遺族は嚴父鶴田耕治氏、母堂いちさん、令妹律子さん、さちよさんである、この殊勳甲發表の日、嚴父耕治氏は感激して「軍人として御國の爲に戦死して呉れ家名の譽れと思つて居りましたのに、更に此の度功四級旭五等の金功勳章を戴き、然も殊勳甲となつた事は、只々皇恩の有難さに感激の外はありませぬ、息子の静三もこの餘榮に地下でよろこんでゐると思ひます」

鶴田静三陸軍航空兵少佐は明治四十四年八月十八日に福岡縣山門郡沖端村大字筑紫三六六番地に生る。

- 大正七年四月、福岡縣山門郡矢留尋常高等小學校に入校。
- 大正十三年四月、福岡縣中學傳習館に入學。
- 昭和四年四月陸軍士官學校豫科に入校。
- 昭和八年十月、任陸軍歩兵少尉補歩兵第〇〇〇聯隊附。
- 昭和九年四月、爆撃學生として濱松陸軍飛行學校に入校。
- 昭和九年七月、任陸軍航空兵少尉補飛行第〇〇聯隊附。
- 昭和九年十一月、操縦學生として所澤陸軍飛行學校に入校。
- 昭和十年九月、乙種學生として明野陸軍飛行學校に入校。
- 昭和十年十月、任陸軍航空兵中尉。
- 昭和十三年三月、任陸軍航空兵大尉。
- 昭和十三年六月二十六日、中華民國江西省南昌にて戦死。
- 同日附任陸軍航空兵少佐、賜功四級金功勳章並勳五等双光旭日章。

〔寫眞説明〕一九九頁故鶴田静三少佐、二〇〇頁陸鷲の〇〇爆撃。

### 陸鷲の偉才四機對四十機の壯絶空中戦

—二度上空に敵重爆機を撃墜吉瀬桂准尉—



我が吉瀬桂陸軍航空兵准尉は「空の鬼神鶴田編隊」でその人ありと知られた猛鷲である。  
鶴田静三陸軍航空兵少佐（別項記載）と共にあつて、その勇名を轟かせたものである。  
かくて、支那事變第十四回論功行賞に際して、鶴田少佐と共に「孤軍奮闘して大空に散る」とて、功五級、旭七等を賜ひ、「殊勳甲」に列した、その勳功には、「上海、南京、杭州、蚌埠などに於いて、常に敵機を撃墜し、戦闘隊の威力を大いに發揮したが、南昌東北上空に於て、僅か四機をもつて、敵機二十數機と壯烈なる空中戦を展開し、奮戦激闘、各敵の數機を撃墜したが、自らも敵弾を受け遂に壯烈なる戦死を遂げたといふのである、惜しい猛鷲を喪つたが、その殊勳は千古不滅である、今ここに、故吉瀬准尉奮闘のあとを知らう、大は昭和十二年十二月四日に報せられた事である。

我が野中、阿部兩部隊の空の精銳は、連日に亘つて、南京から、蕪湖を連ねる一帯の空爆を敢行し、敵に徹底的打撃を與へつゝあるが、二日、三日の兩日阿部部隊の勇士は、はしなくも南京上空で、敵の一大戦闘機群と會戦、こゝに敵機九機を撃墜せる一大空中戦闘が展開されたのであつた。

二日午後二時十五分〇〇基地を離陸せる、鶴田中尉、吉瀬曹長（當時）操縦の二機は、南京上空に差しかかるや、飛行場に敵爆撃機十二機、戦闘機十五機が、翼を列ねて待機してゐるのを発見したので、よき御座んなれ、とばかりに機首を下げると見るや、見る／＼裡に急降下連続三回、機関銃の雨を注いだ。此の時敵の戦闘機四機は、上空に舞ひ上つたが雲を霞と逃げてしまつた、その後には於て大型爆撃機二機が逃走せんとしたが、何條これを逃がすべき、鶴田中尉がまづ先頭の敵爆撃機を襲ふとみるや吉瀬曹長も、二番機に飛びかかり、機関銃弾を浴せて瞬く間に二機を撃墜、敵機は黒煙を曳いて、南京市街の真只中に射落されたのである、この思ひがけぬ獲物に、敵聲をあげた阿部部隊では「それッ」とばかり翌三日午前十一時半、爆撃掩護の任務で南京へ勇躍出動、高月大尉、遠部少尉、佐野曹長、金丸軍曹、粉川軍曹の勇士の面々、腕を撫して南京上空に向つた、やがて南京だ。  
その時だ大空を覆ふやうにして、真正面から飛來する敵機の編隊群に遭遇した。

實に十七機からなる敵の戦闘機群である、低翼單葉、空冷式發動機を裝置し、脚は引込みといふ、支那が狂奔して購入した新鋭機である、敵にとつて不足はない、と嬉んだのは五勇士である、眞一文字に敵の編隊群中に突込み、入亂れての大空中戦となつた。

一対三、我れ一に對して敵は三機だ、敵は多數を待んで、かゝつて来たが、高月大尉が物の見事に、まづ一機を射止めた、續いて遠部少尉も難なく敵一機を撃墜、佐野機には敵も勇敢に眞正面から挑んで来る『ようし』、事面倒と、佐野曹長は正而衝突を覺悟して、眞一文字に全速度で突き込み射撃をすれば、狙ひ違はず一弾又一弾命中、機關部に當つたのか、火を吐いて落ちて行く(後略)といふ譯で、この壯烈無比の大空中戦は、我が空軍の威力を十二分に發揮する事が出来たので、部隊は萬歳を叫んだ。

續いて、これは昭和十三年三月十六日の事である。我が陸の荒鷲部隊では、故眞鍋大尉の弔合戦の機會を覗つて、安部大尉以下の將兵は、江南の空は勿論、遠く南昌にまで、翼をのばして敵機を求めて来た、俄然復讐の時来た。

十六日午後一時過ぎ、杭州の空に翼を現はした敵の重爆五機は、超高度を保つて空襲と挑戦して来るのを、逸早くも発見した吉瀬曹長は、安部大尉、粉川軍曹と共に、肉薄又肉薄、必死となつて逃ぐるを、勇敢なる吉瀬曹長は、遮二無二追ひまくり、敵は編隊を亂して逃げる、それを四百、三百に追ひつめ眼鏡一杯に敵機を入れて打ちまくり、機關銃の掃射を浴せたので、火を吐いた敵二機は轉落ではないか、墜落する一機よりパラシュートで逃げる敵操縦士に殘彈を送つて悠々歸還したが、我れには損害なく、新鋭の敵重爆二機、然も敵編隊長機を撃墜した吉瀬曹長は、曩に南京上空に於て、三倍の敵と交戦中一機を撃墜して鶴田大尉と引揚げた陸の荒鷲の偉才である、當時の狀況を吉瀬曹長は次の如く手記した。

〇〇編隊の二番機として自分は、十六日午後一時離陸、春陽の空は果しく晴れ、うすら寒く、はく息が白くみえる、一時四十分〇〇街の上空より、半山に向け警戒中、突如編隊長より敵機発見の記號、その瞬間、友軍の高射砲彈炸裂、煙はゴゴゴと左前方に浮びあがつた。

左前方を見れば、輸入早々のピカ／＼光つた大型爆撃機三機、二機の編隊で西南方に向つて、快速を利用して逃走せんとしてゐる、空中であつたからには一機たりとも逃がすものか、空爆の復讐はこの時とばかり、直ちに敵機に、機首を向け追尾すれば、それと氣付いた敵は一機、二機、三機に解散、最大速度で逃げる、目ざすは敵の編隊長機だ『愛機頼んだぞ、走れ、走れ』見る／＼うちに速度計は上つて行く、然も敵も速い、まだ一千米はある、まだ射撃は早い『富士號、今少しだ、頑張れ、頑張れ』五百米、四百米、敵機は遂次大きくなって、眼鏡一杯になつた『ようし、撃つぞ』二連射、三連射、撃ち續けるうちに、左銃がピンと停つた、故障だ、然し繕う時間がない、右銃で行け、續いてバリ／＼猛射する、突然敵の右發動機の部分からポツと白煙があがつた、續いて濃々と黒煙と共に火を吐き出した『やつたぞ』と思つた瞬間、

この間に敵機との距離が三百米位に近まつた、また撃つのは早い、二百五十米となつた『さア、右銃でいけるだけいけ』ダダダ、まだあると思つた瞬間、びつたりと音は停つてしまつたのだ。もう右銃には弾がないのだ、といつてそのまゝ逃がす事は絶対に出来ないのだ、最後にとるべき手段は空中體當りだ、敵機は二百米前方を我れと同高度で逃げてゐる『ようし』と、もう一回だと銅錘をうつた突端、有難や、がたんと、いふ音と共に、〇〇〇が落ちた、ダダダ、出る／＼もうこうなれば體當りもいらぬ、射撃は今、背後から無修正で容易だ、ダダダ、と、そのうちに突然機體が、若干右に傾いたかと思ふと、急に敵機の速度は落ちて来たのだ。

見る／＼うちに傾きが大きくなる『やつたな』と思つたが、また火を吐かない、續いて左翼の取つけ元附近から、前機と同じやうに黒煙を吐き出した、かと思ふと忽ち左翼半分は火の玉となり、

野に落ちて焔々と火を吐いてゐる、この時(午後二時)高度〇〇〇米、一周して歸途についた。凡そ五分間位飛んだ頃下をみると、白いものが一つもや／＼した上に浮いてゐる。先刻の落下傘の奴だ、近寄つてみると、負傷してゐるのが見えたから、武士の情で見逃してやつて、その儘引揚げた、分隊長と、粉川軍曹は同じく敵機を追撃した、敵機が雲の間に逃げ込んでしまつた。再び三機編隊となつて、基地に歸還、心配した敵の爆撃が何の効果もないのに安心した。



越へて昭和十三年四月三十日、又もや敵重爆撃機三機を追ひつめて撃墜の殊勳を樹てた。

この日午後二時二十五分エス。ペー型敵重爆撃機三機が北方より、我が蚌埠に襲撃し來り、三千米の高  
空から爆撃機を投下、我が方は輕微な損害に過ぎなかつた、折から〇〇方面より飛翔し來り、正に着陸  
せんとした我が武田部隊の栗生准尉、吉瀬曹長、粉川軍曹、永田軍曹等の〇〇機四機は僚機と共に「すわ  
敵機御座んなれ」とばかりに勇躍出動して、敵を猛追し、僅かに七分にして、鳳臺東方上空で追詰め猛然  
敵に食ひ下り、我が機との間に、初夏の碧空に亂れて、壯烈なる空中戦を展開、遂に敵二機は城西湖に白  
煙を吐いて墜落、今一機は鳳臺東側地區に墜落され、二名のソ聯人らしき搭乗者や黒煙に包まれて機から  
落下傘で飛出した一人を壽縣東方一軒の地區上空にて射落し、他の一人は落下したところを追詰めて機上  
から機銃掃射によつて射殺した、かくて、この珍らしい獲物を完全に射止めた荒鷲は、およそ三十分にし  
て、再び〇〇基地に素晴らしい武勳を、銀翼に輝かして悠々全機歸還したのであった。

四勇士は〇〇基地に於て、全軍歡聲のうちに、我が陸鷲の萬歳を叫んだのだつた。

次は〇〇隊遠部登久雄陸軍航空兵中尉の手記で「壯絶、南昌上空、四機對四十機の空中戦、撃墜機數九  
機、鶴田、吉瀬機未だ還らず」と題する一文である。

讀むものをしてその壯烈無比、又我が陸の荒鷲の如何に勇猛果敢であるかを知り、思はず快哉を叫ぶが  
惜しやこの戦ひに我が陸鷲の偉才勇士を喪つたのである。

安慶攻路戦の中期より中支全土を蔽ひ、我等航空部隊の活動を惱ませる執拗な梅雨も六月二十五日未明  
には南京以西揚子江流域地方一般に晴れ渡り一片の斷雲なき快晴となれり。

此の日、敵爆撃機數機は揚子江を東上し、小濱にも安慶及び蕪湖附近に飛來し飛行場外に雅戯に類する  
盲爆を行ひ倉皇として忽ち何れかへ遁走せり。

殊に蕪湖飛行場に對する爆撃の如きは飛行場を隔てる數軒の畑中に猛投下を行ひ、折から耕農中の善良  
なる自國民衆に對し、徒らに恐怖の念を生起せしめたるに過ぎず。

飛行場に於て作業中の皇軍兵士は此の状態を目撃し拍手を送りて敵の狼狽振りと技倆の拙劣さを蔑視せ  
り。

明くれば翌二十六日、梅雨の陽光は燦々と照り映へ高層に卷附雲の銀糸を展げたるが如き數條は紺碧  
の空に調和して快き飛行日和なり。

我が地上兵團は海軍江上艦隊と協同進撃を密ならしめ、揚子江を遡江し、武昌、漢口へと進撃に次ぐに  
進撃を敢行せり。

江の上空は陸の軍、海の荒鷲の制壓に依り制空權は完全に我が確保把握する所となり一機たりと雖も、  
敵機の侵入を許さず。

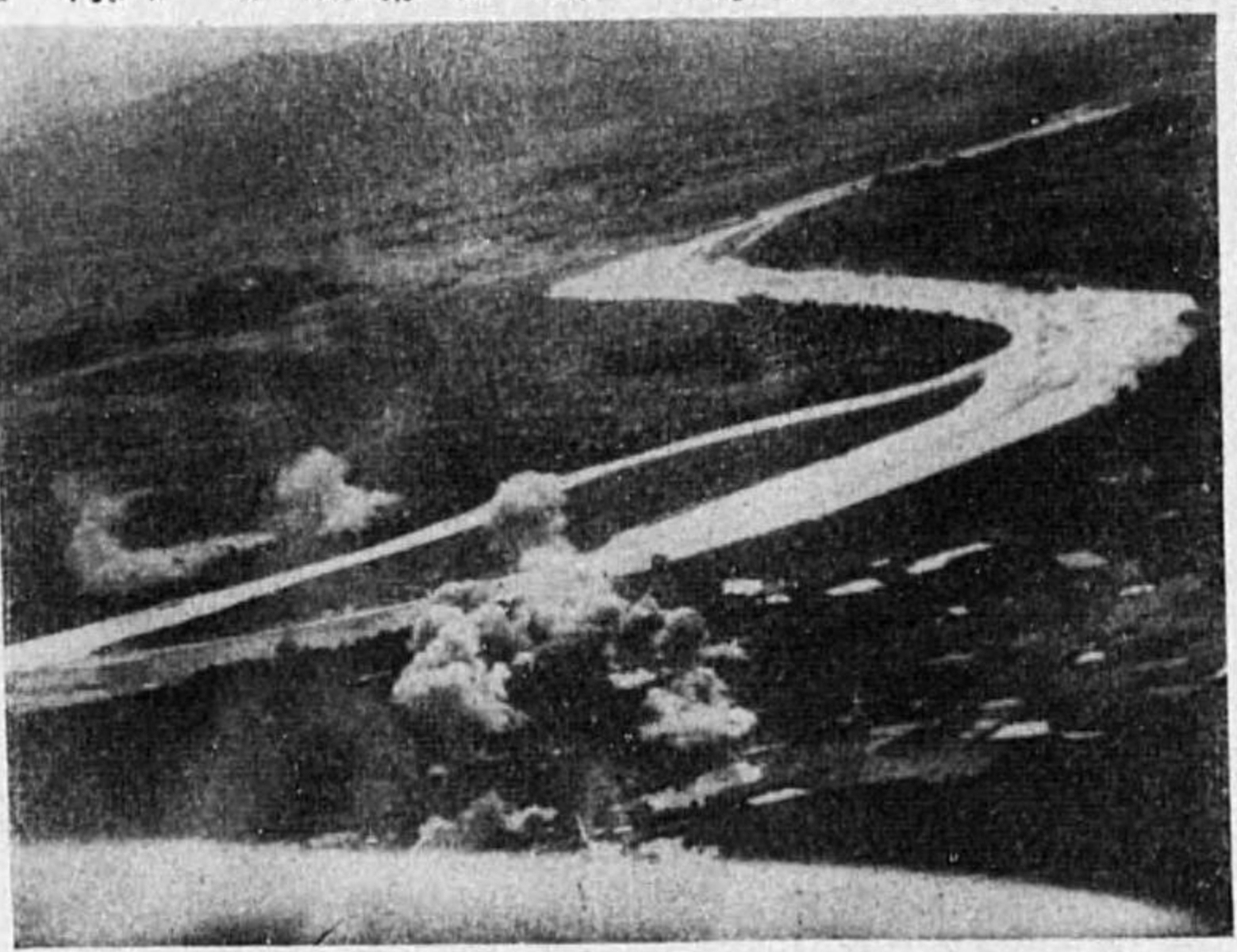
午前十時頃〇〇基地に於て出動準備を了へ腕を撫して待機中の鶴田編隊の四機は安慶西南方四軒香口附  
近を進撃中の波田支隊上空に於て該部隊の掩護を爲すべく、勇躍砂塵を蹴つて離陸一路目的地に向ひ進攻  
せり。

第一編隊鶴田大尉、佐野曹長、第二編隊遠部中尉、吉瀬曹長の編成なり、該地附近上空四五百米以上  
は純白の密雲に閉され、二千米附近に點々と綿を丸めたるが如き斷雲浮動せり、編隊は二千五百米の高度  
を保持して雲層の中間を行動し、銳意敵機に對する索敵に任じ、遊翼警戒に勉めたり。

俯瞰すれば眼下の部落數ヶ所に敵自ら放火せる火災は凄慘を極め敵は既に後退の微明かなり。

支隊は此の敵を破壊すべく、數帯の陣地を撃破進撃中の如し、此の時遙か西南方の雲下に點々と斑點の  
如き數機の敵爆撃機編隊(?)を目撃せり。

勇猛果敢な編隊長鶴田大尉は何條以て黙すべき好餌來れと勇み立ち直ちに此の敵を追尾撃撃すべく發  
動機の間轉を増加し速度  
を加へ、敵機の進路を扼  
する如く之に迫るとす  
追はれる事に於ては敵  
も強る者、我が編隊の追  
尾すると知るや南昌方向  
に對し全速度の遁走を始  
め雲間に姿を没したり、  
此の敵を追尾すること約  
三十分、既に我等は遙か  
西南方に南昌の市街を俯  
瞰し雲の切間より南昌飛  
行場を望みたり、雲下は  
一面に霧の立籠めたるが  
如く模糊として飛行場内  
の状態は明瞭を缺きた。



雲下の空域は暗濛たる  
灰色を呈し恰ら薄暮の如  
く朦朧たり、期せずして  
不氣味な感に打たれたり  
鄱陽湖に注ぐ數條の細  
流は黃濁の水が氾濫し明  
瞭と眼に映れり、此時脚  
下の空層に蠢く異様なも  
のを目撃せり。

之正しく敵戦闘機ヲ聯製「イ十五型」及「イ十六型」なり我等の來襲を知りて既に離陸しありしか或は  
急遽上昇せるかは不明なれども我が編隊に肉迫する態勢を整へ其の三十を下らざるが如く物凄き大編隊  
群なり。

「鳥合の衆何かはある」

此の敵を撃滅すべく我四機編隊は敢然斷雲を截斷し雲下に躍り出で敵大編隊群の直上附近に近迫し編隊  
群長は翼を急激に左右に振り攻撃開始の命令を下し、自ら真先に最高位を上升し來れる敵編隊長と覺しき  
「イ十五」の後上方に迫り一舉に之を追跡し猛烈なる連射を浴びせたり、白煙を曳く焼夷彈の曳煙は見事  
敵機に集中するを自分は群長の稍上空に在りて緊張裡に凝視し居りたり、と突如敵機は黒煙の尾を曳き忽

も真紅の炎を吐き乍ら直下の河流の真只中に轟然飛沫を上げて墜落せり。嗚呼何たる壯絶！ 壯快！

無惨、河中に粉碎せる敵機は黒煙を漂はせ水面廣く燃え擴がれり。

鶴田機は鬼神の如く速かに體を變じ直ちに第二機目の敵に肉迫せり。

佐野機は編隊長の稍上方に在りて「イ十五型」機に追躡せんとして懸命なり。

遠部、吉瀬の兩機は佐野機の後上方に在り上空警戒に任じありたるも側方より鶴田編隊の上空に迫らんとする「イ十五型機」數機ありたるを以て直ちに戦闘加入、自分は先づ最上方を囁くが如く上昇し來れる

「イ十五型機」の後方より直ちに追躡の位置に入り一連射して之を一氣に屠りたり、敵は緩徐して旋轉の後雜揉となり轉落を始め直下の畑中に突入せり。

吉瀬機は同じく「イ十五型」に追尾し之を撃墜せしかの如く見へたり。

此の時既に全般の態勢は我に不利なるに至りたり即ち二千米附近に浮動せし斷雲は漸次濃度を増し密雲に變じ四千米附近の密雲は逐次垂れ下り下方のものと同じ二千米以上は完全なる密雲と變化し加ふるに密雲の下層には點々と斷雲の浮遊するを見るに至りたり、戦闘間屢々之を有利に利用せしことありしも友機間の連絡は頗る困難を極める状態に至れり。

戦闘開始後約十分の間は辛ふじて我四機の連絡は保持し得たるも逐次増加する敵機の數と、我が上方に高度を獲得せる優勢なる敵機の爲め戦闘圏は次第に廣大となり加ふるに強烈なる西北風の影響を受け友機の連絡は甚しく困難となり、遂に各個戦闘を行ふの止むなき状態に陥りたり。

友機四機が連絡を保持しつゝ、戦闘を實施せる間自分の目撃せし撃墜機數及戦闘狀況を記憶を辿り記述せば左の如し。

鶴田機は先づ備戰に於て敵の「イ十五型機」を一氣に屠り續いて他一機「イ十六型」に追躡し之を撃墜せしものゝ如し。

此の時期に於ける鶴田機の戦闘高度は千五百米以下にして其の上方には「イ十五型」の數機蟄集せるあり、鶴田機が第三機目の敵と交戦せる際遂に自分との連絡を失ふに至りたり。

佐野機は鶴田機の稍上方に在りて「イ十五型」と交戦し之を攻撃中なるを認む

吉瀬機は自分が編隊を解散すると同時に略同高度に於て同じく「イ十五型」を攻撃し之を撃墜、第二機目に突進せしものゝ如し、此の時機迄は全機健在なるを確せり。

自分は第一撃に於て「イ十五型」を撃墜し第二機目は同じく「イ十五型」に對し數回射撃を反復したる後之を燃焼せしめたり。

第二機目に對し攻撃中、敵の「イ十五型」數機は我上方に迫り主として後方、時として前方より勇敢に突進を敢行し來れり、第二機目を撃墜後上方に對する警戒を主とする爲め回避反撃、回避反撃と連續戦闘せしも徹底せる追躡を行ふを得ざりし爲、逐次高度の獲得に専念し斷念の利用に勉めたり。

敵は我機數小なるを侮り下方に「イ十六」を配し雲の下際に「イ十五」を待機せしめ「イ十六」を攻撃せんとせば「イ十六」は速度を利用して戦闘を回避し此の機に乗せんと待機せる「イ十五」が猛烈に突進し來れり、左顧右眄すると友機の姿を見る能はず青黒く全身を陰影せる無氣味な熊蜂の如き「イ十五」と蛇の如き「イ十六」の虎視眈々たる姿を見るのみ。

嗚呼！ 僚機吉瀬機は如何にせしや。

心のみ焦燥すれど今はとるべき術もなし瞬時たりとも後方に前方に警戒を忽せにする能はず、時として前方より猛烈に肉弾戦を挑み來る「イ十六」あり、支那人操縦者とは思はれず、敵は我方に機首を向くるや自ら射ちに亂射するならん「タタタタ……」と

機銃の音は耳に木霊し身は自づと引緊るを覺えたり、若年若ら吉瀬曹長は過る南京攻略戦に於て鶴田大尉と共に二機能く敵の十字火を潜り、南京城外飛行場に待機せる大型爆撃機に機銃の雨を浴せ遂に離陸遁走せんとするの止むなきに至らしめ上昇せんとするや直ちに肉迫し鶴田大尉と共に火を吐かしめ大地に叩きつけたり。

又後日〇〇飛行場に來襲せる敵大型爆撃機二機を捕捉し單機能く二機を撃墜せる猛者なり。

「敵機我に數倍すると雖ども何ぞ恐れん」

然れ共一對十の奮戦なり、加ふるに二千米以上は密雲にして下際に「イ十五」の待機せるありて狀況全く我に不利なり。

「希くは既に戦闘を離脱し歸還しあれよ」

「鶴田大尉は如何にせしや」

第三機目を追尾し高度を低下せし儘連絡を失ひたり其の周圍に蟄集せる「イ十五」の影のみ眼前に髣髴として氣掛なり。

鶴田大尉は中隊の至寶「パイロット」なり、上陸以來常に編隊長として第一線に立ち射撃戦闘は衆を抜き部下渴仰の的なりたり。

制空、掩護等至難なる任務に遺憾なく其の技術を發揮し南京攻略戦に於ては吉瀬曹長を僚機に連れ高射高角砲弾を回避し乍ら南京大校飛行場百米の低空飛行を敢行し敵をして心膽を寒からしめたる後上昇せるSB爆撃機を一撃にして撃墜せる闘志極めて旺盛なる中隊切つての「名パイロット」なれり。

「編隊長鶴田大尉は何處に在りや」



四面敵にして友機を見ず、戦闘を離脱せしや？ 否や？

「嗚呼我は如何せん」離脱、繼續の二途あるのみ。次第に弾丸、燃料に不足を覺えたり、戦闘を離脱せんとせば敵機の執拗に追尾し來るありて意の如くならず、遂次上昇し密雲中に退避し計器飛行にて進路を北方にとりたり、戦闘の爲稍狼狽せると雖計盤針路北方に近き爲め機の安定を失ひ再び雲下に降下したり、此の時雲の下際にありたる「イ十六」は巧みに我の後方に迫りたり「イ十六」は過る南京空中戦に於て試験済の好敵手なり。

「轟ッ」と之を反撃旋回戦闘に導き追蹶に入り數連射を送りたるに、脆くも黒煙を曳き落下せるも地面に突入するを目認する能はざりき、脚下四周數十の敵なり。茲に於て遂に戦闘を断念し再び雲中に入り慎重なる計器飛行にて戦闘を離脱し九江附近より雲下を一路基地に歸還せり。

本戦闘に於ける交戦時間二十五分にして全飛行時間四十分を要したり。單機基地に歸還せるに鶴田、吉瀬機未だ歸らず、一刻！ 二刻！ 勤務員全員西南の空を凝視しつゝ黙々たり。

既に燃料は盡きたる時刻に至りたるも機影を見る事能はず、中隊全員の不安は彌が上にも募りたり。佐野機は機體に數十の弾痕を受け安慶飛行場に不時着せりとの報あり。

二機は如何にせしや？

斯くして夜に入りたるも依然消息不明なり。

希くは友軍戦線内に不時着しありて後日君等の口より直接奇蹟の生還苦闘物語を聞ける日の速かならん事を祈る。

簡單ながら戦闘經過の概要を記し兩氏の奮闘を偲び健在であれかしと神かけて祈りつゝ本稿を擱く。



昭和十三年七月五日、〇〇隊部長安部大尉から、嚴父吉瀬桂三氏に於て、次の如き手紙が届いた。六月二十六日朝來斷雲片々として微風爽かに晴天なり。

鶴田大尉は〇〇戦闘機〇機の編隊隊長として揚子江上空警戒のため飛行基地を午前〇時十分頃出發安慶方向に向ふ。

第〇編隊長鶴田大尉、僚機佐野曹長、第〇編隊長遠部中尉、僚機吉瀬曹長何れも鋭くたる驅逐操縦者にして過ぐる江南の戦線及徐州會戦に抜群の功績を樹てたる猛鷲にして安部部隊自慢の空中戦士なり。

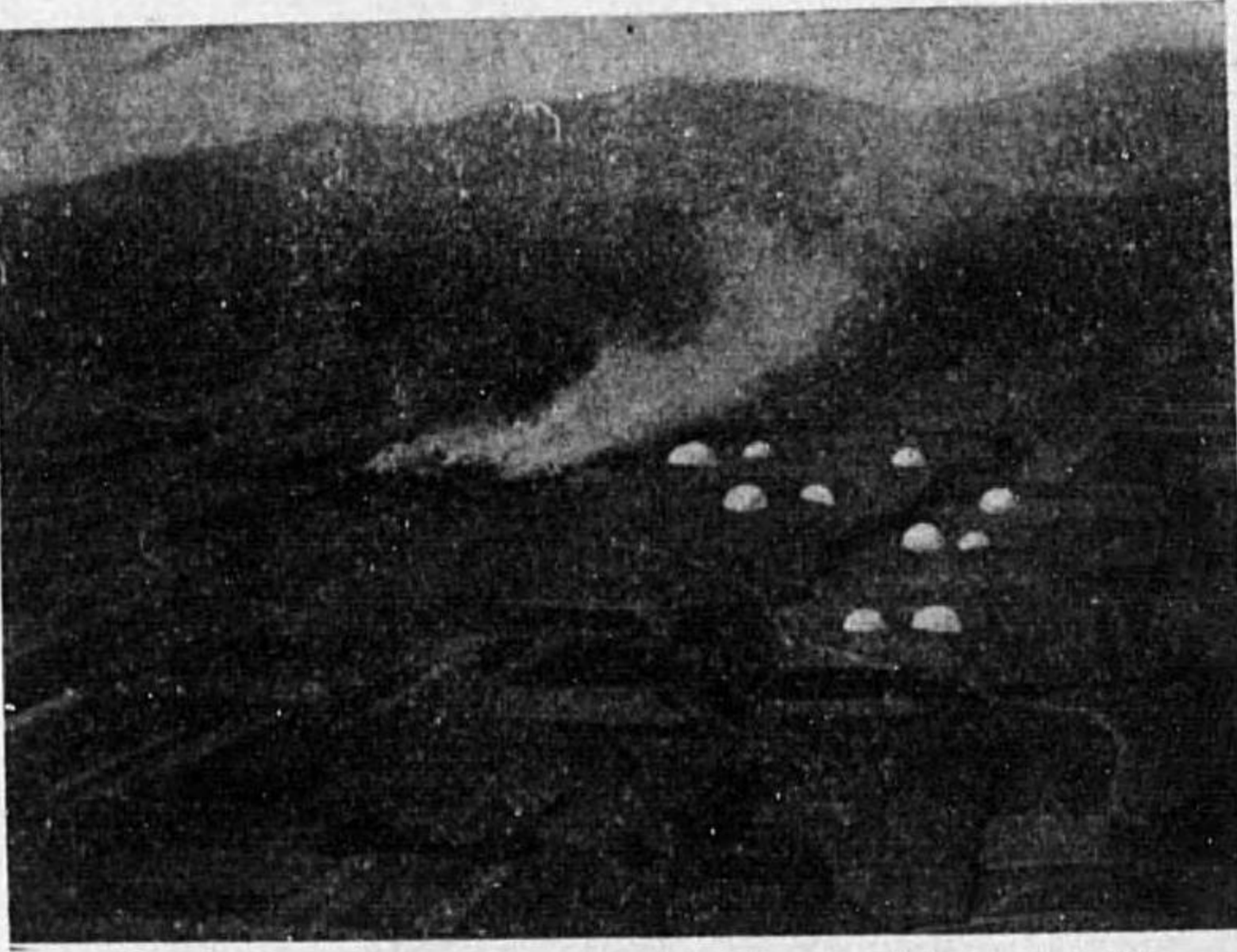
「エンチン」の快調を大陸の空に響かせつゝ悠々たる長江の流れを俯瞰して快翔約〇〇分間早くも〇〇要地上空に達す。

該地上空を制すること約二十分、遙かに其西南方に敵大型機一編隊の機影を認め轉編隊長鶴田大尉は猛然之の敵に向ひ攻撃前進を開始せり、續く佐野、遠部、吉瀬の勇士何條躊躇すべき。

敵も我の機影を認めしが其快速を利用して逃走せんとし、茲に爽快なる追撃戦となれり、羅針盤は南々西を指せり。

敵機の隠れ家は南昌か？ 苟にも空中に見えし敵機は「悉く之を撃墜せざれば止まず」とは驅逐操縦者の信念なり。

「エンチン」も毀れよと許り喰りあげ彼我の距離は刻々に短縮す、敵の飛行根據地南昌も指呼の間に迫りたる頃、不斗前下方斷雲の切れ間に遊弋中の敵戦闘機一群を見る二十數機なり、勇猛鶴田編隊の四機は敢然此の敵を強襲忽ちにして壯烈なる空中戦を展開す。



俯瞰すれば飛行場に待機中の敵戦闘機引き續き離陸上昇し來り群り挑戦す。

敵機總數四十餘機之に對する我は勇猛巧致鬼神の如しと雖も僅かに四機なり、一機二機三機と紅蓮の焰に包まれて落ち行く敵機を見る、されど多勢に無勢、何時しか我が友機も互に連繫を絶たれ

機影を見失ひて空中戦闘約二十五分間辛くも敵の重圍を切り抜けて無事飛行基地に歸還せるもの遠部中尉の一機なり。

佐野曹長は機體及燃料タンクに二十數發の敵弾を受け燃料の洩出甚だしけれども友軍戦線内飛行場に歸還し得たり、人無事。

嗚呼、されど！ されど！

鶴田、吉瀬の兩機は！ 二時間待てども機影を見せず、五時間待てども還らず夜に入れど消息なし

苦悶焦慮の數日間、空地を擧げて搜索せるも杳

として得る所なし。唯僅かに中國新聞に兩勇士の最期を報せると第三國新聞及日本新聞に「空の鬼神鶴田編隊」の大捷を報

じあるを認むるのみ。

敵機撃墜數確認せるもの九機。

遠部中尉三機、佐野曹長一機

鶴田大尉三機、吉瀬曹長二機、遠部中尉確認。

新聞の報する所によれば撃墜總數十數機とあり。

「空中のアス」鶴田、吉瀬兩勇士共少くも四五機は撃墜せるを確信す。

鶴田、吉瀬兩君共に資性極めて温厚熱心忠實にして諸人の愛敬を集む、一度空中に愛機を馳りては集の如く強豪機敏、典型的空中戦士なり。  
東洋平和の聖戦に尊き人柱となり護國の鬼と化せる空の鬼神吉瀬准尉の英靈に對し萬腔の敬意と感謝の意を表す。

昭和十三年七月五日  
吉瀬 桂三 殿

陸軍航空兵大尉 安部 勇雄

かく赫々たる武勳を樹てながら、惜しくも戦場に散つた、故吉瀬准尉は、昭和十一年一月、所澤陸軍飛行學校で技術を修得して、原隊臺灣〇〇飛行隊に復歸したが、その後同隊で行はれた、空中射撃競技会で、優秀な成績をおさめて優勝カップを獲得した。  
その後出動し、杭州上空の空中戦に於て敵機撃墜の状況を、長くも朝香宮殿下の御前にて奏上の光榮に浴した。

又柳川師團長の御前でも講演をなす光榮に浴し「陸の荒鷲」の偉才で〇〇隊の花形であつた。  
その遺族は、原籍地に嚴父桂三氏、母堂たまさん、長兄稔氏、令妹みちえさん、稔氏夫人かほるさん、稔氏長女はつさん、同次女さねさん、同長男毅君、大男稜善君の九人暮しである。

吉瀬桂陸軍航空兵准尉は、大正三年八月二十八日生れ、本籍地福岡縣浮羽郡大石村大字古川六四八番地の出身。

昭和四年三月、大石尋常高等小學校高等科卒業、同年大石村立青年學校入學。

昭和八年一月、十八歳で臺灣〇〇飛行隊に志願入隊す。

昭和九年十二月、任陸軍航空兵伍長、昭和十年三月、所澤陸軍飛行學校に入學。

昭和十年十二月、任陸軍航空兵軍曹。

昭和十一年一月、所澤陸軍飛行學校修業、現隊に歸る。

昭和十二年十二月、任陸軍航空兵曹長。

昭和十三年六月二十六日、南昌空中戦に於て戦死。  
同日任陸軍航空兵准尉。

遺族原籍地、嚴父吉瀬桂三氏。

〔寫眞説明〕二〇三頁故吉瀬桂准尉、二〇五頁爆撃を終つて歸る荒鷲右より三人目吉瀬准尉、二〇七頁粵漢線重要據點痛撃、二〇九頁瀘州南方部落爆撃、二一一頁落下傘で食糧、彈藥投下。

# 偉勳輝く陸の荒鷲

## 論功行賞殊勳一甲覽

自第一回——至第七回

### 第一回論功行賞 (昭和十三年四月二十四日發表)

◇陸の荒鷺部隊として山西、綏遠方面に對する作戰に協力、常に戦局を有利に導き昭和十二年九月廿一日太原上空に於て護國の華と散つた。  
功三級旭三等 陸軍航空兵中佐 三 輪 寬 (三重)

### 第二回論功行賞 (昭和十三年七月二十八日發表)

◇南京戦捷の華、功三級旭三等歩兵中佐見森高穂氏外九名殊勳甲と發表されたるも航空關係なし。

### 第三回論功行賞 (昭和十三年八月二十七日發表)

◇航空關係なし。

### 第四回論功行賞 (昭和十三年十月八日發表)

◇瀕死の重傷を負ひつゝ愛機を操縦し長驅歸還す。  
功五級旭六等 陸軍航空兵大尉 楠 山 米 助 (三重)  
◇河北の空を翔る陸の荒鷺。  
功四級旭六等 陸軍航空兵大尉 川 原 幸 助 (鹿児島)  
◇壯絶體當り空中の散華。  
功五級旭七等 陸軍航空兵准尉 齋 藤 利 三 郎 (埼玉)

### 第五回論功行賞 (昭和十三年十月十三日發表)

◇軍旗を擁して突撃を敢行す、功三級旭三等加納治雄少將(東京)以下八十三名殊勳甲と發表せらるも航空關係なし。

### 第六回論功行賞 (昭和十三年十月二十二日發表)

◇支那側放送、壯烈死に讃歌す。  
功四級旭五等 陸軍歩兵少佐 藤 林 保 之 (三重)  
功五級旭七等 陸軍航空兵准尉 村 上 益 (愛知)  
◇寸時を争ふ戦捷通報の爲、敢然數度の低空飛行。  
功四級旭五等 陸軍航空兵大尉 荒 木 田 轟 (茨城)  
◇南京上空に華と散りし陸の荒鷺。  
功四級旭五等 陸軍騎兵少佐 竹 本 守 美 (姫路)  
功五級旭六等 陸軍航空兵大尉 嶺 村 文 江 (山口)  
功五級旭七等 陸軍航空兵曹長 片 井 滋 夫 (福岡)  
◇空に偉勳を重ねて散華す。  
功四級旭五等 陸軍航空兵少佐 是 久 康 彦 (大分)  
功五級旭七等 陸軍航空兵少尉 上 野 源 吾 (福岡)  
◇山東の空に散る荒鷺。  
功四級旭四等 陸軍航空兵少佐 大 宮 錠 太 郎 (名古屋)  
◇壯烈敵中に自爆す。  
功四級旭六等 陸軍航空兵大尉 石 川 千 代 藏 (千葉)  
◇部隊長として愛機並に部下と最期を共にす。  
功三級旭三等 陸軍航空兵大佐 秀 島 正 夫 (佐賀)  
◇生死を超越して任務の爲め斃る。  
功四級旭五等 陸軍航空兵少佐 樋 口 孝 (三重)  
◇空に偉勳を重ねて散華す。  
功三級旭四等 陸軍砲兵中佐 成 瀬 薫 (宮城)

### 第七回論功行賞 (昭和十三年十二月二十七日發表)

◇山西戦線に殊勳を樹てた功三級旭三等の故行本勇陸軍歩兵中佐をはじめ七十六名殊勳甲と發表されたる



も航空関係なし。

### 第八回論功行賞 (昭和十四年三月十二日發表)

◇昭和の軍神戦車隊長陸軍大尉西住小次郎氏外二十三名殊勲甲と發表されたが、航空関係はなし。

### 第九回論功行賞 (昭和十四年四月十九日發表)

◇偉勳戰場に燦たり、功四級旭五等陸軍歩兵少佐佐藤幹介氏外四十名殊勲甲と發表されたが航空関係なし

### 第十回論功行賞 (昭和十四年四月廿七日發表)

◇山東に散る空軍の華。

功四級旭五等	陸軍騎兵少佐	牧野	威 (東京)
功四級旭五等	陸軍砲兵少佐	大内	稔 (東京)

◇中原の空を壓す陸の荒鷲。

功五級旭七等	陸軍航空兵准尉	永井	友雄 (埼玉)
功五級旭七等	陸軍航空兵曹長	高橋	三郎 (岩手)

### 第十一回論功行賞 (昭和十四年六月廿日發表)

◇航空関係なし。

### 第十二回論功行賞 (昭和十四年七月三日發表)

◇蘭州爆撃の華。

功四級旭五等	陸軍航空兵少佐	上田	虎雄 (島根)
功四級旭四等	陸軍航空兵少佐	二井	卓 (三重)
功五級旭六等	陸軍航空兵少尉	市川	英二郎 (静岡)
功五級旭七等	陸軍航空兵少尉	奥詰	高治 (大分)

◇大別山系突破作戦に殊勲を表せる陸の荒鷲。

◇支那事變關係第十三回論功行賞 (海軍は第九回) 發表されたるも陸軍関係なし。

### 第十四回論功行賞 (昭和十四年十月二日發表)

◇重慶、蘭州爆撃の勇士。

功五級旭七等	陸軍航空兵准尉	坂田	善明 (鹿児島)
功五級旭七等	陸軍航空兵准尉	寛	秀彦 (大分)

◇孤軍奮闘大空に散る陸鷲。

功四級旭五等	陸軍航空兵少佐	鶴田	静三 (福岡)
功五級旭七等	陸軍航空兵准尉	吉瀬	桂 (福岡)

◇山西防空の使命に斃る。

功四級旭六等	陸軍航空兵大尉	外村	義雄 (長崎)
功五級旭七等	陸軍航空兵曹長	原田	威治 (静岡)

### 第十五回論功行賞 (昭和十四年十月十六日發表)

◇卓抜なる機眼常に奏功の因をなす、功四級旭五等陸軍歩兵少佐福田常男 (熊本) 外五十七名殊勲甲として發表されたるも航空関係なし。

### 第十六回論功行賞 (昭和十四年十一月十五日發表)

◇南支の空に散る歴戦の勇士。

功五級旭七等	陸軍航空兵准尉	篠原	益登 (長野)
--------	---------	----	---------

第十七回論功行賞 (昭和十五年二月十日發表)

◇廬山西麓、徳安及び南昌作戦に偉勳を樹つ、功三級旭三等陸軍少將飯野賢十(東京)を初め、晝夜兼行力攻して、南京、南花臺砲臺を奪取す、功三級旭二等陸軍少將千葉小太郎(宮崎)兩閣下以下十五名に及ぶも航空關係なし。

◇然し一般行賞中には、かつて航研長距離機を驅つて二つの世界記録を作つて我が航空界の至寶と謳はれた藤田雄藏航空兵中佐(東京)高橋福次郎航空兵少佐及び兩勇士と共に中支線、沙洋鎮附近で壯烈な戦死を遂げた渡邊廣太郎陸軍少將(和歌山)も燦然と名を連ねて金鶏勳章叙賜の恩典に浴してゐる。

第十八回論功行賞 (昭和十五年三月二十七日發表)

◇徐州の空に偉勳輝く陸の荒鷲

功五級旭七等 陸軍航空兵曹長 井上善次(石川)

第十九回論功行賞 (昭和十五年四月二十五日發表)

◇積極果敢空地渾然一體の實を擧ぐ

功三級中綬章 陸軍少將 安部克巳(大分)

◇重慶、蘭州空襲の華

- 功四級旭五等 陸軍航空兵少佐 井關正夫(福岡)
- 功四級旭六等 陸軍航空兵大尉 山田忠夫(長野)
- 功四級旭六等 陸軍航空兵少尉 森清(福島)
- 功四級旭六等 陸軍航空兵准尉 小野寺大治(福島)
- 功五級旭七等 陸軍航空兵准尉 村上由吉(宮城)
- 功五級旭七等 陸軍航空兵准尉 倉田新平(静岡)
- 功六級旭八等 陸軍航空兵伍長 栗原武二(栃木)
- 功六級旭八等 陸軍航空兵伍長 松本忠左衛門(栃木)
- 功三級旭四等 陸軍歩兵中佐 平田勇吉(山口)

◇空に陸に殊勳を奏す

第二十回論功行賞 (昭和十五年六月一日發表)

◇感狀に輝く歴戦の荒鷲(病死殊勳甲)

功五級旭七等 陸軍航空兵少尉 正田福松(池田)

第廿一回論功行賞 (昭和十五年九月二十六日發表)

◇世界空軍史に燦として輝く「ノモンハン」空の勇士

- 功四級旭五等 陸軍航空兵少佐 増田巖(群馬)
- 功四級旭五等 陸軍航空兵少佐 本村孝治(東京)
- 功四級旭四等 陸軍航空兵少佐 島田健二(東京)
- 功四級旭四等 陸軍航空兵少佐 可兒才次(東京)
- 功四級旭五等 陸軍航空兵少佐 安西秀一(栃木)
- 功四級旭六等 陸軍航空兵大尉 安原三郎(金澤)
- 功四級旭六等 陸軍航空兵大尉 谷島喜彦(佐賀)
- 功四級旭六等 陸軍航空兵大尉 小泉正三(山梨)
- 功四級旭六等 陸軍航空兵大尉 伊藤俊(愛知)
- 功四級旭六等 陸軍航空兵中尉 本間富士雄(室蘭)
- 功四級旭五等 陸軍航空兵大尉 山口末雄(佐賀)
- 功四級旭六等 陸軍航空兵大尉 鈴木昇一(廣島)
- 功四級旭六等 陸軍航空兵少尉 篠原弘道(栃木)
- 功五級單光章 陸軍航空兵少尉 花田守(福岡)
- 功五級單光章 陸軍航空兵少尉 松下廣吉(東京)
- 功五級旭七等 陸軍航空兵准尉 加藤勝利(岐阜)
- 功五級旭七等 陸軍航空兵准尉 八木多仲(新潟)
- 功五級旭七等 陸軍航空兵准尉 元島宗義(熊本)
- 功五級旭七等 陸軍航空兵准尉 鈴木榮作(埼玉)

- 功五級旭七等 陸軍航空兵准尉 仲田 登志(栃木)
  - 功五級旭七等 陸軍航空兵准尉 木村 三郎(山形)
  - 功五級旭七等 陸軍航空兵准尉 芦田 正夫(千葉)
  - 功五級青色章 陸軍航空兵准尉 小林 太郎(東京)
  - 功五級旭七等 陸軍航空兵准尉 後藤 久助(山形)
  - 功五級旭七等 陸軍航空兵准尉 辰巳 清繁(愛媛)
  - 功五級旭七等 陸軍航空兵准尉 下村 久壽彦(高知)
  - 功五級旭七等 陸軍航空兵准尉 松本 良之助(萩)
  - 功五級旭七等 陸軍航空兵准尉 吉山 文次(鹿児島)
  - 功五級旭七等 陸軍航空兵准尉 小野 惠(香川)
  - 功五級旭七等 陸軍航空兵准尉 花田 富男(鹿児島)
  - 功五級旭七等 陸軍航空兵准尉 石川 顯(新潟)
  - 功五級旭七等 陸軍航空兵准尉 須藤 彌(東京)
  - 功五級旭七等 陸軍航空兵准尉 佐々木 武(長野)
  - 功五級青色章 陸軍航空兵准尉 石角 良二(奈良)
  - 功五級旭七等 陸軍航空兵軍曹 兒玉 高順(長野)
  - 功五級旭七等 陸軍航空兵軍曹 奥田 治郎(鹿児島)
  - 功五級旭七等 陸軍航空兵軍曹 高松 春二(福岡)
  - 功五級旭七等 陸軍航空兵大尉 森川 嘉一郎(福岡)
  - 功五級旭七等 陸軍航空兵准尉 納富 春由(佐賀)
- ◆江南に武勳輝く陸の荒鷲
- 功五級旭六等 陸軍航空兵大尉 森川 嘉一郎(福岡)
  - 功五級旭七等 陸軍航空兵准尉 納富 春由(佐賀)
- ◆友軍の危急を救ひ南支の空に散る
- 功四級旭六等 陸軍騎兵大尉 岩田 義正(東京)
- ◆夜暗の進攻六百軒、敵航空根據地を粉碎す
- 功五級旭七等 陸軍航空兵准尉 徳田 要三(京都)
- 第廿二回論功行賞 (昭和十五年十月十七日發表)

- ◆斃れて後止む陸の荒鷲
- 功六級旭七等 陸軍航空兵准尉 平山 富士雄(横濱)
- ◆ホロンバイル上空に猛る隼
- 功四級旭五等 陸軍航空兵少佐 山田 計介(山口)
- ◆ノモンハンに活躍せる陸鷲○○隊の諸勇士
- 功四級旭六等 陸軍航空兵大尉 菅原 幸七(宮城)
- 功四級旭四等 陸軍航空兵少佐 水崎 九十九(福岡)
- 功四級旭六等 陸軍航空兵大尉 中島 裁太郎(熊本)
- 功四級旭六等 陸軍航空兵大尉 原口 清(埼玉)
- 功五級單光章 陸軍航空兵少尉 猿渡 凡冬(熊本)
- 功五級單光章 陸軍航空兵少尉 入山 廣平(長野)
- 功五級旭六等 陸軍航空兵准尉 原田 孝次(神奈川)
- 功五級青色章 陸軍航空兵准尉 岩瀬 正一(山形)
- 功五級旭七等 陸軍航空兵軍曹 是川 元一(兵庫)
- ◆ホロンバイルの平原を震駭した○○隊の諸勇士
- 功四級旭五等 陸軍航空兵少佐 井上 二郎(高知)
- 功四級旭六等 陸軍航空兵大尉 根上 重喜(静岡)
- 功四級旭六等 陸軍航空兵大尉 三宅 志郎(廣島)
- 功四級旭六等 陸軍航空兵大尉 花形 昭美(東京)
- 功五級旭六等 陸軍航空兵准尉 内田 福美(福岡)
- 功五級旭七等 陸軍航空兵准尉 松崎 義夫(福岡)
- 功五級旭七等 陸軍航空兵准尉 沖浦 武雄(長野)
- 功五級青色章 陸軍航空兵准尉 伊藤 眞(長野)
- 功五級旭七等 陸軍航空兵准尉 小山 次男(愛知)
- 功五級旭七等 陸軍航空兵准尉 辻 菊雄(佐賀)
- 功五級旭七等 陸軍航空兵軍曹 石附 富衛(新潟)
- 功五級旭七等 陸軍航空兵軍曹 畦津 勳(福岡)
- ◆ノモンハン航空作戦の機務に参畫し不滅の功績を残す
- 功三級旭三等 陸軍航空兵大佐 島貫 忠正(仙臺)

### 第廿三回論功行賞 (昭和十五年十二月十四日發表)

◇畏き邊りでは、今次聖戦に赫々たる武功を樹てた英靈六千三十三柱に對し、陸軍として第廿三回の行賞の御沙汰あらせられた。

恩賞の榮に浴したものは、昭和十二年七月二十一日から、昭和十五年四月二十九日に至る期間、支那、滿洲、及び内地で死歿した、戦死四千三百九十八柱、病死一千六百三十五柱、そのうち金鷄勳章を賜はつたものは四千四百二十柱で、武人最高の榮譽である「殊勳甲」をもつて發表されたものは「身に負傷するも、殘兵を指揮し敵戦車を撃退す」との勳功により功三級、小綬章を拜賜した歩兵中佐生田華三氏(函館)以下三十一名である。その主なる戦闘はノモンハン及び北支、山西省で特に「殊勳甲」の勇士は滿、ソ國境の激戦に挺身、奮戦したものであるが、今回は航空關係はなかつた。

### 第廿四回論功行賞 (昭和十五年十二月二十八日發表)

◇江南の空に偉勳を留む

功四級旭六等 陸軍航空兵大尉 遠部 登久雄(廣島)

◇身を挺し屢々敵地深く潜入し有利なる資料を齎す

功四級旭六等 陸軍航空兵大尉 川上 敏雄(千葉)

◇ノモンハン空の三勇士

功五級旭七等 陸軍航空兵少尉 南 雲 武行(新潟)

功五級青色章 陸軍航空兵准尉 竹内 克行(愛知)

功五級旭七等 陸軍航空兵准尉 伊藤 光木(福岡)

### 第廿五回論功行賞 (昭和十六年二月十日發表)

◇奥地進攻の猛鷲三勇士

功五級旭七等 陸軍航空兵准尉 黒野 藤嗣(愛知)

功五級旭七等 陸軍航空兵准尉 矢吹 吉彦(福島)

功五級旭七等 陸軍航空兵准尉 野中 滿雄(佐賀)

◇蒙古荒原に散る山西の荒鷲

功四級旭六等 陸軍航空兵大尉 今給黎 俟一(鹿児島)

◇河北、山西の大空に轉戦する陸鷲

功五級旭六等 陸軍航空兵少尉 藤井 清吉(岩手)

◇地上整備員中の華

功五級旭七等 陸軍航空兵少尉 飯田 彌三郎(北海道)

### 第廿六回論功行賞 (昭和十六年四月二十五日發表)

◇今次事變に赫々たる武功を樹て戦歿の三千五百二柱に對し畏くも恩賞の御沙汰を拜した。

この勇士は昭和十二年七月十日から、昭和十五年四月二十九日までの戦(傷)死者五百四十六柱、病死二千九百五十六柱で、北支、山西、河北、中支の揚子江流域、廣東、廣西の諸作戦に於て護國の華と散つたものである。

その中で、第一線中隊長として、各地に轉戦常に部隊の中堅となつて、拔軍の功を樹て、普東作戦には自ら機銃裝填手となつて應戦中、惜しくも散華の松原石人歩兵少佐(島根縣松江市出身、功四級小綬章)以下十名が「殊勳甲」と發表されたが、航空關係者なし。

### 第廿七回論功行賞 (昭和十六年六月十一日發表)

◇畏き邊りでは、今次聖戦に偉勳を樹てた護國の英靈六百九十一柱に對し行賞の御沙汰があらせられた。

光榮の英靈は戦(傷)死五十八柱、病死六百三十三柱で、事變勃發の昭和十二年七月二十九日から、昭和十五年四月二十九日までの間に、北支、中支、南支の各戦野でそれ／＼赫々たる武功を樹てた勇士で、そのうち金鷄勳章授賜者は六十七柱である。

更に武人最高の榮譽である武功卓越にして「殊勳甲」に輝くものは一人で、それは敵前至近の距離に陣地進入し、死傷者續出するも毅然として機銃の威力を發揚、友軍の突撃を成功せしめた他、各地を轉戦し幾多の偉功を樹て昭和十五年四月二十日瓦壘溝の戦闘で壯烈散華した岡崎敏夫陸軍大尉(香川出身)で功五級旭五等を拜賜したのみであつた 従つて航空關係なし。

昭和十六年六月十日

憲兵司令部檢閲済

『陸の荒鷲殊勳甲前篇』

奥付

昭和十六年八月一日印刷  
昭和十六年八月八日發行

(非賣品)

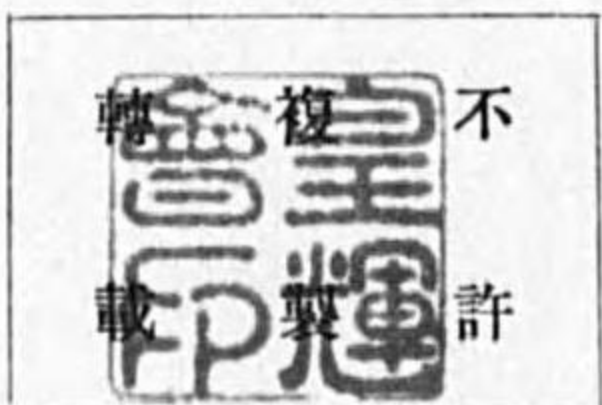
編纂 皇輝會本部

會長 陸軍中將 松井七夫

編輯發行 兼印刷人 東京市麴町區飯田町二ノ六ノ五  
風間 鐵太郎

印刷所 東京市神田區鎌倉町一ノ七  
三共舎印刷所

發行所 東京市麴町區飯田町二ノ六ノ五  
皇輝會  
電話九段(33)一三二一番



社団法人 日本出版文化協會  
會員 電話二一〇〇二八

418  
129



終